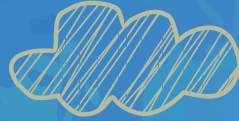


一橋大学の「今」がわかる広報誌

# HO 2024

Captains of Industry



“Like-Minded”な大学同士として、  
一層の連携強化へ

【対談】  
ウーイン経済大学長／エーデルトラウト・ハナツピエッガー氏  
一橋大学長／中野 聡

1

コントロールできないことに遭遇することが人生。  
若い人には、生き急がずに、  
あえて寄り道を経験してほしい

6

【対談】

三井住友銀行 頭取CEO／福留朗裕氏  
一橋大学理事・副学長／大月康弘

新任者メッセージ

10

Innovation

「ひとつひとつ、社会を変える。」  
創立150周年記念事業が始動

11

一橋大学長／中野 聡  
一橋大学理事・副学長／大月康弘

Global Report

一橋大学を舞台にしたSIGMA初の  
国際共同シンポジウム  
中国人民大学との  
相互対面交流を再開

14

Bridges

多様な価値観に触れ、自己成長を実現する  
一橋の留学

18

People

映画監督／三宅 唱氏

20

1



6



14



18



20



38



51



一橋の授業

【商学部】  
経営戦略論・経営組織論／佐々木将人ゼミ

26

【経済学部】  
比較経済史

28

【法学部】  
憲法（総論・人権）

30

【社会学部】  
地理学（人文地理学）

32

【ソーシャル・データサイエンス学部】  
ソーシャル・データサイエンス入門Ⅱ

34

Innovation

ソーシャル・データサイエンス学部・研究科、  
交流拠点を整備

36

誰もが気軽に立ち寄れる場所に、  
ダイバーシティ推進室

38

研究室訪問 chat in the den

経営管理研究科国際企業戦略専攻教授／藤川佳則

40

法学研究科教授／小林一郎

42

社会学研究科講師／佐藤圭一

44

言語社会研究科准教授／有賀暢迪

46

時代論 論点

人の流れから都市の姿を描く

48

経済学研究科准教授／藤嶋翔太

つなぐつなげる一橋

自分を形作る価値観と

仲間が得られる大学です

51

Campus Information

◆一橋大学基金ご寄付者のご芳名

56

# “Like-Minded”な大学同士として、 一層の連携強化へ

対談

一橋大学の国際交流協定締結校であり、一橋大学も参画している  
グローバルな大学連合「SIGMA」※1 (Societal Impact & Global Management Alliance) の  
創立メンバーでもあるウィーン経済大学。

その学長であるエーデルトラウト・ハナッピエッガー氏 (以下、ハナッピ学長) が、  
2023年5月に本学佐野書院で開催されたSIGMA学長会議で来日された機をとらえ、  
本学の中野学長との対談を行った。

ハナッピ学長の経歴やSIGMAの意義、一橋大学への期待などについて語り合った内容をお届けする。

※1 SIGMAに関する過去の記事はこちらから  
[https://www.hit-u.ac.jp/hq-mag/global\\_report/384\\_20200629/](https://www.hit-u.ac.jp/hq-mag/global_report/384_20200629/)



一橋大学長  
中野 聡

## Satoshi Nakano

1983年一橋大学法学部卒業。1990年一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程単位取得退学。1996年博士 (社会学・一橋大学)。研究分野は地域研究、アメリカ史、フィリピン史、日本現代史。1990年神戸大学教養部専任講師、同大学国際文化学部専任講師、助教授を経て、1999年一橋大学社会学部助教授、2003年同大学大学院社会学研究科教授を歴任。2014年同大学大学院社会学研究科長、2016年同大学副学長を経て、2020年一橋大学学長に就任。主著に『歴史経験としてのアメリカ帝国—米比関係史の群像』(岩波書店、2007年、大平正芳記念賞)、『東南アジア占領と日本人』(岩波書店、2012年)、Japan's colonial moment in Southeast Asia, 1942-1945 : the occupiers' experience (Routledge, 2018) 等。歴史学研究会元事務局長、日本学術会議連携会員、日本歴史学協会常任委員、国立大学協会会長補佐、日本産学フォーラム委員。



ウィーン経済大学長  
エーデルトラウト・ハナッピエッガー氏

## Edeltraud Hanappi-Egger

1987年ウィーン工科大学コンピュータサイエンス研究科修士課程修了。1990年同大学大学院工業科学研究科にて博士号 (Ph.D.) 取得後、ストックホルム大学 (スウェーデン)、トロント大学 (カナダ) の客員研究員、ウィーン工科大学 (オーストリア) の次席研究員を経て、1992年同大学デザインおよびソフトウェア工学研究所准教授に就任。1996年同大学応用コンピュータサイエンス准教授に就任。2002年ウィーン経済・経営大学経営学部客員教授を経て、2004年同大学教授に就任。2015年同大学初の女性の学長に就任。現在に至る。主な著書にThe Triple M of Organizations: Man, Management and Myth (Interdisciplinary Studies in Economics and Management)/2011/Springer-Verlag New Yorkがある。

※役職は2023年5月対談時点のものとなります。



## コンピューターサイエンスから ジェンダー研究へ

**中野** 本日は、ウイーン経済大学のエーデルトラウト・ハナツピエッガー学長をお迎えしました。ウイーン経済大学とは国際交流協定締結校として大変良好な関係が続いているとともに、SIGMAの加盟校としての関係も構築しています。ハナツピ学長には本学が国際アドバイザリーボードを設けた際に、3人のメンバーのうちの1人として就任していただきました。コロナ禍もあり、これまでじっくりお話しする機会が持てずにはいましたが、本日はこうした機会が持てたことを大変嬉しく思っています。

**ハナツピ** ありがとうございます。私も大変嬉しく思います。



**中野** まず、ハナツピ学長のご略歴からお聞かせいただけますか。

**ハナツピ** 私はコンピューターサイエンスに関心があったため、カナダやスウェーデンの大学で学んだ後、1990年にウイーン工科大学で博士号を取得しました。また、その博士論文でウイーン工科大学Herzka論文賞を受賞しました。その研究の傍ら、世の中のジェンダーの状況に問題意識を持つようになり、今では、組織におけるジェンダーとダイバーシティが私の専門領域となっています。

**中野** 初めからジェンダーを研究されていたわけではなかったんですね。

**ハナツピ** そうです。システム開発やワークフローモデリングなどの研究を行い、ストックホルム大学、トロント大学、オスロの福祉労働研究センター、ニューメキシコ州のサンタフェ研究所、フランクフルト大学、そして最近ではLSEなどの国際研究機関で客員教授を務めていました。私の研究では、多くの組織研究を行う必要があります。大規模なジェンダーダイナミクスを観察しました。その経験を通じて、コンピューターモデルにおけるジェンダーステレオタイプを回避することに興味を持つようになりました。

## ウイーン最大の病院での ワールドワーク

**中野** 組織におけるジェンダーについては、どういった研究をされたのでしょうか？

**ハナツピ** 私が手がけた最初の大規模な研究プロジェクトは手術計画に関するもので、ウイーン最大の総合病院で手術計画とワークフロー管理の効率化に取り組むワールドワークを行いました。その結果、複数の



異なる種類の専門家が協力するときに問題が発生することが明らかになりました。ジェンダーに応じてタスクが割り振られ、それによって可視性にも違いがあったのです。

もう一つは、手術を行う外科医と麻酔医の間の協力関係と時間管理についてです。全身麻酔をかけるタイミングは、普通は外科医が手術室に入ってきてから行うものとされています。ところが、その病院の外科医の多くは、麻酔がかかるまでの待ち時間が非効率であ



ると不満を言っていました。外科医が手術室に入るときには麻酔がかかっている、すぐに手術を始められるようにしてほしいというわけです。一方、麻酔医側の言い分としては、外科医がいつ手術室に来るのかわからない。その時間をめぐって双方の認識に隔たりがあったので実査してみると、麻酔医のほうが正しかったという結果が出ました。これは、ワークフロー管理において組織の問題が重要な役割を果たしている一例です。

**中野** 外科医の認識には、麻酔医よりも職位が上だというアンコンシヤスバイアスがあったということですね。

**ハナツピ** そしてさらには、患者さんの準備や手術室の清掃といった「女性」の仕事の重要性を無視する無意識のジェンダーバイアスがありました。ジェンダー意識は世の中の随所であり、ジェンダーだけでなく、職務に基づくバイアスもあるということですね。

## 「組織のトリプルM」

**中野** ハナツピ学長がお書きになって2011年に出版された「組織のトリプルM：人間、経営、神話（経済学とマネジメントにおける学際的研究）」を大変興味深く拝読しました。

**ハナツピ** ありがとうございます。「トリプルM」とは、タイトルのとおり“Man”“Management”そして“Myth”のことです。この本は、経営と組織に関するジェンダーの議論で頻繁に使用される重要なイシューを特定し、それらが神話であること、そして、その神話は女性にとつての障壁を生み出し、男性のプロフェッショナルの力を増強することを明らかにしようとしたものです。

**中野** 私がもう一つ感心したのは、著書の各チャプターの扉にシエークスピアの言葉が引用されていたことや、序論がウィーン出身の経済人類学者のカール・ポラ

ンニーの引用から始まることです。ハナツピ学長の博識ぶりがかがえました。

**ハナツピ** ありがとうございます。

## 学生にいかにお勉強させるか

**中野** そんなハナツピ学長に同じ学長としてもう一つ伺いたいのは、大学経営のことです。本学は、概ね全収入の半分が国からの運営費交付金、4分の1が学生納付金、残り4分の1が寄附金等の外部資金です。貴学はいかがでしょうか？

**ハナツピ** 本学の場合は、国からの交付金が8割以上を占めています。ただしこれは一括払いで、省庁との履行契約に基づいて、お金をどのように使うかは私たちが自主的に決めることができます——もちろん、法的枠組みの範囲内ではありますが。本学は授業料が無料なので、オーストリアを含むEU圏からの学生は授業料無料で学ぶことができます。

**中野** それは凄いですね。では、EU圏外からの留学生は？

**ハナツピ** 700ユーロぐらいですから、それほど高くはありません。

**中野** 11万円程度ですね。経済的なご苦労はあまりないように思いますが、どういったことが課題であるとお考えでしょうか？

**ハナツピ** いかに学生がやる気をもって勉学に取り組み、卒業できるようにできるか、ですね。というのは、私たちは学生にコースの受講やプログラムの修了を

強制する手段を持っていないのです。

**中野** 分かる気がします。私が一橋大学の学生だった70年代終わりから80年代にかけては、授業料は年間10万円前後であったと思います。元を取らなければならぬといった感覚はなく、学業以外のことに精を出す一つの要因になっていたと思います。現在は年間60万円強になっていますが、今日の学生が勉強するようになった背景の一つになっていると思いますね。

## “Like-minded universities”の経緯と一橋大学への期待

**中野** さて、SIGMAについても伺っていきたくと思います。貴学をはじめとする、世界各地の「似たもの同士」＝「Like-minded」の9大学（シンガポール経営大学、ザンクト・ガレン大学（スイス）、コペンハーゲン経営大学（デンマーク）、パリ・ドフィーン大学（フランス）、ESADEビジネス・スクール（スペイン）、ジェトゥリオ・ヴァルガス大学（ブラジル）、中国人民

大学（中国）が、研究・教育面での交流と連携を一層強化し、世界における存在感を高めていくことを目指す試みであるSIGMAですが、“Societal Impact & Global Management Alliance”の名称は、大学が発信する知の社会的なインパクトを重視するとともに、狭義の経営管理を超えて社会・経済・政治・地球環境をも含めた広義のグローバルな領域におけるマネジメントをめぐる諸問題を考究しようとするスピリットを表



“Like-Minded”な大学同士として、一層の連携強化へ

現したものです。そこで、9大学の学長の中でSIGMA創立時からのメンバーであるハナツピ学長にまず伺いたいことは、SIGMAの前身となったアライアンスが「Like-minded universities」となった経緯についてです。

**ハナツピ** 設立メンバーがどんな大学をアライアンスに誘うべきかを議論した際に、あいまいな形にすべきではなく具体的な価値を持つネットワークにすべきとの議論になりました。そこで「Like-minded」な大学を集めようという話になったのです。つまり、優先事項や価値観を共有できることを重視しました。その優先事項とは、研究を重視し、将来のリーダー育成に当たっては研究成果に基づいた教育を行うことです。また、私たちはサステナビリティにもコミットしています。たとえばビジネスコースでは経済論や企業論ももちろ



ん扱うけれども、サステナビリティにおいて社会にどのようにインパクトを与えるかも重視します。こういったことへの理解があり、その価値を共有している大学がSIGMAには集まっていると言えます。

**中野** 「将来のリーダー」を「研究成果に基づいた教育」で育成していくことは本学にとっても、創立以来のアイデンティティとも言える精神で、まさに「Like-minded」だと共鳴します。では、これからのSIGMAに対して期待していることはどういったことでしょうか？

**ハナツピ** SIGMAは小規模だけでも大変力強いネットワークを持つアライアンスだと思います。前述のとおり設立当初からマインドが似ている大学が集まっていますから。そして今、世界の国々はサステナビリティという共通の大きな課題を抱えています。この課題を解決していくこともSIGMAのスタート時の目標のひとつです。こうした意識をさらに高め、行動していくことを期待しています。たとえば、SIGMAのメンバーは、サステナビリティ、そして最近で

はデジタル・トランスフォーメーションに特化したコースを作成するために教員のグループを組織しました。また、学長会議に挙げる議題としても取り上げて、大学経営の観点から解決策を話し合うことができているなと思っています。

**中野** では、SIGMAのメンバーでもある本学への期待についてもお聞かせください。

**ハナツピ** 一橋大学はSIGMAの非常に重要なメンバーだと思います。ウィーン経済大学とも10年間に及ぶ強固な関係が続いています。一橋大学に留学した学生の感想からは、勉強した学術的トピックのことはもちろん、個人的な成長についても実感している様子が見えます。

**中野** どのような感想でしょうか？

**ハナツピ** まずは異文化を感じられたということが大きいようです。そこから多くのことが学べたと話しています。よく言われることですが、日本人は総じて礼儀正しく、そこはもっと学ぶべきだと話していました。交換留学生として一橋大学にホストしてもらったことは誇りであるとも話しています。

また、学術面ではいろいろな興味に応じて、単位を取得しなければならぬので多くの科目を履修したいわけですが、その点、英語の講義がもつとあると嬉しいといったことも話していました。

**中野** なるほど。私も以前、貴学からの留学生も含めた外国人留学生が半数を占める授業を英語で実施しました。日本やオーストリアについての話をしたり、グループワークを行ったりしましたが、学生にも刺激になったようです。私も教員としてとても楽しかったです。そのような経験ができる学生を増やすべく、もっと英語の授業を増やしたいと思います。

**ハナツピ** ぜひそうしてください。期待しています。



“Like-Minded”な大学同士として、一層の連携強化へ



## 日本人留学生に 経験してほしいこと

**中野** 逆に、本学からの留学生に接することはありませんか？

**ハナツピ** 私が直接接する機会はあまりありませんが、担当副学長や学部長などから必ず報告書を上げてもらって目を通しています。一橋大学に限らず、どの提携大学とも、連携がうまくいっているか、留学に出す学生と迎える学生のバランスはどうかといったこともチェックしています。そして私たちは、本学への留学生の感想も必ず読みます。そうした中で、一橋大学からの留学生からは「歓迎されている」や「異文化の中で多くのことを学んでいる」などと素晴らしいフィードバックをもらえています。担当教授からも好意的なコメントが多く、一橋大学とはいい関係性を構築できていると感じますね。

**中野** 日本人留学生には、1年の間にどんな経験をしてほしいとお考えですか？

**ハナツピ** まずは本学の素晴らしいキャンパスを楽しんでほしいですし、いろいろな学生と出会ってほしいと思います。ウィーン経済大学の修士課程は約半数ほどが中央および東ヨーロッパを中心とする国外からの留学生が占め、たとえば、国際税務や金融を専攻する博士課程の学生は、ほぼ90%が国外からの学生です。

それから、ウィーンという街は文化的にも景観的にも日本人に楽しんでもらえる素晴らしいところがたくさんあるので、それを堪能してほしいです。たとえば、オペラ。ウィーンのいいところはチケット代が安価で学生にも気軽に買える値段なので、ぜひ観てほしいですね。そのほか、博物館や美術館、コンサートホール

もたくさんあります。それから、1月にはウィーン経済大学で舞踏会が開かれ、いろいろな国からの学生たちと交流できるチャンスがあります。中野学長にもぜひお越しいただきたいと願っています。

**中野** ありがとうございます。ぜひ、一度行きたいですね。

## 一橋大学の 創立150周年に向けて

**ハナツピ** 一橋大学はもうすぐ創立150周年を迎えるそうで、心よりお祝いを申し上げます。今後もさらに関係を強化し、SIGMAへのコミットメントだけでなく、ウィーン経済大学との二校間の協力関係をさらに強化していきたいと思えます。たとえば、研究者の交流派遣や共同研究などは推進していきたいですね。

**中野** ありがとうございます。おっしゃっていただいたように、本学は2025年に創立150周年を迎えます。これまで伝統としてきたことも、ハナツピ学長がおっしゃるLike-mindedのとおり、指導的人材の育成と社会課題の解決に貢献する研究大学という二つのことが挙げられます。日本国内でこのような伝統を持つ大学を探すのは難しく、特に国立大学においてはほかにないと自負しています。

**ハナツピ** そうなんですね。

**中野** 私のSIGMAへの関わりは、2016年に当時の蓼沼学長とともに国際担当副学長としてシンガポール経営大学で行われたカンファレンスに出席したことが最初です。その時の議論の内容をよく覚えていますが、世界に本学とLike-mindedな大学があることを大変嬉しく感じました。その意味でも、本学にとって

SIGMAのアライアンスは非常に重要な意味を持ってきたと思います。今回、この東京でSIGMAの学長会議やシンポジウムを開催できることを大変光栄に感じておりますし、ありがたいことだと思っています。私としても、今後のSIGMAの発展とともに、貴学との関係強化を強く願っています。

**ハナツピ** 今回の会合を開催していただき、誠にありがとうございます。私もまったく同感です。





# コントロールできないことに遭遇することが人生。 若い人には、生き急がずに、 あえて寄り道を経験してほしい

対  
談

2023年4月に三井住友銀行頭取に就任した福留朗裕氏。2024年4月からは全国銀行協会の会長にも就任することが内定し、まさにわが国のトップバンカーとして活躍中である。三井住友銀行における5か所・16年間の海外勤務を通じて、アジア通貨危機、リーマン・ショックを経験し、転出先のトヨタファイナンシャルサービスではサブスクリプションサービス「KINTO」の立ち上げに携わるなど、ユニークなキャリアの持ち主でもある。そんな福留氏と、大学同期の大月康弘理事・副学長が、体育会やゼミでの経験、これからの若い世代に期待することなどについて大いに語り合った。



一橋大学 理事・副学長

## 大月康弘

Yasuhiro Otsuki

1985年3月一橋大学経済学部卒。一橋大学経済学部助手、成城大学経済学部講師、同大学経済学部助教授を経て、1996年一橋大学経済学部助教授。パリ第一大学客員研究員、一橋大学大学院経済学研究科助教授を経て、2006年一橋大学大学院経済学研究科教授。2015年経済学研究科長、2018年一橋大学附属図書館長等を経て、2020年一橋大学理事・副学長。専攻分野は、経済史、西洋中世史、地域研究。近著に『ヨーロッパ史 統合と拡大の力学』（岩波新書、2024年）など。

三井住友銀行 頭取CEO

## 福留朗裕氏

Akihiro Fukutome

1985年3月一橋大学経済学部卒。1985年4月株式会社三井銀行入行。株式会社三井住友銀行本店上席調査役 カナダ三井住友銀行 社長兼米州営業第一部部付部長（トロント）兼米州営業第三部部付部長（トロント）、市場資金部長、本店営業第六部長、執行役員本店営業第六部長、常務執行役員 名古屋営業部担当等を経て、2018年トヨタ自動車株式会社常務役員 販売金融事業本部本部長、トヨタファイナンシャルサービス株式会社代表取締役社長に就任。2021年株式会社三井住友銀行専務執行役員、株式会社三井住友フィナンシャルグループ執行役専務に就任。2023年株式会社三井住友銀行頭取CEOに就任。

## 地元・岐阜を飛び出して、 国立という街で学生生活を送りたかった

大月 今日はお忙しい中、取材にに応じてくださりありがとうございます。ございます。まずは福留さんのご経歴から教えていただけますでしょうか。ご出身は岐阜県だそうですね。

福留 生まれも育ちも岐阜県岐阜市です。引越などもなく、ずっと同じところに住んでいました。高校は県立の岐阜高校です。大学進学にあたってはまず「岐阜を出たい」と考えていたのです。岐阜高校からは名古屋大学に進む人が多かったのですが。

大月 名古屋大学ですと、自宅から通えますね。

福留 しかしながら、私は東京の大学を受験しようと考えました。数学は得意なほうでしたが、文系・理系で分けるなら「自分は文系だろう」ということで、一橋大学を候補に選びました。そして高校2年生の夏休みに、国立に下見に行きました。実は都立国立高校が夏の甲子園に出場する（1980年）まで、ぐにたち」という読み方は知りませんでした。降り立った国立の街は素敵な場所です。「ここで学生生活を送りたい」と思いましたね。つまり岐阜を出るため、そして国立の街で学生生活を送るために一橋大学を選んだわけです。

大月 ご両親の反応はいかがでしたか。

福留 父も国立大学出身で、国立大学に対する強いこだわりを持っていました。これはあくまでも当時の風潮の中での話ですが、父としては「国立でなければいかん」と。厳しい制限を受けまして、私立の受験は1校1学部のみで、国立は一橋大学の一択でした。一生懸命勉強をして入りました。

## アイスホッケー部の活動を支えるための アルバイト経験が、現在に活かしている

大月 経済学部に入られて、アイスホッケー部に入部されたのも1年生の時でしょうか。

福留 そうですね。実は、初めに練習を見に行ったのはバスケットボール部でした。中学・高校とやっていたのです。ただ、ものすごく背の高い学生がたくさんいて、ハードな練習をして

いたので圧倒されました。比較的身長が低い人が任されるポイントガードでも、私より大きい。これはもう通用しないと断って、すぐに諦めました。そこで、誰もが同じスタートラインに立てるスポーツをやろうと考え直し、アイスホッケー部を選びました。アイスホッケー部の部員はほとんど素人からスタートしていましたから、「4年生になるまでには試合に出られるようになるだろう」と。

大月 そうだったのですか。当時アイスホッケー部は何名ぐらいで活動していたのですか。

福留 私の同期は7名です。部全体で、20名ぐらいだったと記憶しています。これは入部してから分かったことですが、当時アイスホッケー部は創部9年目の若い部だったのです。歴史ある名門部に比べて卒業生が少なかったため、財政的に厳しかったですね。アイスホッケーはお金がかかるのですが、リンクを借りるにも防具などを揃えるにも、自分たちでアルバイトをして賄っていました。アルバイトのお金はすべて部活のために使い、合宿の費用にも充てましたね。

大月 かなりアルバイトを経験されたこと伺っております。その辺りのお話も教えてください。

福留 家庭教師のアルバイトをベースにしながら、製パン工場のライン作業に入ったり、プロ野球の球場でボール拾いをしたり、夜間はコンビニエンスストアでレジを担当したり……。本当にいろいろですね。アルバイトをしていた企業の経営者の方々とも今になってお会いしたときに、当時の話をするとても喜んでくださいますよ。

大月 それは喜ばれるでしょうね。

福留 まだあります(笑)。宅配便の配送所のアルバイトもしていたので、いざれ経営者の方にお会いしたときにはその話をするつもりです。そうやって部員間で分担しながら活動費を工面していたアイスホッケー部でしたが、今年（2023年）創部50周年を迎えました。先日は記念会に参加してきました。私を含め支援する卒業生が50年分いるわけですから、今の部員の皆さん

は恵まれていると思いますよ。

大月 50周年は素晴らしい。私のゼミにもアイスホッケー部の諸君が入ってきますが、みな素晴らしい学生たちで感心しています。今後もアイスホッケー部が発展していくことを願うばかりです。

## 国際経済を学ぶために入った 池間 誠先生のゼミ

大月 ところで福留さんは、3年次に池間 誠先生（一橋大学名誉教授、故人）のゼミに所属しておられましたね。

福留 選んだ理由は三つあります。まず、漠然と「インターナショナル」というものに憧れを持っていたので、国際経済学がご専門である池間先生のゼミに入りたいと思いました。また、池間先生は当時若手でしたので、その点にも魅力を感じました。三つ目は……私のように成績がパッとしない学生でも、池間ゼミは受け入れてくれたからです(笑)。

大月 それはそれは。

福留 アイスホッケー部の2年上の先輩が池間ゼミに入っていて、面接のコツを教えてくださいました。池間先生は体育会の学生がお好きだったので、先輩のアドバイスをもとに面接でうまくアピールしたら、ゼミに入れてくださいました。

大月 私はその頃、池間先生には授業でお世話になっていました。ちなみに池間先生は、後に柔道部の部長をお務めになりました。われわれの頃は荒憲治郎先生（一橋大学名誉教授、故人）でしたが、荒先生が1989年に退官されたあと引き継がれて、2005年まで部長をお務めでした。その後を私が引き継いでいるのです。

福留 そうでしたか。

大月 先ほどアイスホッケー部の50周年記念会に出席されたと伺いましたが、池間ゼミの卒業生の会は頻繁にやっていたらっしゃったのですか。

福留 やっていたのでしようけれど、私は海外駐在が長かったのほとんど出席できませんでした。参加できたのは2、3回でしようか。池間先生が亡くなられてから、しばらく途絶えていたように





す。ただ、最近徐々に再開しているようで、先日、面識のない卒業生の方からゴルフコンペのご連絡をいただきました。私がおかしの取材で池間ゼミ出身であることを話していたからでしょう。機会があればぜひ参加したいと考えています。

## ゼミで学んだ知見を活かすために 金融の世界へ

大月 福留さんの就職活動は1984年ですね。もともと金融を志望されていたのですか。

福留 いえ、業種や職種を絞る決断はできませんでした。当時の日本は、半導体、自動車、家電などさまざまな分野で世界を制していましたが、「このプロダクトに一生を賭ける」という決意が固まらなかった、というのが正直なところですね。たとえば自動車業界に進むとして、「クルマに一生を……！」と思えるほどクルマ好きかと言えば、そういうわけでもない。幅広くビジネスを見渡すという意味では、商社も考えましたが、やはり金融がいいだろうと。それから、池間ゼミの一つ上の先輩に（当時の三井銀行「現・三井住友銀行」に）引き込まれたということもあります。また、国立駅の南口に、三井銀行の国立支店があり、とても良い印象で、すぐに口座を開きました。実はほかの都銀からも内定をいただいていたのですが、そういった理由から三井銀行に迷わず入行しましたね。

大月 これまでのキャリアを拝見すると、国際畑と言いますが、海外勤務が多かったようですが。

福留 英語漬けの池間ゼミで国際金融を学んだことが大きかったですね。インターナショナルマネタリーリレーシヨンスという分厚い原書を2年かけて輪読してましたから。貨



幣、貿易、為替、関税……。

大月 まさに国際金融の世界ですね。

福留 そうですね。ゼミで学んだことは銀行の海外業務にとっても近かったのだ、自然に「せっかく勉強したのだから、海外業務をやってみよう」と考えるようになりました。ただし、入行してはじめての6年はドメスティックでした。赤坂支店、京都支店で業務を経験するうちに、国内の中小企業金融に惹かれていきまして。海外志望で入行したことを忘れるほどのめり込みました。とにかく仕事が楽しいと思っていたら、急に市場部門に異動です。為替や金利など、まさに池間ゼミで学んだことを活かせる部門で、そこから海外を転々とするキャリアがスタートしました。

## 行内でも珍しかった

### 5か所・16年間の海外勤務

大月 海外勤務は、主に北米ですか。それ以外の国・地域にも駐在されたのですか。

福留 いろいろでした。ロンドンに1年、いったん帰国してから香港が6年、上海が2年、ニューヨークが5年、そしてトロントが2年。香港からの15年間はまったく日本に帰任することなく、一貫通で海外勤務です。当時はまだインターネットは普及していませんでしたから、自ずと池間ゼミの皆さんと疎遠になってしまいました。先ほどお話ししたように卒業生の会にも参加できませんでした。高校や大学の友人とも連絡が途絶えてしまいました。向こうからすれば完全に行方不明だったでしょう。

大月 15年間ずっと海外というのはすごいですね。それは当時の御行では普通だったのでしょうか。

福留 15年かけて（香港・上海・ニューヨーク・トロントという）4か所を渡り歩く、というのは珍しいほうでした。10年間ニューヨーク勤務という人や、ニューヨークとロンドンで5年ずつ勤務という人はいましたが、4か所・15年続けて、というのは、



少なくとも当時は私しかいなかったのではないかと思います。

大月 そうでしたか。というのは、国際要員をインスパイアすることに御行のモチベーションがあることを、先年担当させていただいた寄附講義で感じたのです。実は10年ほど前、北山預介会長（当時）にご寄附をいただきまして、2013年度から2018年度まで6年間、『国際経済分析と金融の作法』という寄附講義を経済学部開設していただきました。私はご縁をいただいて受け皿役を務めさせていただいたのです。当時、御行企業調査部のポール・グラハム氏やプロジェクト・ファイナンスのエキスパートの方をはじめ、部長・副部長クラスの方が週替わりで来てくださりまして。

福留 そうでしたか。当行の者が出講させていただきました。

大月 最後は人事部長職の方にも来ていただきました。皆さんのお話から、国際要員をインスパイアする御行のモチベーションが伝わってきました。無論私だけではなく、参加した学生も相当インスパイアされたようで、御行への就職を希望した学生が多かったと記憶しています。

## 若い人たちに伝えたいのは、 「生き急がずに、寄り道してほしい」と

大月 本学の学生、あるいは本学への進学を希望する高校生など、若い皆さんに「今、何をやっておくべきか」というご助言をいただけるとうれしいのですが。

福留 そうですね……今までも〇〇世代というカテゴリー化はありませんが、Z世代の方々に対しては、「ついに私には理解できない人たちが現れた」というのが率直な感想です。仕事に対する考え方、キャリアに対する考え方は、私の世代とは明らかに違いますね。もともと、違うからいけないとは思っていません。その中であってアドバイスをさせていただくとすれば、「生き急がずに、寄り道してほしい」ということです。Z世代の方々を見ると、憶測ながら、自身のキャリアのピークをものすごく手前に置いているような気がします。



大月 なるほど。

**福留** 人生は長くて、紆余曲折があつて、いろいろなことが起こります。自分でコントロールできることもあれば、できないこともあるわけです。その中で、若いときに決め打ちして突っ走るのもいいでしょう。実際、突っ走って成功する人も一定数いるはずですよ。しかし大多数は、コントロールできないことに足を取られるのではないのでしょうか。そのことをマイナスにとらえるのではなく、大切な寄り道だと思つてほしいのです。今の若い人たちは、私よりもはるかに優秀で、「これ！」という明確なビジョンを持つている。その裏付けとなる勉強もしっかりやつている。それでも「これ！」とは関係ない領域についても、学生時代にぜひ経験してほしいと考えています。そうした体験が30年後か、50年後かは分かりませんが、将来に必ず活かされますので。

**大月** ありがたいお話で、私もまったく同感です。大学時代は、必ずしも知的な活動と直接つながらないことも含めて、さまざまな経験ができる貴重な機会ですから。

**福留** 大学時代はもちろんですし、大学を卒業してからも、ぜひ「これ！」以外の領域も経験してほしいですね。

**大月** 「これ！」しか知らない・できないとなると、世の中が大きく変わった時、その変化に対応できるか、とても心配ですね。外的な環境の変化に対応できない人になってしまつてはいけませんね。

**福留** 海外の大学では、リベラルアーツをととても大事にしていますね。それなりの地位にいらつしゃる方も、専門外の歴史について語るなど、リベラルアーツを学んだことがキャリアに活かされていると感じる瞬間が多々あります。

**大月** 歴史から国際情勢、理論が教えるところの経済学的な現象まで、リベラルアーツを学ぶことによつてさまざまなことを語れるようになりますね。

**福留** 以前、市場部門で相場をやつていたので、いかに歴史観や大局観が大切か、よく分かります。当行の若い人たちに伝えていることの一つに、マーク・トウエインのものとされる「歴史は繰り返さないが、韻を踏む (History doesn't repeat itself but it rhymes)」という言葉です。私は香港勤務時代にアジア通貨危機を経験しました。その10年後にニューヨークでリーマ

ン・ショックを目の当たりにしまして。まさにこの言葉通りだと実感しました。

**大月** 何度も金融危機の渦中におられたというのは、大変でしたでしょう。

**福留** アジア通貨危機の時は若手だったので、右往左往しているだけでしたが、10年後のリーマン・ショックには現場のドル資金責任者として対応しました。むしろあの時は、はたから見やすくて喜々として働いていたと思えますよ。

**大月** 喜々とされていたのですか？

**福留** 当時、アラン・グリーンズパン (元・アメリカ連邦準備制度理事会議長) が100年に一度のことだと言っていました。だから我々も100年に一度のことをしよう、と。もちろん業務は大変なわけです。しかし、不謹慎かもしれませんが時代の変化を楽しみたいと思つていました。

**大月** それは至言です。我々が2年生のときに商学部で統計学を教えていらつしゃつた宮川公男先生 (一橋大学名誉教授) が、2年前に『不確かさの時代の資本主義—ニクソン・ショックからコロナまでの50年』という本を上梓されました。

**福留** 宮川先生、覚えていますよ。

**大月** アメリカ中心の金融と実体経済のうねりについて、過去50年を総括した大著です。今の福留さんのお話のように、実業家を含め渦中にいた方がどう見ていたかをサーベイしていらつしゃいます。

**福留** それはとても勉強になりそうですね。これからも似たような経済現象が起こるでしょうから。

### 集中力を発揮するために大切なのは、体力と気力

**大月** それでは最後に二つ、お聞かせください。まず、本学に期待することについてはいかがでしょうか。

**福留** ソーシャル・データサイエンス学部・研究科 (SDS) の

開設には、本当に感動しました。「ソーシャル」と冠しているところに一橋大学らしさを感じます。当行もデータサイエンスの領域の人材採用を進めたいと考えていますので、日本のため、日本の企業のために、ぜひこの分野のバイオニアになっていただきたいです。

**大月** ありがたいございます。もちろん、これまで長い間4学部で取り組んできたことがベースですが、そこにSDSの教員・学生が参加することによって化学反応が起こりつつあります。その先に生み出されるものに対して、私自身も期待しているところです。二つ目は、福留さんご自身の経験から、今、若い人たちは何が求められているか、どういう能力が求められているか、改めしてお伺いしたいのですが、いかがでしょうか。



**福留** 今に限ったことではありませんが「集中力」です。金融の分野はかつてないほど専門性が高まっていますので、猛勉強が欠かせません。それは集中力が必要……なのですが、集中力を保つためには体力と気力があるでしょう。実を言うと、若い頃は「知力が一番」と考えていましたが、さまざまな経験を経て、体力と気力が大事だと思ひ始めました。

先ほど学生時代に経験したアルバイトについてお伝えしましたが、いずれも心身の鍛錬となるものばかりです。そのときに培った体力と気力があるから、100年に一度の金融危機も喜々として乗り越えられたのではないかと。

**大月** その都度集中し「学び」として吸収されたことが、100%以上、ご自身の血や肉になっておられる。それによって1+1を3にも4にもできる。そういう方がたくさん本学から巣立って、各方面で活躍しておられることが改めてよく分かりました。今日はありがとうございました。

**福留** こちらこそ、ありがとうございました。



Shinji Yamashige

設立20周年に向けて  
基礎固めを行い、  
次の世代にバトンタッチする



国際・公共政策大学院長  
**山重慎二**教授

2025年は一橋大学の創立150周年であると同時に、国際・公共政策大学院（IPP）の設立20周年でもあります。私は2005年に法学研究科と経済学研究科のジョイントベンチャーとしてIPPが立ち上げられた当初から参画しています。試行錯誤を重ねながらIPPの運営にさまざまな形で携わってきました。院長の任に就くのは今回が3回目で、最後になります。これからの2年間は次の20年に向けて基礎固めを行い、次の世代にバトンを渡す期間として取り組みます。

IPPの修了生は、現在さまざまな分野で活躍中です。省庁、自治体、JICA（国際協力機構）、IMF（国際通貨基金）といった公的機関から、シンクタンクやコンサルティング会社などの民間企業まで、幅広い分野で重要なポジションに就いています。20周年記念に向けた取組の一環として、修了生の皆さんを訪問してお話を伺い、冊子にまとめることも検討中です。

もしかしたら学生の皆さんは、IPP＝公務員養成機関と思われるかもしれませんが。しかし実際は、多様なバックグラウンドを持った学生が、国内外の社会課題を解決する力を磨くために学びにくる大学院です。英語で学位が取れるプログラムもあることから留学生が4割を占め、英語での授業も数多く提供されています。一橋大学の在学学生や卒業生の皆さんにも、研究科とは異なる実践的な学びができる大学院として、進学先の候補に入れてもらえたらと考えています。実体験も交えながらグローバルな議論を行う。そんなIPPの素晴らしい環境を、次世代に引き継ぎたいと考えています。（談）

Keisuke Takeshita

バランスの取れた国際化を進め、  
法学の観点からも  
世界に貢献する



法学研究科長・法学部長  
**竹下啓介**教授

私は、法学・国際関係を柱とする法学研究科・法学部において、「バランスの取れた国際化」を推進したいと考えています。

近年においては、「SDGsやAIとどのように向き合うか」といったグローバル 이슈が多数出てきています。国際関係はもちろん、私の専門分野である国際私法も、伝統的にグローバルな問題を扱っていますが、近時においては、他の法学の分野においても、インターネットが関係する問題等、さまざまな法律問題への対応がもはや日本だけで完結できるものではなくなっているように思われます。国際関係に関する知見はもちろん、日本の法学の知見も世界に発信し、グローバル 이슈の解決に貢献する。そのためには、法学研究科・法学部における教育研究の更なる国際化は、欠かせないテーマになると思います。

一方で、グローバル 이슈の解決だけが法学の課題ではありません。たとえば法科大学院生はもちろん、学部学生にも法学の基礎となる憲法・民法・刑法等を適切に学ぶことができる教育環境を提供しなければなりません。法学研究の基礎力を高めるため、また、日本社会の国内問題の解決に貢献するためには、これまでと同様の国内法研究も必須です。教員の方々の専門の多様性や、さまざまな問題について学ぶことを希望する学生のニーズを尊重しつつ、世界に貢献するために可能なところから法学の国際化を着実に進めていく。それが、私がイメージしている「バランスの取れた国際化」です。

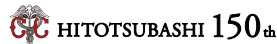
法学と国際関係を柱とする法学研究科・法学部には、このような「バランスのとれた国際化」のための環境が整っていると思います。あとは実行あるのみ。法学・国際関係を専門とする教員間の連携を強化してシナジーを生み出し、成果に結びつけられればと考えています。（談）



# 「ひとつひとつ、社会を変える。」

## 創立150周年記念事業が始動

一橋大学は2025年に創立150周年を迎える。1875年に森有礼が銀座尾張町に開いた商法講習所を建学の起源とし、現在に至るまで一橋大学は、社会科学の総合大学として  
 高度な専門性と深い教養を兼ね備えた多くの人材を社会に送り出してきた。その数およそ9万9000人。  
 渋沢栄一をはじめとする支援者と各界で活躍する卒業生の強い思いと応援に支えられ発展してきた歴史を振り返り、「一橋大学らしさ」とは何か、次世代へ受け継ぐもの、そして構想されている記念事業について、  
 中野聡学長と大月康弘理事・副学長（総務、研究、社会連携担当）が語り合った。



### 150年前から変わらぬ 世界水準の教育機関

**中野** 一橋大学の起源は、1875年に森有礼が、当初は私設の学校として銀座尾張町に開いた商法講習所に遡ります。建学の原点は、世界水準の商業教育を通じて日本の近代化を担い、国際的に活躍できる人材を育成することでした。1884年に東京商業学校、1920年に東京商科大学となり、1949年には新制国立大学の発足にともない一橋大学と名称は変わりましたが、150年という歴史の中



中野 聡学長



大月康弘理事・副学長

中で創立当時の原形をとどめている大学は意外と少なく、これは一橋大学の大きな特徴だと改めて思います。大月 確かにそうですね。一貫性は一橋大学の大きな特徴の一つだと思います。しかもその一貫性は、歴代の構成員の個性と意思と意欲によって紡がれてきたのだ

けでなく、社会の要請を一身に背負ってきた結果だとも思っています。この150年という歴史は一橋大学単体の歴史というより、一橋大学が近代日本の歩みの中でその時代、ごとのニーズを受け止め、期待に応えてきた歴史そのものだと言えるのではないのでしょうか。  
**中野** 創立150周年記念事業を進めるためにワーキンググループを立ち上げ、若手の先生方を中心に議論をしてもらっています。まず初めに話し合われたことは、これまでの150年を次の150年にどうつなげていくか、ということでした。こういうテーマが気負いなく出てくるところも一橋らしさだと感じました。

**大月** 「こうでなければいけない」というのではなく、柔軟にフォーメーションを変えながら続いてきたのが一橋大学の良いところですね。わが国のニーズ、社会のニーズ、世界のニーズをうまく汲み上げる能力が本学にはあると感じています。我々世代もそうあるべきだし、そのスピリットを若い人たちにも共有してもらいたいと思っています。

**中野** 変化といえば、2019年、本学は総合大学や医療・工学系大学とともに、唯一の文系大学として指定国立大学法人に指定されました。指定国立大学法人は、国内の競争環境の枠組みから出て、国際的な競争環境の中で、世界の有力大学と伍していくことが求められています。本学には、社会科学分野における世界最高水準の国際的な研究・教育拠点に成長することへ大きな期待がかかっています。

2023年4月に新設したソーシヤル・データサイエンス学部・研究科（SDS）も、一貫性の中で生まれました。本学はこれまでの150年、特に経済界への人材の輩出に強みを持ち、経済社会の適切な運営と発展に人材育成の面でも貢献してきました。グローバルに活躍する「Captains of Industry」を人材育成の基本コンセプトとし、ゼミナール中心の少人数教育により、産業界を中心に日本社会を支える人材を輩出してきた歴史があります。

**大月** 実際、海外で活躍する卒業生も多く、同窓会組織である如水会には50近い海外支部があります。

### 次の150年に橋を架ける 記念事業の実施

**中野** 創立150周年という節目の年を迎えるにあたり、これからの150年を見据えて卓越した研究力と優れた人材育成力をさらに発展させるため、テーマを「ひとつひとつ、社会を変える。The Bridge to the Future」としました。そして、「Captains of Industryたる人材の育成」「総合知の創出と社会還元」「多様性に富む卓越した学術コミュニティの形成」という三つの柱のもとで、さまざまな事業に取り組みこととなりました。

**大月** 「Captains of Industryたる人材の育成」では、従来の教育プログラムに加えて、学生・卒業生への起業支援（イ



ンキユベーション拠点形成) やリカレント教育の拡充など、多様な教育機会の創出による人材育成につながる事業を行います。「総合知の創出と社会還元」では、文系・理系の区分けを超えた「総合知」の創出と活用に貢献し、地球と人類社会が直面する課題の解決に資する高度な研究を進めるとともに、企業や外部の機関・団体との積極的な連携等を通じて、得られた知見を社会へ還元します。「多様性に富む卓越した学術コミュニティの形成」では、世界の優れた研究者が集う国際的研究拠点としての活動を進めるとともに、若手・女性研究者の支援や学生・留学生の修学支援を拡充し、国籍、世代、性別を超えて多様な人々に開かれた卓越した学術コミュニティであり続けることを目指します。

**中野** これらの施策を実現するためには、魅力と活力にあふれるキャンパス環境が不可欠です。DX基盤の構築や、ミッションを共有するステークホルダーとの共創を実現する産学共創の推進など、次の150年に向けた取組を加速するため、キャンパスの環境整備を進めています。

**大月** すでに始まっているものとして、「学生活動応援企画『多様性に関する学生活動応援プロジェクト(通称サスプロ)』」があります。本学のDEI(ダイバーシティ、エクイティ及びインクルージョン)の推進に関する企画を公募し、採択したプロジェクトの活動を大学が支援します。

**中野** サスプロは、行動する学生を支援する企画です。一橋大学はいつの時代も社会課題と向きあい解決策を見出すことに注力してきました。そしてまた、学生の自発性を伸ばすことは大学の使命でもあります。社会課題の発見と解決に向けた提案、そして行動までを支援するプロジェクトです。

**大月** また、グローバルに活躍できる学生を育てる学生支援も充実させていきます。国際的に優秀な人材が集まる魅力に富んだ学術コミュニティの創造を目指し、外国および日本全国から最優秀層の学生を入学させるため、博士後期課程学生への独自の奨学金制度、東京圏外出身学生への支援制度を創設して修学支援の充実を図ります。

もう一つ、予定しているものに附属図書館の機能強化プロジェクトがあります。図書館は大学という組織の知的基盤を支えるインフラストラクチャーです。研究資料の充実、

社会科学古典資料センターが所蔵する貴重書の保存修復およびデジタル化、アクティブラーニングスペースの整備などを構想しています。

## 学生が集う場を設け、活気あるキャンパス環境を整備

**大月** キャンパスの環境整備も早期に進めたい事業です。コロナ禍を経て、授業のあり方や学生の行動も大きく変わりました。だからこそ、大学という場所(トポス)が大切だと感じています。私は最近、トポスに代えてコーラという言葉(構成員がそこで育まれる「母胎」といった意味で、プラトンにも見られるギリシア語の用語)を使っています。そのコーラが、まさに大学のキャンパスだと考えます。わざわざ集って学生が語らえる場所、コーラを早急に設置する必要があるという危機意識を持っています。

**中野** これは本学だけの課題ではなく、他大学と同様の危機意識を共有しています。同時代的な課題です。一橋大学の先輩方から伺うと、西プラザ(生協食堂)は1970年代にできた当初、学生のためり場になっていたそうです。当時の学生つながりのあり方だったのだと思います。登校すると教室へ行くより前に生協へ行き、友だちが来るのを待っているような、そういう学生が多かったのだそうです。

しかし、2020年代になりコロナ禍を経た学生つながりのあり方は大きく変わっています。オンライン授業が増え、登校しななければならない回数がぐっと減っています。現在構想中ではありますが、学生がつながる仕掛けとしての空間をもつ建物をつくりたいと考えています。学生同士のつながりだけでなく、社会とつながったり、教員とつながったり、いろいろなつながりをつくりながら柔軟に使える場にしたいたいと考えているところです。

**大月** 当時の西プラザや東本館にはそういう雰囲気がありましたね。

**中野** 現在の東本館には、新設したSDSに理系出身の先生がいらしたりして、分野を超えて集う雰囲気

があります。今の学生には特にそのような「集える場所」が必要だろうと考えています。DDP(Data Design Program)や、SDSと三菱地所が協働して新しくオープンした東本館の交流拠点なども、学生たちに大いに集ってもらいたい場所です。

**大月** SDSは企業だけでなく、世界のアカデミアとも新しくつながりを持つようとしています。日常的にはオンライン上でやりとりをするとしても、リアルに集う場所が必要だと考えています。今決まっているのは、情報基盤センターにfMRI(functional magnetic resonance imaging)という脳機能の計測器を設置すること。DDPとSDS、またHIAS(脳科学研究センター(HIAS-IBC))が中心になり、この計測器を使って新しい分野の研究と教育を展開していくことになりました。被験者の方も来校されるので、学生と社会とのつながりにも期待しています。

**中野** ささまざまな事業が動いていますが、一方で、DDPやSDSとは直接関係しない多くの学生にも、キャンパス内で気軽



東本館に設置された交流拠点



東京商科大学学生食堂(清水建設株式会社所蔵)



東京商科大学学生食堂内部(清水建設株式会社所蔵)

に集える場所が必要です。

**大月** 学生が気軽に集い、つながりを持てる場所の設置は、創立150周年記念募金を財源として、ぜひ実現させたいプロジェクトの一つです。

**中野** 現在構想中の西プラザ（生協食堂）の環境整備は、学生がつながる仕掛けをつくっていくものです。学生同士はもちろん、教職員、卒業生、如水会、地域、企業といったさまざまなステークホルダーと交流し共創できる拠点としても利用できる場所になればと考えています。

**大月** 兼松講堂、図書館などの意匠にも留意した一橋らしい建物を構想したいですね。

### 創立150周年記念募金会が本格始動

**中野** 国立キャンパスの兼松講堂、磯野研究館、如水会百周年記念インテリジェントホール、如水ゲストハウス、佐野書院、小平国際キャンパスの如水スポーツプラザ、千代田キャンパスの一橋講堂など、現在の「一橋大学をかたちづくる多くの施設は、卒業生・在学生とご家族を中心とする個人、同窓会組織である如水会、各種団体・企業等の寄付・ご支援で建築・改修・取得がなされてきたものです。2004年に設立された一橋大学基金への個人・法人の寄付金が大学の収入に占める割合は約7・8%（2022年度）。これは、全国の国立大学でトップクラスであり、如水会に代表される卒業生と母校の固い絆も本学の大きな資産です。

**大月** 創立150周年記念募金会の活動も本格的に取り組む準備が整いました。ご寄付いただく資金は、創立150周年記念プロジェクトに充当し、未来を切り拓く人材育成を柱とした本学の教育研究活動全般の原資とさせていただきます。創立150周年記念募金会の創設には、如水会の皆様にもご協力をいただきました。会長には如水会相談役の松本正義さん、副会長には如水会理事長の杉山博孝さんにご就任いただいています。

**中野** 卒業生の交流を通じて新たに生まれる共創にも期待をしています。次の150年に向けた一橋大学の新しい挑戦に、力強いご支援、ご協力を賜りますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

## 創立150周年事業施策・取組

### 多様性に富む卓越した 学術コミュニティの形成

- ダイバーシティ施策の推進
- 学生支援施策の充実

### 3つの柱を支える 基盤の整備

### 総合知の創出と 社会還元

- 一橋の「知の集積」
- 研究力の集結と活用、研究成果の社会還元

### Captains of Industry たる人材の育成

- 社会とつなぐ人材育成
- 世界をつなぐ留学プログラムの充実

#### その他関連事業

- 特設サイト更新
- 150周年記念式典

創立150周年記念  
ウェブサイトはこちら



一橋大学基金  
ウェブサイトはこちら







# 一橋大学を舞台にした SIGMA初の国際共同シンポジウム

**初の共同シンポジウムを  
ぜひ一橋大学で**

2023年5月11～12日、社会科学系9大学によるグローバル・アライアンス「SIGMA」の研究シンポジウムが、一橋講堂（千代田区）で開催された。2日目（12日）には、佐野書院（国立市）においてSIGMA学長会議も並行して開催された。

2015年に発足したSIGMAにとって、共同の研究シンポジウムは今回が初めて。一橋大学はその主催校に立候補し、シンガポール経営大学、パリ・ドフィヌ大学（フランス）とともに企画運営に当たった。

## Well-being研究の プレゼンターを国際公募

SIGMAでは新型コロナウイルス感染症が世界に広がる以前から、メンバー校によるオンライン共同講義を開講してきた。今回の共同シンポジウムもハイブリッド開催とし、オンラインの利点を活かすこととした。

シンポジウムのテーマは「Ageing and Well-being over the Life Course」。SIGMAメンバー校の研究者層が厚い分野である高齢化社会の福利厚生について、多面的に討議した。プレゼンターは国際公募にした。一橋大学で専用のWEBサイトを開設し、参加者を募ったところ、予想を超えた反響があった。アジア、アフリカ、中南米、北米、ヨーロッパ各国から応募が集まり、最終的に2日間で46名の研究者が研究発表や討論を行うという、実に活気溢



れるシンポジウムとなった。当初は小規模な開催を想定していたが、見込みを大幅に上回る申し込みがあったため、研究発表を二つのルームで同時開催。企画運営に携わった山田敦副学長は、「本学にとっても、コロナ禍明けに開催した最初の大きな国際シンポジウムとして、非常に意義のあるものだった」と語る。

### 対面の学長会議で 今後の展開が次々に打ち出される

2日目には、9大学のトップによる学長会議が開催された。学長同士はすでにオンラインで何度も接点を持っていたが、久々の対面でのコミュニケーションを通じて率直な意見交換が行われ、その場で次々に今後の取組が決められていった。

たとえば、SIGMAメンバー校の学生のWell-beingについてのリサーチを行い、論文にまとめるという企画だ。すでに2022年から行われているプロジェクトだが、各大学での進捗を踏まえ、ジョイントペーパーの作成に向けた準備が本格化する。また、メンバー校の博士課程の学生を集めて研究発表を行う「ジョイントコロッセミナー」や、教員の評価（エバリユエーション）などに関する意見交換も行われる予定である。

そして、すでに多くの学生が参加し、高い評価を得ているオンライン・アクティブ・ラーニング型の

2講座（SDGsとデジタル・トランスフォーメーションをテーマとするオンライン共同講義）については、今後もしっかり推進していくことで学長たちの意見が一致した。

### 「ひらく、つどろ、つなぐ。」を 体現する場としてのSIGMA

今回の研究シンポジウムおよび学長会議について、山田副学長は「とても開かれたものになった」と振り返る。前述の通り、研究シンポジウムには46名の研究者が参集したが、半数を超える27名の研究者は

SIGMAメンバー校以外からの参加だった。このことはSIGMAにとって良い刺激となっただけでなく、「SIGMAの存在を世界に向けて改めて知らせるきっかけ」（山田副学長）にもなった。その点は、学長会議でも評価する意見が相次いだ。これこそが、一橋大学で研究シンポジウムと学長会議を開催した最も大きな成果の一つと言える。何より、中野聡学長が掲げる三つのキーワード、「ひらく（開放性を高める）」「つどろ（多様性を高める）」「つなぐ（社会連携を強化する）」という第4期中期目標が体現された重要な場になったと言えるだろう。



対面のSIGMA学長会議（佐野書院にて）



SIGMA初の国際シンポジウム（一橋講堂にて）

# 中国人民大学との 相互対面交流を再開



国際社会が抱える諸課題について両大学による対話交流が行われた（佐野書院）

## 社会科学という共通項を持つ 両大学の交流

2023年5月9日、中国人民大学の杜鵬副学長をはじめ、張曉萌国際交流処副処長、6学院（商学院、经济学院、应用经济学院、法学院、劳动人事学院、社会と人口学院）の院長・教授ら25名が一橋大学を来訪。中野聡学長はじめ本学執行部との会談の後、一行は兼松講堂や附属図書館等を見学。佐野書院に場所を移し、「人民大学Day」開会セレモニーを開催した。両大学による記念品贈呈式、歓迎昼食会を経て各研究科に分かれ、環境問題や高齢化、社会保障など、国際社会が直面する諸課題について部局間で対話交流が行われた。社会科学という共通の研究領域を持ち、さまざまな形で交流を重ねてきた両大学。コロナ禍が明け、今回ようやく対面での交流が再開した形だ。

## 人的関係の深さが、 活発な交流の礎に

一橋大学と中国人民大学。両大学の交流の歴史は長く、かつ多岐にわたっている。その要因の一つに挙げ







青木人志理事・副学長

られるのが人的関係の深さだ。たとえば、中国人民大学の張東剛党委書記（経済学者）は一橋大学に研究滞在の経験がある。同様に、本学大学院経済学研究科あるいは経済研究所

に留学経験を持つ中国人民大学の教員は複数いる。自身も2016年4月から約4年半中国交流センターの代表を務めた青木人志理事、副学長は、本学大学院法学研究科に在学していた当時、同研究科に留学中であった楊建順中国人民大学法学院教授や、王雲海法学研究科教授（中国人民大学大学院を経て本学大学院を修了）と親しく一緒に学んだという。そして、現在、両大学の交流の実務面で汗を流してくれている楊東中国人民大学法学院教授は、本学大学院法学研究科修士課程、旧国際企業戦略研究科博士課程で学んだ後、中国人民大学の教員に迎えられている。このような深い人的関係が、両大学の交流の礎となっている。

## シンポジウム、共同研究などの学術交流

人的関係の深さを礎にした両大学は、さまざまな学術交流、学生交流を進めている。まず学術交流では、アジア政策フォーラムの定期開催（コロナ禍を挟んで9回実施）のほか、刑事訴訟法シンポジウムなど各種シンポジウムを開催。また、韓国・釜山大学を含めた日中韓3

か国による東アジア法研究（2007年度から5年間）および東アジア地域における食品安全法制の比較法的研究（2016年度から3年間）を行ってきた。別稿で紹介するSIGMA研究シンポジウムにおいては、東アジアを代表する両大学のプレゼンスは極めて高い。

## ダブルディグリー、グローバル・リーダーズ・プログラム、北京ツアー、そして卓球を通じた学生交流

学生交流も活発だ。具体的には、経営管理研究科国際企業戦略専攻および法学研究科におけるダブルディグリー・プログラム、経済学部グローバル・リーダーズ・プログラムの一環として行われる中国への短期海外調査などが挙げられる。また、中国交流センターが実施する北京ツアーの受入れ先として、中国人民大学は最も頼りになる存在だ。ユニークな取組としては、「卓球交流」が挙げられる。青木副学長と王教授が本学の卓球部員を引率して北京に行き、学生の試合のみならず教員の試合も行われるという。青木副学長は「お互いに相手の国の言葉は挨拶程度しかできませんから、会話はもっぱら卓球です」と笑顔で語る。

## 今後のテーマは交流の未来を担う若手世代の育成

「次回はぜひこちらの新しい蘇州キャンパスで『一橋大学Day』を」という中国人民大学側の要望に応え、7月に一橋大学の面々が中国人民大学蘇州キャンパスを訪問し、「シルクロード学院」「国際学院」「中国フラ

ンス学院」との交流を通して相互理解をさらに深める素晴らしい機会を得た。このように、両大学は今後もさまざまな形で交流を続けていくことになるだろう。その際に重要になってくるのは、その交流の未来を担う若手世代の育成だ。青木副学長は、最後にこう語る。「交流を通して実感するのは、やはり友人にならないと話が始まらないということです。中国人民大学では若い世代の教職員が橋渡しのために頑張ってくれています。本学でも同じようなポジションを担う人材を育て、さらに交流を深めていきたいですね」



「一橋大学Day」開催の招待を受け、中国人民大学蘇州キャンパスを訪問

多様な価値観に触れ、  
自己成長を実現する――

# 一橋の留学

一橋大学海外派遣留学制度（交換留学制度）、グローバルリーダー育成海外留学制度、サマースクール等留学制度、異文化交流研修、海外語学研修など、多くの海外留学制度を備え、毎年100名を超える学生が海外留学を体験できる、それが一橋大学の魅力です。海外での学びで得た新しい知見や人的交流が学生の価値観を大きく変え、将来に向けて指針を与えてくれた、と答える学生が少なくありません。学生・社会人それぞれの立場で留学を経験した3名の方に、その成果を語っていただきました。

膨大な読書量と教授との濃密なコミュニケーション。  
鍛えられた1年間は、大きな自信へとつながりました。



近藤ありなさん

法学部4年

留学先：英国 オックスフォード大学

高校卒業までの8年間をモンゴルとアメリカで過ごしたことから、国際関係に関心を持つようになりました。入学当初は留学への明確な意思はなかったのですが、一橋大学でディベートサークルに参加して留学の必要性を感じ、大学3年次にオックスフォード大学に1年間留学しました。もともと文学を通してイギリスの歴史や文化に魅力を感じていたこともあり、オックスフォード大のPPE (Philosophy, Politics and Economics) プログラムで社会科学を広く学んで自分の視野を広げたいと思いました。

1学期で履修する科目は、二つと少ないものの、毎週30点以上の文献を読んでレポートを提出し、教授と学生が1対2でディスカッションする濃密な授業内容で、読解力と思考力が鍛えられました。また、イギリスの複雑な階級社会や、植民地の歴史を踏まえて現在の国際関係を考えてという視点に触れたことも大きな発見でした。たとえば、スコットランド・グラスゴー大学のハンテリアン博物館で見た、多様

性に配慮した展示方法は大変興味深く、現地で人と意見を交わさなければ得られなかった視点だと感じています。講演会やディスカッション、パーティなど、人種や年齢を超えた方々と交流できる場が多かったことも貴重な体験です。学期中は、学業面以外でも日本語・英語を教えるボランティアや大学の聖歌隊オーケストラに参加したりしました。また、友達とピクニックやガーデンブレイ（春頃に屋外で有志の学生により披露される劇）、パンティンク（オックスフォードに流れる川で船を漕ぐこと）にも行ったりしました。そして休暇中は、ロンドンで観劇・博物館巡りをしたりヨーロッパ各地に旅行に



オックスフォードの制服を着て



パンティンク

出かけたりすることで、自ら世界を広げていく姿勢が身についたと思います。人と関わることで、毎日こんなに学びがある！という経験は、自分の自信にもなっています。留学して改めて人と触れ合うことの大切さを感じ、以前から抱いていた「文化交流で国際関係に関わる仕事に就きたい」という思いがさらに強くなりました。





## Charlie Koyamaさん

あおぞら銀行勤務

2022年 一橋大学大学院経営管理研究科国際企業戦略専攻 (ICS) 修了

2023年 北京大学MBA修了

留学先: 中国 北京大学

私は学部生時代の交換留学やこれまでの業務で欧米諸国と深く関わってきましたが、日本の金融機関に勤務する身として、日本が属するアジアの市場に自分の新たなプレゼンスを確立したいと感じるようになりました。中でも世界で極めて影響力が強い中国で経済やビジネスの動きを学び、人的ネットワークを構築できれば、キャリアにとって大きなプラスになる。そう考え、一橋大学大学院経営管理研究科国際企業戦略専攻 (ICS) で北京大学光華管理学院のダブルディグリープログラムに参加しました。ところが北京大学で学んだ2年間は、想定外の出来事の連続でした。コロナ禍の最中、中国がゼロコ

**中国における物事の進め方を体感し  
新たな知見を得られた、またとない機会でした。**

ロナ政策をとったことから、渡航が叶わず講義はすべてオンラインになりました。また、言葉の壁もありました。英語のプログラムということもあり、講義自体は英語で行われましたが、学生同士で議論をするグループワークは、勝手が違いました。8割程度が中国の学生または海外在住の華僑の方々だったこともあり、放っておくと中国語でどんどん議論が進んでいきました。もちろんこちらから積極的に関われば英語で応じてくれるわけですが、慣れるまでには時間がかかりました。アジア人同士ですと見た目はあまり変わりませんが、こうした違い、中国ならではのスタンダードを学びました。

北京大学への留学は、不確実性を受け入れながらも環境に順応し、経済成長を遂げていく、まさに中国のパワーを実感する体験となりました。ICSの1年間、北京大学での2年間は、異文化や多様性を受け入れながらビジネスをグローバルレベルで思考するという、貴重な機会になりました。



北京大学光華管理学院 (MBA)



## 下防健瑠さん

社会学部4年

留学先: ドイツ ケルン大学

もともと留学志向が強く、一橋大学に進学した理由の一つが留学制度の充実でした。交換留学のプログラムに参加して留学先を選ぶ際に、英語力を磨くだけでなく、英語以外の言語にも触れたいと考えたので、ビジネス・経済・社会科学といった総合的な分野を英語で学べる学部があるドイツのケルン大学への留学を決めました。大学では一橋のゼミで学んでいた「教育格差」のほか、国際貿易や経済・社会全体の格差など、幅広い内容の科目を履修しました。「教育格差」の授業では、日本とは全く違うドイツの教育制度や今までに経験したことのないディスカッションの方法や視点の違いを学びました。同時に、ドイツの学生に加え世界中から集まった留学生が英語を流暢に使いこなしているのを目の当たりにして、日本との教育の違いを感じました。

**外国は決して特別な場所ではない。  
留学を体験し、日本への思いが強くなりました。**

自分にとって大きな収穫だったのは、海外の大学で学べたことはもちろん、数多くの友人ができたことです。特に台湾からの留学生と仲良くなり、一緒にヨーロッパ13か国を旅行できたことはとても良い思い出になりました。彼との交流を通して、言葉の壁を越えてわかりあえることを実感することができましたし、結果として英語力も向上しました。



ケルン大学本館



ルーブル美術館にて

近な人のため、ひいては日本のために働きたいという気持ちが強くなり、ゼネコンや海運など、国内のインフラや生活を広く支えるような業種に興味を持つようになりました。留学という経験があったからこそ起こった心境の変化だと思います。



視覚の中に  
情報が見えてくる、  
非言語的な映画を  
撮り続ける



# 三宅 唱氏

映画監督





一橋大学在学中に映画美学校とのダブルスクールにチャレンジし、学生時代には短編映画を、卒業後すぐに長編映画を撮り、映画監督としての経験を培ってきた三宅唱。

2012年には長編第2作『Playback』がスイスのロカルノ国際映画祭に正式出品され、2022年に発表した『ケイコ目を澄ませて』では

主演女優が日本アカデミー賞の最優秀主演女優賞に選ばれている。

中学3年生で映画づくりに目覚めた三宅は、一橋大学という環境から何を吸収し、そのキャリアをどのように築いていったのだろうか。(文中敬称略)

## 言葉ではとらえきれない 感情を表現するのが、 自分にとっての映画づくり

2023年3月10日、グラントプリンスホテル新高輪において「第46回日本アカデミー賞」各賞の発表と表彰式が行われた。大物俳優や監督がノミネートされる中で、最優秀主演女優賞を獲得したのは、3年前に同賞の新人俳優賞に輝いた岸井ゆきのだった。そして、岸井が主演した映画『ケイコ目を澄ませて』の監督・脚本を手がけたのが、一橋大学社会学部出身の三宅唱である。

先天性の聴覚障害がありながら、下町のボクシングジムに通う小河ケイコと、彼女を取り巻くジムのオーナーやコーチ、選手、家族の姿を描いた作品だ。聴覚障害のある女性がアルバイトをしながらプロボクサーとして実績を築く苦勞、下町のジム特有の不安定な経営基盤などを背景に、ストーリーを展開させる。しかしそのいずれにも軸足を置かず、セリフもBGMも削ぎ落とし、岸井演じるケイコの不機嫌そうな表情と鍛え上げられた肉体、そしてスパリングやロードワー

クの様子を淡々と描いていく。観る側のタイミングやコンディションによっていくらでも解釈の幅を広げられる、そんな自由度の高さがこの作品に不思議な雰囲気を与えている。

もともと、三宅の話を聞くとそれは不思議でもなんでもなく、映画が本来持つべき資質なのだと思えてくる。

「映画にできないこと、向いていないことはたくさんあります。言葉で表現できるなら小説のほうが向いているかもしれないし、あるいは何か早急に訴えたいこ



## People

とがあるなら、映画というものが凄く手間暇かかるメディアを使うより、もっと直接的な行動を起こすべきだと思うんですね。では映画にしかできないことは何か?と考えると、それは非言語的なもので、たとえば言葉では説明しきれない感情だとか、時間をかけた方がより面白いもの。それを表現できるのが映画です。そういう意味で、多分自分の映画のほとんどの情報は、基本的に視覚の中に見えてくるものだと考えています」

非言語的であるからこそ、観る側にさまざまな受け止め方を提供できる。そんな映画をつくり出す三宅は、一橋大学出身であることをどのようにとらえているのだろうか。

## 中学3年生で短編を撮り、 映画が総合芸術であると直感する

北海道札幌市で生まれ育った三宅は、今からおよそ四半世紀近く前の1999年、中学3年生の時にすでに短編映画を撮っていた。学校の文化祭で上映するための作品だったが、三宅は映画が総合芸術であることに直感したという。

「とんでもなく面白い体験でした。映画の中には文学もあれば、絵画、音楽、あるいははつくるときは体を動かすという意味でスポーツの要素すらあるのです。かつ、社会のあらゆる分野を考える対象にしますから、ジャーナリストイックな要素もあるでしょう。『映画は総合芸術だ』ということを直感した中学の時の思いは、今でも変わりません。21世紀になって、映画に対するそういう思いは若い世代にはないのかもしれない。『サバカルチャー』のジャンルに収まっているかもしれないです。しかし私にとっては変わらず最大の芸術、総合芸術なのです」

今でこそ自身の映画から日本アカデミー賞受賞者を出す三宅だが、中学の頃からはつきりと映画監督を目指していたわけではない。ハリウッドの超大作からヨーロッパの文芸作品まで、映画を観ることが大好きだった三宅少年は、映画を研究し、映画について思索を深める研究者の道にも興味を持っていた。

父親が自営業者だったことから、もともと三宅には将来会社勤めをするというイメージがなかった。学業や将来の選択についてあまりうるさく言われた記憶がなく、「心配はしていたでしょうけれど、だからといってプレッシャーをかけてくるタイプの家庭ではなかった」と振り返る。そこで高校卒業後の進路としては、「自分は文系である」との自覚は持ちながらも、大学で法律や経済、商業について学ぶことは考えなかった。では文学かといえば、三宅の興味は映画をはじめとする芸術全般や現代思想に広がっていた。

「私立には受かっても行くつもりはありませんでした。領域横断で学べそうな国立の大学を探して、著作を読んで感銘を受けた鶴飼哲教授（現・一橋大学名誉教授）がいらっしゃる一橋大学か、京都大学か。でも京都を旅行したとき、とても暑かったことを思い出し（苦笑）、一橋大学一択で受験しました」

残念ながら現役合格は叶わず、1年間の浪人生活をを経て、三宅は一橋大学社会学部に入學する。

## 難解なジャック・ラカンのテキストに 挫折感を味わう

入學した当初の三宅にとって、大学はなじみやすい環境とは言えなかったようだ。まず、当時の新1年生が体験する新歓イベントに、三宅は「違和感を覚えた」と語る。浪人生活を送りながらも「それなりに遊んできた」という自覚のある三宅は、受験勉強を頑張っ

て現役で合格して弾ける同級生たちを冷めた目で見ていた。

「浪人あるあるだと思いますが、なじもうとしなかった、というのはありますね」

それでも一応映画サークルには所属し、2〜3年生の頃には先輩の映画製作の手伝いや、自らも短編映画を撮るなどの活動をしていた。しかし、3年生になると同期の部員が就職活動を始めたため、三宅自身もサークルと距離を置き始めることに。

また、一橋大学社会学部を選んだ理由でもある鶴飼教授のゼミも、「ついていけなかった」と振り返る。

「鶴飼先生の知識人としての知性の厚みや行動力には圧倒されましたし、一緒に参加した大学院生の人たちは面白くて本当に刺激的でした。でも、ゼミで精読することになったジャック・ラカンのテキストは、フランス語の原文どころか英語に翻訳したものであまりに難解で……。研究者の道は早々に諦めました」

そんな三宅が力を入れたのが、映画館でのアルバイトと、アルバイト代を原資にした映画館回りである。在学中はずっと渋谷の映画館でのアルバイトを続け、稼いだアルバイト代を元手に月30〜40本、「札幌時代には観られなかった映画を観まくった」という。

## 時間をかけて結論を出すことに 付き合ってくれるゼミという空間

一方で、三宅自身が想定していなかった一橋大学との接点も生まれていた。

一つは、図書館である。世界的に有名な蔵書を誇る一橋大学の図書館は、三宅にとって、世の中の流れとは違う流れに身を浸すことができる貴重な空間だった。

「渋谷でアルバイトしたりしていると、つい遊びたくなりますよね。でも図書館に行くと、ほかの学生が資



格の勉強をしている姿を目にするわけです。すると『自分も好きな勉強をしよう』と考え直すきっかけをもらえます。ですから私はとても図書館が好きでしたね。なんというか、自分をリセットさせてくれたのです」

もう一つは、言語社会研究科・武村知子教授のゼミである。そのゼミには写真サークルやジャズ研究会、そして三宅のように映画サークルなど、文系かつ文化系の学生が集まっていた。武村教授は研究テーマをあえてゼミ生一人ひとりの選択に任せ、対話相手に徹したと三宅は振り返る。それぞれ異なるテーマ選択をするゼミ生に対し、武村教授は順番に対話し、「どうしてそうなったのか?」「もっと違う言葉で言い換えるとうなるか?」などの問いを投げかけていった。しかも単にゼミ生に問うだけではなく、一緒に考える姿勢を貫いていたという。

「自分一人で考えていても、本当の結論のめんど手前のところでも簡単にストップしてしまうと思うんです。そんな私たちに対して、武村先生は極めて穏やかな速度で『どうして?』と粘ってくれる。時間をかけて付き合ってくれる、そんな空間にいられたからこそ、気

## People



づかないうちに好き勝手に、なるべく映画のことを考え続けられたのではないか。今はそんなふう感じています」

## 映画美学校との ダブルスクールがスタート

鵜飼教授のゼミで経験した挫折から、研究者になることを諦めた三宅は、いよいよ映画を撮ることに本格的に向き合い始めた。もともと、正確に言えば「諦めた」のではない。映画について研究することも、映画を撮ることも、映画について、映画と社会の関係について考えるという意味では同じ。ただし、デスクで調べ物をするよりは、誰かと一緒に体を動かしながら、映画の面白さを探るほうに楽しさを感じる……という自らの資質に、三宅は気づいたのだ。そして、映画サークルの仲間たちが就職活動を始めた3年生の時、映画美学校フイクション・コース初等科に入学。一橋大学とのダブルスクールをスタートさせる。映画製作のノウハウを学びながら仲間を増やしていった三宅は、テレビ局のAD（アシスタント・ディレクター）のアルバイトも始める。その経験から後に広告映像の仕事も紹介されるようになるのだが、それは後述しよう。

## 助成金をもって撮った長編第1作で、 プロの俳優に認められる

いくつかの短編映画を手がけた三宅は、2009年に一橋大学を卒業。同時に『スパイの舌』という短編映画で、第5回シネアスト・オーガニゼーション大阪（CO2）エキシビション・オープンコンペ部門にて最優秀賞を受賞する。その後、CO2の助成金をもって、2010年に初長編映画『やくたたず』でメガホンを



とった。ただし、助成金だけでは不十分と考えた三宅は、札幌時代の友人たちに数年ぶりに連絡をして、資金の援助を求めている。

「みんなしかるべき企業に勤めて、30〜40代でやりたいうことをやるために貯金をしていたんです。そのお金の一部を融通してくれたのですから、とてもありがたかったし、『大したもんだな……』とも思いました。でも、30〜40代まで生きていられるかもわからないし、将来を真面目に考えることから逃げていたんだとも思いますが、とにかく撮りたい映画を撮ろうと、それだけを考えていました。映画で生計が立てられるかどうか

かなんて、考えても暗くなるから考えてませんでしたね（苦笑）」

そして、『やくたたず』に参加した俳優の村上淳が、三宅の仕事ぶりに関心を示し、次の作品を一緒に撮ろうと持ちかける。その出会いが、三宅にある大きな決断をさせ、後にロカルノ国際映画祭に正式出品される『Playback』へと発展していく。

## 生計を立てるための 仕事と映画づくりの両立を決意

「ある大きな決断」とは、三宅が何を生業にして生きていくか、ということに関する決断だ。前述したように、三宅はテレビ局のADのアルバイトをした経験から、一橋大学を卒業後、広告映像の仕事を紹介されるようになった。フリーランスの映像製作者として、企業用VP（ビデオパッケージ）や通販番組で使われる映像の製作に携わっていたのだ。短編・長編の映画監督との、いわば二足のわらじである。生計を立てることだけを考えれば、実はその当時すでに「フリーランスの映像製作者一本でも、十分食べていけそうだった」と三宅は語る。

しかし、三宅が映像製作者一本に絞らない……というよりも、三宅を映画づくりに踏みとどまらせる出来事が立て続けに起こる。まず、ある企業が運営するパーティーの撮影に参加したときのこと。クラッカーが鳴り響く様子をファインダー越しにのぞきながら、三宅は「自分が身につけた撮影技術が、望ましい形で活かされていない」と感じたという。さらにその後、2011年3月に企業用VPを撮影していたとき、福島第一原子力発電所で水素爆発が起こった。上司のパソコンでその映像をリアルタイムで見た三宅は、いよいよ意思を固めた。「今自分がやるべき仕事はこれじゃない」と。

「食べていくための仕事は続ける必要はあります。でも、自分が子どもの頃に映画からもらったエネルギーは、もっとワクワクするものです。お金で割り切れるものではないから、映画づくりも続けよう。どうしよう……と悩んだわけではなく、『両立させよう』とすぐに決断しました」

その決断から3か月後の2011年6月、三宅は俳優の村上のオフアワーを受けて『Playback』の撮影を始める。映画は翌2012年に第65回ロカルノ国際映画祭のインターナショナル・コンペティション部門に正式出品された。ロカルノ国際映画祭といえば、スイスで最も権威があり、若手作家の登竜門とも言われている。その映画祭で、三宅は長編2作目にして早くも世界デビューを果たすことになったのだ。

「自分の経済状況は恥ずかしいレベルで国内では無名でしたけれど、国際的にはもう『映画監督』と認知され、その時からこの職業に伴う責任感を自覚するようになりました。『ケイコ目を澄ませて』が日本アカデミー賞最優秀主演女優賞を受賞したときも、自分の中ではそれほど大きな環境の変化は感じていません」

## ほかから与えられたものに 自覚的なエリートであるために

三宅の経歴を改めて眺めると、そこにはエンタテインメントの世界で見受けられる「下積み」「苦節〇十年」というストーリーがほとんど見当たらないのだ。本人によれば、「橋大学を卒業後の数年は、「友人に製作資金を融通してもらったほど経済的にキツかった」とのことだ。しかし、同じく本人の口から、「そこからは幸運

の連続だった」という証言も待っている。

インタビュアーの後半、三宅は興味深い発言をした。ある映画評論家との対話の中で、「自分はエリートであるという自覚を持たなければならぬ」ことに気づかされたのだそう。続けて三宅はこう語った。

「学歴に関係なく知性を発揮する人もいて、そういう人に対する憧れもあります。しかし、一橋大学卒という肩書きは、どう考えても、エリートなのです。それを忘れてはいけないと思っています。そういう立ち位置は、自分でつかんだものである以上に、環境によって外から与えられたものでもあるので、『そのことを自覚して何ができるか?』ということに常に考えるべきかもしれません」

何より興味深いのは「環境によって外から与えられたものでもある」という認識である。1年の浪人生活を経て一橋大学に合格したのは、たしかに一橋大学の力によるもの、つまり「自分でつかんだもの」だ。しかし「環境によって外から与えられたもの」もまた多いようだ。

映画が与えてくれた総合芸術という直感。うるさく言われることもプレッシャーをかけられることもない家庭環境。行くたびにリセットする機会を与えてくれる大学の図書館。「どうして?」という問いを発し、結論を出すまで粘り強く付き合ってくれる武村教授のゼミの空間。地元の友人による映画製作の資金援助。そしてVPなど映

## People

像製作の仕事してくれるネットワーク……。こういった「外から与えられたもの」を自覚したうえで、何ができるか。三宅の場合、それは観る側にさまざまな受け止め方を提供する映画づくりだったのでないか。

「外から与えられたもの」に敏感な三宅は、だからこそ一橋大学の後輩に以下のようなメッセージを投げかけた。

「お金や立場に関係なく、家族でもない他人が、真剣にモノを言ってくれる機会は、おそらく大学が最後です。少なくとも映画に関しては、面白ければお金を払うし、そうでなければ払わない。それだけになります。社会に出てから真剣にモノを言ってくれる他人と出会う機会も、ネガティブな意見を耳にする機会も、おそらく減る。だからこそ、今ある人間関係や時間を大切にしてほしいですね」



### 三宅 唱 (みやけ・しょう)

一橋大学社会学部在学中2007年に映画美術学校第10期フィクション・コース初等科を修了。2009年に一橋大学社会学部卒業。2012年監督作品『Playback』で第27回高崎映画祭新進監督グランプリ、第22回日本映画プロフェッショナル大賞 新人監督賞受賞。2022年監督および脚本を手がけた『ケイコ目を澄ませて』が第77回毎日映画コンクールにて日本映画大賞、女優主演賞、監督賞、撮影賞、録音賞受賞、第96回キネマ旬報ベスト・テンにて日本映画作品賞、主演女優賞、助演男優賞、読者選出日本映画監督賞受賞、第46回日本アカデミー賞にて最優秀主演女優賞受賞、第65回ブルーリボン賞にて作品賞、主演女優賞ノミネート、第36回高崎映画祭にて最優秀作品賞、最優秀主演俳優賞受賞、第32回日本映画批評家大賞にて監督賞受賞。最新作は映画『夜明けのすべて』(2024年2月全国劇場公開予定)。



# 一橋の授業

大学の授業とは、高校のそれとは何が違うのだろうか。

社会科学とは何か。ゼミとは何か。

一橋大学で「学ぶ」とはどういうことなのか、

授業の一例をご紹介します。







佐々木将人准教授

## 企業行動を理論的に説明するための研鑽を通じて、 見えない社会現象を解明し、問題提起する力を養う

企業がビジネスを展開する中、業績が向上かないとすれば、それは経営戦略に原因があるかもしれない。また、働く社員のモチベーションが低い場合は、経営組織から見直す必要があるだろう。「なぜ高い業績を上げ、競争優位な状況を築き上げることができたのか」「どのような施策が従業員の労働意欲を高め、効率的かつ機能的な組織づくりを可能にしたのか」。こうした問いに答えるさまざまな説明の枠組みを提供してくれるのが、佐々木ゼミで研究が行われている「経営戦略論」や「経営組織論」である。

ある企業の成功が周知の事実であっても、その理由は必ずしも明らかではない。十分な説明をするためには、企業戦略の定石や競争の仕組みについても理解しておく必要がある。佐々木ゼミでは、理論に基づいて企業行動を説明し、さらには独自の視点でとらえた分析ができるように指導が行われている。学修を通じて獲得できるのは、経営戦略や経営組織に関する体系的な専門知識だけではない。見えない社会現象を解明し説明できる能力であり、何かを変革するために自ら問いを立てられる能力である。

**自ら問いを立て、答えを構築できてこそ、  
企業や社会で変革を起こせる**

佐々木ゼミは、商学部の経営学領域における

3、4年次の後期ゼミとして開講されている。3年次にまず学修するのは、基礎知識となる経営戦略や経営組織に関する理論である。学んだ理論を「どのように活用するのか」「起きている現象をいかに説明できるか」に重点を置き、テキストの輪読を通して理論の理解に取り組む。

2023年度のテキストは『離脱 発言 忠誠——企業・組織・国家における衰退への反応（アルバート・O・ハーシュマン著）』が用いられた。経済学と政治学を組み合わせた組織マネジメントの理論が展開され、組織を再生するための手掛かりが示されている。企業行動に影響を与える社会現象を説明するための枠組みとして学修し、抽象度を上げることで視野を広げていく。取り組む学生に対して期待することを佐々木准教授に尋ねた。

「企業行動というものを、戦略という事業展開の側面と、組織運営という多くの従業員をマネジメントする視点から理解してもらおうことです。そのための専門知識の修得に加えて養ってほしい能力があります。その一つが、経営に影響を与えるさまざまな事象を説明できる力です。もう一つは、自ら問いを立てる力です。研究活動においても企業で実務に携わるときにおいても、何かを変革していくには







普段使用する家電製品に注目し、  
価格帯が与える影響を  
考察しています



商学部4年  
ムンクトルナムーンさん

**ビ**ジネスにおいてマーケットや顧  
客層が変化していく現象に興味

がありました。そうした現象に私たち消費者の大多数は気づきません。変化を企業がどのようにとらえ、経営戦略に反映させているのかを研究したいと思い、さまざまな企業行動をケーススタディとして学べる佐々木ゼミを選びました。卒業研究では、成熟化した家電市場の中で売り上げを伸ばしている高価格帯のヘアドライヤーに注目し、価格帯というものが好影響を与えた要因について考察しています。今、起きている現象の真相に迫るために身につけた分析手法を、研究成果につなげていきたいと思っています。

どんな興味関心に対しても真摯に向き合い、  
研究として昇華させる  
助言をくださる先生です

商学部4年  
大川温生さん



**ベ**ンチャー企業に興味があり、定  
量調査の手法を修得したいと  
思っていたため、佐々木先生のゼミの

活動を通して知見を身につけたいと思いました。卒業研究では、ベンチャー企業とそれを取り巻く環境からなるスタートアップエコシステムについてリサーチしています。佐々木ゼミの魅力は、研究に励む学生と真摯に向き合ってください先生の姿勢にあると思います。興味関心のある研究領域が先生の専門外であっても、学術的かつ論理的に正否を判断して助言をもらえます。研究者の道を進むことを視野に入れて学ぶ私にとって、非常に恵まれた環境です。

カバーする領域が広範にわたるので、  
自分の好きな研究対象が  
見つかるはず



商学部4年  
酒井昌盛さん

**経**営というものに漠然とした  
興味があったため、商学部

を選びました。佐々木ゼミを選んで良かったと思うことは、戦略や組織、業態の変化やイノベーションなど、経営というものを多角的に考察できることです。カバーする領域が広範にわたる経営学の面白さを実感できるゼミであり、活動を通して、自分の学びたい領域を見つけることができました。私は卒業研究として、インドネシアの伝統的小売業に関する調査を行っています。経済発展が進む中、なぜ屋台や旧態依然とした個人商店をはじめとする伝統的小売業が今も生き残っているのか。その要因やメカニズムをさまざまな側面から探っています。

問題意識が欠かせません。それをもとに、立てた問いの答えを構築できるようにしたいと願っています」

**興味関心のある現象に対して  
多面的に光をあて、真相をあぶり出す**

テキストの輪読と並行して、代表的な日本企業の事例を題材としたケース・ディスカッションにも取り組む。事実を把握した後、理論に基づいて企業行動の背景を推察し、議論や分析を重ねていく。そして、集大成となる4年次の卒業研究では、学術的にも社会的にも意義のある問いを立て、論文作成に注力する。個々の興味関心が出発点となるだけに、論文のテーマも実に多彩である。佐々木准教授に、指導を行う際

に心掛けていることを聞いた。

「学生とは最初に、なぜ選んだテーマに興味関心があるのか。を擦り合わせます。見えている表面上の現象だけで判断をせず、真相をあぶり出すことに論文の意義があるからです。社会科学とは、さまざまな社会現象を可視化すること。物事を見る視点を増やし、多面的に光をあててもらいたいと思っています」

社会科学の中でも商学は、自分自身が企業から商品サービスを提供されている消費者の目線で学べるため、非常に身近な学問といえる。そして経営戦略や経営組織は、社会に出れば必ず接点を持つ領域でもある。そうした意味でも、佐々木ゼミで学ぶことは社会に出る前に行う有効な知のトレーニングになるだろう。

ゼミ生による卒業論文テーマ（抜粋）

- グーグルから見る自動運転のこれから
- ユーモアがリーダーシップに与える影響
- アートを用いた地域ブランドの構築と地域ブランド・ロイヤリティに与える影響
- 新時代のCRM —ソーシャルメディアの可能性—
- 『健康経営が企業イメージに及ぼす影響：テキストマイニングを通じた分析』
- eラーニングに対する既存教育産業の優位性
- ソーシャルゲームの収益性はどのように生まれるのか
- アメリカにおけるDtoC ブランド企業の成功要因の考察
- テレワークがもたらすコミュニケーションの変化によるリーダーシップについての考察
- ラーメンコンプレックスの長期的成功要因



【経済学部】比較経済史



マシュー ノーラット  
准教授

過去の経済活動を史料から読み解き、  
影響を与えた事実を統計分析によって発掘する

歴史を学ぶ意義とは、過去の出来事を知ることだけではない。「なぜ起きたのか」「社会にどのような影響を与えたのか」を理解し、歴史から得た知恵や教訓を現代や未来に活かすことにある。

経済史という学問も、同様の意義を持つ経済学の一分野である。時代とともに変化する経済活動に焦点をあて、歴史的な史料の評価や検証を通じて事実をひも解いていく。事実をあぶり出す際に有効となるのが、**「比べる」**という学術的アプローチであり、その研究方法を修得できるのが**「比較経済史」**の授業である。主に**「時間」**や**「空間・地域」**を比較用の指標に置き、統計分析によって浮き彫りとなった類似点や相違点を考察する。知識の詰め込みに終始せず、歴史として残っていない事実を自ら発掘していく授業の中心に迫る。

史料の理解力と統計分析のスキルを  
並行して身につける二本立ての授業

この授業では、日本史における世帯・家・人口の史料に基づいて学修が進められていく。古代（律令時代）から近代（大正時代）までの史料を取り上げ、**「人と家」**、**「世帯と国」**といったテーマが設けられている。人々の営みや社会現象との相関関係を学修し、並行して経済

活動に影響を与えた要因を統計分析によって明らかにする点に特徴がある。歴史学と統計学が一体となった学びといえるだろう。

授業は週2枠開講され、経済史の研究者である2人の教員が指導を行っている。その1人である友部謙一教授が担当する授業枠では、史料に対する理解力の強化に取り組み。社会の枠組みである制度が成立した背景や過程の解説が行われ、当時の状況が記された一次史料からの情報の読み取りに注力する。その後、既存の研究成果や比較研究の可能性について討議を重ねていく。

対して、マシューノーラット准教授が指導を行う授業枠では、一次史料からの情報の読み取りから始め、データ化、分析方法や比較研究方法までを一貫して実践的に身につけていく。その際に活用されるのが統計分析フリーソフトRであり、基礎的なプログラミングを修得していく。分析に取り組む際は、学生自ら加工した歴史データに基づく探索的データ解析を行い、先行研究を通じて比較に用いる指標や考察上のテーマを探る。

人々の営みをあぶり出してこそ  
新たな展開や創造につながる

比較研究とは何か、具体例をあげてみる。人







歴史に対する理解と、  
データ分析のスキル修得、  
両方を楽しみながら  
学んでいます



経済学部4年  
川口貴史さん

授業で印象に残っているの  
は、歴史書や文献といっ

た一次史料からの情報の読み取りです。第三者によって加工されていることが多いWEB上の情報とは異なり、紙に残された当時の史料は出所が明確である反面、解読や変換が困難なものが少なくありません。データ化する際に自分なりの解釈が必要になるため、そのことも事実を読み解くスキルを高めてくれたと思います。また、多くの気づきを得たのが「明治時代におけるエリート層」の統計分析でした。私は職業別・産業別に分類し、当時のエリート層が就く仕事の傾向を分析しました。そして浮かび上がったのは、大学卒業後に官僚や軍人となる人の多さでした。大半が企業への就職を目指す現在との違いに驚き、推察を通じて導き出した「働く＝国家に資する」という当時の職業観に触れたことは大きな収穫でした。私がこの授業を履修したのは、興味があった歴史とデータ分析を並行して学べるからです。両方を楽しみたい人には特に薦めたい授業です。

比較する手法や  
統計分析ソフトの活用スキルは、  
大学院での研究にも  
活かしています

一橋大学大学院経済学研究科  
修士課程2年  
ユウ シキョウ  
熊 芷馨さん



の授業を履修したのは、も  
ともと経済と歴史のつなが  
りに興味があったからです。たとえば、戦争が繰り返された時代は、戦地に向かう男性の人口が減り、女性人口が増える傾向にあります。そうした現象が国の経済、ひいては社会、政治にどう反映されるのか。過去の歴史から新たな視点や発想を得られる点に魅力を感じています。比較するという手法は、大学院で行っている研究にも活かすことができている。研究テーマは、中国の杭州市（江南地域）で近代化が最も進んだ15世紀-19世紀前半の経済発展についてです。授業で修得したプログラミングや統計分析ソフトを活用するスキルも成果を出すうえでとても役立っています。そして何よりも、経済史という自分が一番好きなことを掘り下げて学んでいるので、大きな達成感を得ることができています。

口分布に注目し、戦前と現在、および、都市部と地方を比較すると、現在は過疎化が進む地方の人口が、戦前までは都市部を上回っていることが分かる。どのような事実が生んだ社会現象なのか。その答えは出身地、男女比、出生率などのデータをもとに、通時的かつ多角的に分析してこそ明らかになる。指導を行うノラト准教授に、授業の狙いや目的について尋ねた。

「教科書にも載る歴史は誰もが知っています。しかし、その裏側で起きていたことをあぶり出していくのが、この授業の醍醐味です。当時の社会を理解するには、その基本単位である家族や個人に焦点をあて、人々の営みとその背景状況との相互関係を推察する必要があります。その際に有効となるのがデータに基づいた統計分析であり、その相互関係をあ

ぶり出すスキルを身につけてもらうことが授業の目的です。また、あぶり出した事実を新たな展開や創造につなげる能力を養ってほしいと期待しています」

2023年度の課題として与えられたのは、「明治時代におけるエリート層」の史料であった。当時と現在との比較、学歴、世帯構成、就業先の産業・職業など、どのような観点から考察するかでさまざまな事象が発掘され、そこには多くの気づきや発見が満ちている。

学生がこの授業を履修した理由は、「経済現象の研究に新たな視点を加えたい」をはじめ、「データの統計分析手法を身につけたい」「歴史を学ぶことが好きだから」など幅広い。その誰かが面白さや醍醐味を感じとれることも、「比較経済史」を学ぶ魅力となっている。

### 授業の内容

- |             |            |
|-------------|------------|
| 第1回：概要      | 第8回：結婚と出産  |
| 第2回：近世の社会   | 第9回：職業と経営  |
| 第3回：近世の経済   | 第10回：財産と相続 |
| 第4回：人口史料の成立 | 第11回：日本と外国 |
| 第5回：人と家     | 第12回：近世と近代 |
| 第6回：世帯と国    | 第13回：期末発表  |
| 第7回：生命と死亡   |            |

### 学修する時代区分と史料

- 第1回：ガイダンス／日本史における世帯・家・人口史料
- 第2回：古代日本(1)／律令時代の史料
- 第3回：古代日本(2)／奈良時代の史料
- 第4回：中世日本(1)／平安・鎌倉時代の史料
- 第5回：中世日本(2)／室町・戦国時代の史料
- 第6回：近世日本(1)／江戸時代初期の史料
- 第7回：近世日本(2)／江戸時代中期の史料
- 第8回：近世日本(3)／江戸時代後期の史料
- 第9回：近代日本(1)／明治時代の史料
- 第10回：近代日本(2)／大正時代の史料
- 第11回：研究史(1)／江戸時代以前の研究史
- 第12回：研究史(2)／江戸時代の研究史
- 第13回：研究史(3)／明治・大正・戦前の研究史



江藤祥平教授

「人権とは何か」という正解なき問いに迫り、  
論じることで未来を思考するための理性を養う

「人権」という言葉は日常生活の中でもよく耳にする。それは「人が生まれながらにして持っている権利」とも称され、日本国憲法では国民の権利として保障されている。

平等かつ普遍的に尊重されるはずの権利だが、現代社会においてもハラスメントやSNS上での誹謗中傷によって侵害され、世界を見渡せば紛争や差別などによって人権が侵害されている国や地域が存在する。そもそも人権とは何か。なぜ人は平等でなければならないのか。こうした根源的な問いを論じ、意味を考える場となったのが、すべての法学部生が受講する指定基礎科目「憲法（総論・人権）」である。人権を論じることによって育まれるのは、あらゆる事案に対して隠された前提や自分の先入見を疑い、より良い未来を考えることができる理性である。

根源的な問いを  
論じることで養われる

真の主体性や対話力

「憲法（総論・人権）」は主に1年生を対象として秋・冬学期に開講される。学生は、憲法の総論・人権に関する諸問題を通じて、憲法学説や判例に関する基本的な知識を身につけることができる。法学における核となる授業だが、そ

の特徴は知識の修得に終始しないことである。人権という抽象度の高い権利がテーマであるため、学生は、具体的な事案に即して自ら意味を考えながら論じていく必要がある。その狙いについて、指導を行う江藤教授に話を聞いた。

「一番の狙いは『主体性とは何か』を考えてもらうことにあります。社会が用意した常識や高校までの教育で学んできた前提を疑い、目の前にある現実が実は誰かにとっては不都合であることに気づきながら、自分の中に深く入り込んでいく。そして、主体的に社会をどうえ直したとき、何が見えてくるのか。そうしたプロセスは、とりわけ人権という問題を考える際には重要です」

江藤教授が学生に養ってほしいと期待するのは、根源的な問いを論じる力。そして、論じるための知見や視座を得てもらいたいと話す。

「なぜ人間は平等でなければいけないのか、そのことを説明できる人は実は世の中にほとんどいません。そもそも何をもって平等と見るかも人それぞれです。これが民法や刑法といった法律であれば、基本的には価値の問題に「ミットすることなく正解を引き出すことができます。対して、人権の解釈には明快な正解がありません。自分自身の存在に関わる問題でもあるため、必ず誰かと誰かの存在を賭けた価値をめ

授業の内容（2023年度実績）

- |                        |                          |
|------------------------|--------------------------|
| 1. 人権保障の歴史             | 17. 社会権①：生存権・教育を受ける権利    |
| 2. 憲法の最高法規性・違憲審査制・憲法改正 | 18. 社会権②：労働基本権           |
| 3. 人権の限界：公共の福祉         | 19. 人身の自由と適正手続           |
| 4. 思想・良心の自由            | 20. 国務請求権／参政権            |
| 5. 信教の自由               | 21. 人権の主体：外国人            |
| 6. 政教分離                | 22. 人権の主体：天皇・皇族、未成年者、団体  |
| 7. 表現の自由①              | 23. 人権の射程：私人間の人権保障       |
| 8. 表現の自由②              | 24. 人権の射程：特別な法律関係と人権     |
| 9. 表現の自由③              | 25. 平和主義①：憲法9条の意義        |
| 10. 表現の自由④             | 26. 平和主義②／まとめ：9条をめぐる政府解釈 |
| 11. 表現の自由⑤／学問の自由       |                          |
| 12. 経済活動の自由：職業選択の自由    |                          |
| 13. 財産権                |                          |
| 14. 生命・自由・幸福追求権        |                          |
| 15. 法の下での平等①           |                          |
| 16. 法の下での平等②           |                          |





物事の真理を追究してこそ  
問題解決の糸口が  
見えてくると気づきました



法学部 1年  
園部慧人さん

**学**んだ印象として  
は、憲法（総論・  
人権）という分野は抽象

性に富んでおり、哲学的とも感じました。江藤先生は具体的なエピソードを交えて解説し、学生に問い掛けをしてくださるので、視野を広げながら主体的に考えることができます。授業で教科書を用いない点もユニークな特徴です。授業を通じて“自ら知ろうとする姿勢”が養われているように感じています。答えがないように思える人間社会の問題に対しても、多面的に事象を考察することで先入観が取り除かれ、問題解決の糸口が見えてくると考えるようになりました。将来の目標は法曹界で活躍することであり、検察官か弁護士を目指したいと考えています。江藤先生からは「いろんなタイプの法曹人が社会にいたほうがいい」とエールをいただき、モチベーションが高まるばかりです。

人権意識を高めることは  
法に携わるうえで  
不可欠だと感じました



法学部 1年  
吉田早希さん

**印**象に残っているの  
は、裁判所が下し  
た処分違憲審査にお

ける“二重基準論”に関する講義です。それは人権の制約を経済的自由と精神的自由の二つに分けて考慮するという視点でした。経済的自由が奪われた場合、自由は経済活動によって回復することができます。一方で、精神的自由は他者から抑圧されれば自ら回復できないため、民主主義を限られた人のものにしなないためにも厳しい審査が必要だと理解を深めました。将来は法曹界で活躍したいと考えており、法に携わる者として人権意識を高めることは不可欠だと感じています。法律には、さまざまな解釈があり、判例も常に正しいというわけではありません。大事なことは、法律を覚えることではなく、どのように活用するか。そう気づかされた授業です。

くる対立となります。人によって解釈が異なる中で、どのようにコンセンサスを得て『普遍的』な定義を築き上げていくか。対話の仕方を見つけてもらうことも授業の到達目標の一つです」

**人権問題を自分自身の言葉で  
言語化できてこそ未来を思考できる**

授業はコロナ禍の余波もあり、今学期まではオンデマンド（録画配信方式）で行われている。学修成果を確認するため、授業後に提出を求められるのがWEB上で回答するアンケートである。設問は、学生が人権問題を自分事としてとらえやすいストーリーでまとめられている。さらに目を引いたのは、ChatGPTが導き出した答えも示されていることである。

「よく学生に話すのは『情報は触れた時点で死んでいる』ということ。それは誰かの回

路を経て発信された過去のものであり、AIはそれを最大公約数的に抽出しているに過ぎません。対して、人間の主体性や知性というのは生きたものです。自分自身の言葉を作り出すことは、誰も紡ぎ出したことのない言葉で語ることであり、それは未来を思考することと同じです。今、この時にはかり目を向けているようでは、学問の志す未来が見えてこないと思います」

自分が現在どこに位置し、どのような世界を築いていきたいか。その指針を示したものが人権であり、ひいては憲法であると江藤教授はとらえている。そして学生に対しては、前例主義の社会に身を置くだけでなく、自分自身が世界を動かす起点になれると気づいてほしいと願っている。この授業で得た気づきや発見は、法曹界を目指すか否かにかかわらず、法学部生にとって未来を生きる糧になるはずだ。

### 人権に対する学生への問い（例）

初回と第2回の授業を通じて、講師の江藤教授は人権を学問として中立に語ろうと努めていたようであったが、江藤教授は無自覚に人権についてある前提を採用しているように学生Aには思えた。しかし、学生Aはその前提をうまく言語化することはできない。

#### 【問】

あなたが学生Aであれば、どのように言語化するか。400字～600字程度で下記に記しなさい。なお、ChatGPTに同じ問いを投げかけたところ、その前提は「人権は普遍的で不可侵のものである」というものであった。しかし、江藤教授によると、その前提を疑っていたことだけは確かだとのことである。

【社会学部】地理学（人文地理学）



小泉佑介 講師

人間の営みがもたらす地域特性の変化を視覚化  
自ら仮説を立て、地球社会の課題解決を探る

地理学という学問分野は幅広く、そして奥深い。一般的に日本で高校まで行われている地理教育では、地形、気候、植生、土壌といった自然環境の成り立ちにはじまり、人口、産業、文化といった人間の営みまでまんべんなく学習する。一方、大学で学ぶ地理学は、そうした自然と人間との関わりから地域の特性を解き明かすことを目指しており、社会学部の授業で学べる「人文地理学／社会地理学」もその一つとして位置づけられる。

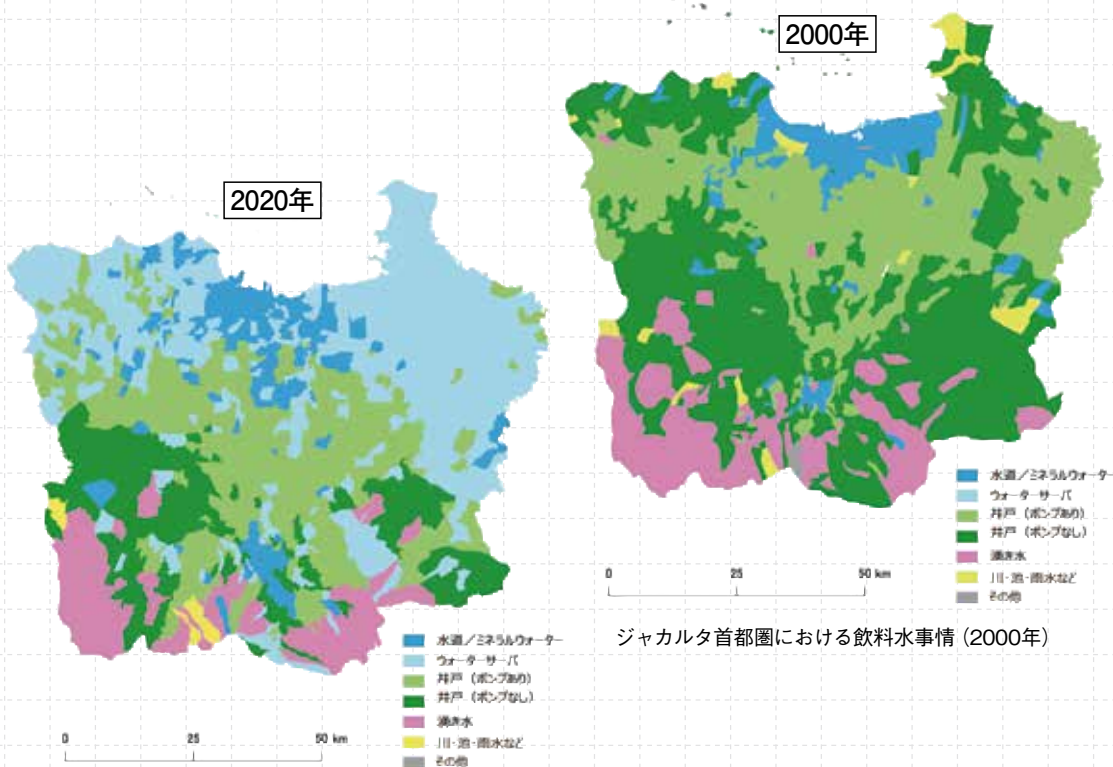
その傘のもとには、貧困や犯罪などの社会問題をはじめ、経済、都市、文化、歴史、政治などを研究対象とする地理学分野も存在する。「なぜこの地域には人口が密集しているのか」「どのような社会経済活動が環境破壊を進める要因となっているのか」。抱いた疑問や問題意識を出発点に、自ら仮説を立てて現地の実態を調査する。そうしたプロセスを経て、地球社会の課題解決に向けた知見を得られることが、この学問の魅力といえる。

「人間－環境関係」をテーマに  
地域に生じた現象の文脈を読み解く

授業は大きく二つのパートに分けられている。前半に行われるのは、学説史に基づいた

人文地理学の理論や方法論についての学修である。19世紀から現在までの学説史について解説が行われ、地球社会の課題解決において人文地理学のアプローチがどのような知見をもたらすのかを学んでいく。考察の軸として指導を行う小泉講師が設けているのが、「人間－環境関係」というテーマである。

「たとえば、地域に生じる人口の集中・分散といった現象が、どのような文脈によって決まるのか。一つは地形や気候といった自然環境条件が効いてくると考えられるでしょう。たとえば、ある地域での人口が増えたと別の地域に移住していく人々が出てくるわけですが、移住先の土地が開拓可能であるかどうかによって人口分布が決まるといえます。一方、森を切り拓き、都市を形成するといった人間による自然環境の『改変』プロセスにも注目する必要があります。こうした人間と自然との関わりを捉える上で、人文地理学では「景観」というキーワードを重視してきました。現在で言えば、人間と環境の相互作用によって成り立つ『文化的景観』が世界（文化）遺産の登録基準の一つに挙げられており、こうした部分にも地理学の知的蓄積が反映されているといえます」



ジャカルタ首都圏における飲料水事情（2000年）

ジャカルタ首都圏における飲料水事情（2020年）



課題解決策としての有効性を判断するうえで自分の尺度を持つ礎ができる授業です



社会学部3年  
山田凌雅さん

**私**が所属するゼミでは開発途上国の地域

研究に取り組んでいます。研究対象であるアフリカについて小泉先生から学びたいと思ったことが履修の動機です。授業では課題解決の具体的な事例を学び、授業で学んだ知見をゼミでの研究に活かしたいと思いました。人文地理学を通じて学んだのは、現地の実状を把握することの重要性です。たとえば、先進国が進める途上国での開発を、現地の人々はどう受け止めているのか。砂漠化防止への取り組みでは、森林が増える一方で放牧地が減少し、食糧不足を招いていたりします。起きている事象に対する課題解決策として適しているかどうかは、現地の実状によって異なると気づかされました。だからこそ一般論に流されず、自分で調査を行い、自分の尺度で判断することが大切だと感じています。

“地域+地球規模”で環境問題を考える視点や視野の大切さに気づきました



社会学部4年  
小山菜奈さん

**人**文地理学を学ぶ面白さは、環境によって人間の営みがどのように変化するかを知り、その関係性を科学的に解明する点にあると思います。ゼミでも人文地理学を専攻していますが、分析にあたっては定量的なデータを用いるだけではありません。現地に足を運んで手や体を動かし、人と話をする中で、行動の背景にあるさまざまな事象の理解に努めています。私は交換留学で1年間フィンランドに滞在し、そこで自然と暮らしの深い結びつきを実感しました。そのことが都市緑化に関心を持つきっかけになり、現在取り組んでいる卒業論文のテーマにつながりました。環境問題に取り組むには、目に見える地域レベルでのミクロ現象に加えて地球規模で起きているマクロ現象にも注視する必要があり、切り分けて考えているだけでは解決できないと、人文地理のアプローチの重要性に気づきました。

地図で表すことで視覚化される地域における発展や衰退

後半の授業では、前半で学んだ知識の応用に取り組み。『人間—環境関係』を掘り下げるため、各回の授業では、具体的な事例が紹介される。基になっているのは、長年インドネシアをはじめとした東南アジア地域研究に取り組んでいる小泉講師の知見である。課題を読み解く枠組みとして人文地理学的なアプローチから、現地で実態を調査するフィールドワークを重視してきた。

授業の特徴について小泉講師に尋ねたとき、例として提示されたのが、インドネシアの首都ジャカルタ周辺における『飲料水』の分布変化を時系列で示した地図だった。主に湧き水

や井戸が使用されていた2000年からの20年間で、ウォーターサーバーが急速に広まったことが一目瞭然である。

「指標とするものを地図で表すことで、各地域の特徴を視覚化できます。大事なことは、変化の要因について自ら仮説を立て、現地調査によってその実態を正しく把握して検証することです。こうした学びを通じて、学生には人文地理学の有効性を実感してもらい、地図を描くことでマクロな事象をミクロな視点で読み解く力を身につけてほしいと期待しています」

仮設の立て方も、事象の見方も、人それぞれ異なる。人文地理学は、地球社会の課題に興味関心を持つ人すべてに受講を薦めたい学問である。

授業の内容 (2024年度予定)

- 第1回 イン트로ダクション
- 【人文地理学の理論・方法】
- 第2回 人文地理学の視点
- 第3回 「人間—環境関係」のとらえ方①
- 第4回 「人間—環境関係」のとらえ方②
- 第5回 場所・空間・スケール①
- 第6回 場所・空間・スケール②
- 【人文地理学の応用】
- 第7回 東南アジアの人と自然
- 第8回 東南アジアにおける「人間—環境関係」
- 第9回 「文化的景観」という意味付与
- 第10回 環境運動のローカル／グローバル
- 第11回 ローカリティを問い直す
- 第12回 アジアの大都市という空間
- 第13回 地球社会の課題解決にむけて

「ソーシャル・データサイエンス学部」ソーシャル・データサイエンス入門Ⅱ



榎山 敦教授

ファイルドワークを通して社会課題に触れ、  
データサイエンスの知見を活用し、解決策の糸口を探る

2023年4月に新設されたソーシャル・データサイエンス学部。『ソーシャル』は経済学、経営学、法学、政治学、社会学などの社会科学を意味する。つまり、この新学部で学修するのは統計学や情報・AIなどのデータサイエンスのみにとどまらない。社会科学も幅広く体系的に学び、データサイエンスの知見を実装することで現代社会における新たな課題を解決できる人材の養成を目指している。そして、新たな学術領域への第一歩となる科目の一つが、ソーシャル・データサイエンス学部の全学生が1年次に履修する「ソーシャル・データサイエンス入門Ⅱ」である。

学修の舞台はキャンパスの外に広がっている。国立市や企業・団体などの協力を得て、ファイルドワークを通して社会課題の理解や発見に力を注ぐ。より良い社会を構築するために、どのようなデータを収集・分析することで人と社会への働きかけにつなげていくべきか。そうした考察と実践を重ねる授業の魅力に迫る。

どんなシステムが社会に必要なか、  
想像力を拡張するための第一歩

「ソーシャル・データサイエンス入門Ⅱ」は1年次の秋冬学期に開講される。ローカルおよびグローバルな社会課題を洞察したうえで、社会システムをデザインする方法や、社会課題の解

決におけるソーシャルデータサイエンス活用の視点を育てる。それに先立ち、学生は、春夏学期に「ソーシャルデータサイエンス入門Ⅰ」を履修する。この授業ではソーシャルデータサイエンスの全体像をつかみ、社会科学やビジネス・社会課題の各領域におけるデータ分析事例のほか、4年間の学修の礎となるグループワークの手法、資料収集と分析手法などについても学んでいく。これらの学びを踏まえ、知識を活用する機会となるのが「ソーシャルデータサイエンス入門Ⅱ」である。指導を行う榎山教授に、授業の狙いについて話を聞いた。

「ソーシャル・データサイエンスを学ぶ材料は世の中にあります。授業では、実際に現場に出るファイルドワークを課題として与え、教室の中では体験できないリアルな社会に飛び込んでもらいます。学生たちは学部で4年間学んだ後、社会に求められる実践的なシステムをつくらせていく立場に立つでしょう。そのときに、本質的にどんなシステムが世の中に必要なのかを想像できなければ、社会課題の達成に近づくことができません。この科目は、その想像力を拡張していく第一歩となります」

データは単なる数値ではなく、  
その裏には人々の気持ちがある

全13回にわたる授業では、序盤に国内外の社



授業のテーマ（2023年度実績）

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：国内外の社会課題1
- 第3回：国内外の社会課題2
- 第4回：SDS入門課題Ⅰ：社会課題の領域設定
- 第5回：SDS入門課題Ⅰ：データを集める
- 第6回：SDS入門課題Ⅰ：データを表示する
- 第7回：SDS入門課題Ⅰ：プレゼンテーション
- 第8回：SDS入門課題Ⅱ：ローカルな課題を発見し達成する
- 第9回：SDS入門課題Ⅱ：ニーズ調査
- 第10回：SDS入門課題Ⅱ：データに基づく俯瞰
- 第11回：SDS入門課題Ⅱ：プロトタイピング
- 第12回：SDS入門課題Ⅱ：課題へのアプローチ方法の評価
- 第13回：SDS入門課題Ⅱ：プレゼンテーションとまとめ





現場に出るからこそ  
得られる視点があり、  
課題解決の糸口を見いだす  
プロセスが学べます



ソーシャル・  
データサイエンス学部1年  
宮原堪爾さん

この科目は、他の授業で修得し  
た統計分析やプログラミング

のスキルを試す実践の場になりました。また、定量的・定性的な調査の手順や手法を学べたことも収穫でした。私が参加したフィールドワークの舞台は、キャンパスの近くにある新しいコンセプトの本屋・コワーキングスペース『ひらくスペース』でした。この施設では孤独を感じている子どものサポートが行われており、そのための実態調査を依頼されて取り組みました。子どもと対面してヒアリングを行い、地域の中学校にアンケートを依頼し、データの収集と分析に努めました。調査を進める中で、孤独の原因となるファクターにまで踏み込めなかったことが反省点でした。授業を通して感じたのは、現場に出るからこそ想像力が膨らみ、得られる視点があるということです。そして、社会課題へのアプローチ方法が学べる。そこに、ソーシャル・データサイエンスを学ぶ価値があると思いました。

データサイエンスの知見は  
手段であり、  
あらゆる社会課題の解決に  
有効だと実感しました



ソーシャル・  
データサイエンス学部1年  
菅原万愛さん

大 学ではAIなどのテクノ  
ロジーを学修し、高齢化

社会が抱える課題にアプローチしたいと考えており、社会科学とデータサイエンスを複合的に学べるのが入学の決め手でした。この科目は修得した知識を活用できる機会であり、期待が膨らみました。フィールドワークでは、東京女子体育大学が行っている地域交流活動に携わりました。希望した理由は、高齢者介護教室の改善がテーマだったからです。受講する高齢者とサポートする学生、それぞれに対面ヒアリングやアンケート調査を実施しました。その後のデータ分析や報告書作成に至るプロセスの中で改めて感じたのは、データサイエンスはあらゆる社会課題の解決に有効な手段だということです。一方で痛感したのは、相手の本音を引き出すコミュニケーションやユーザーインサイトを探ることの難しさでした。フィールドワークで得た教訓を活かし、今後は収集したい情報に偏りなくリーチできる社会調査のスキルやさまざまなデータ分析の手法を修得して、社会のニーズをとらえた課題解決に取り組んでいきたいと思っています。

会課題について学修する。実例を参考にしながら理解を深めるとともに、データ活用による科学的なアプローチによって社会システムを構築していくシステム工学的な物事の考え方を身につける。また、社会課題の解決に有効なデザイン思考やコミュニケーション手法についても学び、多様性を重要視することが社会のイノベーションにつながることを学生同士で議論しながら感じ取っていく。

その後、学生は大学近辺でフィールドワークに取り組む。用意されるフィールドは、国立市役所や公共施設、社会福祉協議会やボランティアセンターなど実に多彩である。2023年度は12のグループに分かれて展開した。現場でのヒアリングや実態調査に始まり、課題の領域設定、データの収集・分析、課題へのアプローチ、

中間報告を含むプレゼンテーションへと進んでいく。こうしたフィールドワークを通して、学生は、社会や人々の生の声を聞き、抱える課題について多角的に検討する。学生に対して期待することを檜山教授に尋ねた。

「フィールドワークでは、想定外の問題に直面することも当然あります。そこから何を学び取り、どのような発見があったのが非常に大事であり、最も評価される部分といえます。学生に覚えてほしいことの一つは、扱うデータは単なる数値ではなく、その裏には一人ひとりの人間の気持ちやドラマがあるということです。授業の中で学問と現実とを行き来しながら困難に直面し、社会課題を解決するための知識を渴望してほしいと願っています」

フィールドワークにご協力くださった団体・施設一覧

- 国立市公民館
- NPO法人 くにたち農園の会
- くにたち未来共創拠点 矢川プラス
- 東京女子体育大学
- 国立市社会福祉協議会 (くにたち社協)
- 国立市ボランティアセンター
- NPO法人 国立市観光まちづくり協会
- Jazz & Bar Harbor Light (一般社団法人ナガイキ)
- 立川市社会福祉協議会 BASE☆298
- NPO法人 くにたち富士見台人間環境キーステーション
- 国立市役所 健康まちづくり戦略室
- 国立市 ひらくスペース



# ソーシャル・データサイエンス学部・研究科、 交流拠点を整備

2023年秋、東本館内にソーシャル・データサイエンス学部・研究科のイノベーション交流拠点(MECHIU Lab)が完成した。このプロジェクトは、不動産大手の三菱地所株式会社(以下、「三菱地所」と一橋大学との共同研究契約締結により実現した。その概要や狙いについてレポートする。

## 東本館に学部・研究科の 交流拠点を開設

2023年3月16日、一橋大学と三菱地所は、データドリブンでの価値創造に資する空間デザインについて実証研究を行い、交流拠点の整備と活用、大手町・丸の内・有楽町エリア(以下、「大丸有エリア」)での実証研究を通して社会課題の解決を行うことを目的として、「データ駆動型社会における価値創造空間のデザインと実装」に関する共同研究契約を締結した。両者は、データサイエンスを活用し、産業界や地域を巻き込んだイノベーションプロジェクトが集積する空間・拠点づくりをはじめ、国立エリアおよび大丸有エリアにおいて、空間を使った実証実験や他社との情報連携などを実施し、社会課題解決を目指していく。

その第一弾となる取組が、三菱地所の協力により、東本館の一部を交流拠点にリノベーションするというプロジェクト。概要は次のとおりである。

## ● コモンスペース

1階には、ソーシャル・データサイエンス関連資料を展示する一面のシエルフやカフェコーナーなどがあるスペースを設ける。教員や学生が日常的に気軽に過ごせるよう、カジュアルに寛げるスペースを意識。教員や学生だけでなく、共同研究を行う企業のスタッフも集まり、コミュニケーションが創発されることも狙っている。

テーブルや椅子は可動式にし、スクリーンやプロジェクトターなどを用意して、セミナー開催など多目的に用いられるようにする。

## ● 研究スペース、ラウンジ

2階には、学生の研究活動向けのスペースや研究成果を展示するラウンジを設ける。学生が個人で集中して研究に没頭したり、少人数で議論したりすることができるようホワイトボードや可動式のテーブルを配置。

ソーシャル・データサイエンス研究において

は、センサーを利用して人の動きをモニタリングキャプチャでデータ収集するといった実験や、バーチャルリアリティやロボットを用いたワークシヨップなども行われる。こうした器材や空間を用意し、学生単独および企業との共同での研究活動を行えるようにする。

また、研究成果も展示し、企業などへのアピールの場としても活用する。

この交流拠点は、一橋大学ソーシャル・データサイエンス学部・研究科が広く社会と接続していく拠点として、重要な「顔」となるだろう。



東本館



コモンスペース



コモンスペース





ラウンジ



研究スペース

## スタートアップ輩出 地域連携の拠点に

ソーシャル・データサイエンス研究科教授  
**檜山 敦**



新設された交流拠点は、一橋大学発ベンチャーのインキュベーションセンターとなるとともに、地域にも開放し、地域の課題解決に役立つ

ことができると思っています。

インキュベーションセンターとしては、たとえば1階のコモンスペースにおける学生同士、学生と教員、あるいは学生と企業や地域などのカジュアルな会議の中でさまざまなアイデアが触発され、そのアイデアが2階北側のミーティングスペースで具体的に議論され、そこで導き出された方法論は2階の研究スペースで実証研究を重ね、具体的な成果として発表する、といった流れをイメージしています。

なお、ソーシャル・データサイエンス学部・研究科発ベンチャーとしては、テクノロジーを強みとする存在が想起されますが、本学の場合はいくまでも「ソーシャル」として、社会課題を解決することを眼目とするベンチャーを輩出していくことも意識したいと考えています。

こうしたインキュベーションだけでなく、地域社会との関わりも重要な役割であろうと思っています。たとえば行政が出先機関を置き、地域における課題解決のためのデータ収集・分析を行うといった取組も考えられます。あるいは、本学部・研究科から学生などを地域に派遣して共に課題解決に取り組むといった動きがあつて

もいでしょう。

このように、この交流拠点は広く社会に開いた存在として、さまざまな人たちが集まる場となればよいと考えています。

この交流拠点づくりを主導していただいた三菱地所は、これまで東京大学や東京医科歯科大学などの共創プロジェクトや共同研究に取り組んでこられていますが、このほど本学ソーシャル・データサイエンス学部・研究科とも共同研究契約を締結してくださり、大変ありがたく思っています。こうしたお力添えを受け、我々教員一同としても、教育や研究活動を加速させていただきます。

## 街や商業・ビジネス空間の 魅力向上にデータを活用

三菱地所株式会社 × TECI 運営部  
運営・ビジネス開発支援ユニット 兼  
プロモーション・エコシステムユニット 副主事  
**長野 笑生 氏**



一橋大学がソーシャル・データサイエンス学部・研究科を開設し、一般企業との共同研究やPBL (Project-Based Learning) に積極的に

取り組む意向であることを知り、三菱地所としてもぜひ参画すべく、共同研究契約締結を申し入れさせていただきました。

私は一橋大学商学部の出身者ですが、「キャンパス・オブ・インダストリー」を輩出してきたのが国随一の大学として、社会課題解決のためのデータサイエンスに取り組むという趣旨に大いに共感しました。そして、本学部・研究科の学生さんと教員の皆さん、企業などが交流し、研究活動を深めていける施設づくりに協力させていただきます。

不動産業としての当社は、街や商業・ビジネス空間の魅力や価値をいかに高めるかというミッションを担っています。この課題に、データを大いに活用すべきと考えています。

たとえば、街中や施設内に多数の監視カメラが設置されています。現状は主に防犯のために活用されていますが、このカメラを用いてどのような時間帯や天候の際にどのような属性の人がどれだけ通行しているか、といったデータを収集するとともに、イベント開催フロア構成、店舗の業態などと人流変化を掛け合わせることで、どのような要素が集客に貢献しているかといったことを分析することが可能です。これまでは、複雑な要素が絡み合っているこうした不動産の価値向上施策は、勘と経験に基づいて行ってきた側面が強いです。これを、エビデンスベースで明確化できることがもたらす効果は非常に大きいものがあります。一橋大学とは、こうした共同研究やPBLに取り組んでいきたいと考えています。

不動産業界は、全体的にデジタル化が遅れていると指摘されています。当社は、一橋大学とデータ駆動型社会における空間の価値創造に関する研究に取り組む、業界のデータ活用をリードしていきます。

# 誰もが気軽に立ち寄れる場所に～ ダイバーシティ推進室

2023年6月、「LGBT理解増進法」が成立するなど、

政府は誰もが生きやすい社会づくりに向けて、ダイバーシティを推進している。

一橋大学においても、2022年11月、従来の男女共同参画推進施策に重ねて、全学的に、多様性、公正性及び包摂性（ダイバーシティ、エクィティ及びインクルージョン）を推進することを目的として、副学長をトップとする「ダイバーシティ推進本部」を設置。

この下部組織として「ダイバーシティ推進室」が新設されている。

そこで、野口貴公美副学長（広報、ダイバーシティ担当）に、同室の位置づけや活動内容、どのように利用してほしいかなどについて話を伺った。



野口貴公美副学長  
（広報、ダイバーシティ担当）

## 一橋大学に関わる あらゆる人が対象

ダイバーシティ推進本部は、これまでの男女共同参画推進本部を基盤として設置され、対象を「男女」から、人種、民族、国籍、性別、性自認、性的指向、障がい・疾病の有無、年齢、言語、宗教、信条、出身、地位、家族関係など、さまざまな属性に広げ、ダイバーシティ担当副学長というポストの新設とともにスタートした。新しい推進本部の下に置かれるダイバーシティ推進室も、一橋大学に関わるあらゆる人を対象とした組織と言える。

同室は、国立東キャンパスの大学生協（東プラザ）1階正面という、誰もが気軽に利用できる便利な場所にある。同室では現在2名の職員が常駐し、学生や教職員に対応しているほか、ダイバーシティに関する本や資料も用意され、ダイバーシティについての理解が深められる環

境となっている。

主催イベントとしては、年4回程度のペースで少人数の事前申込制による「グループ・メンタリング（情報交換会）」を開催。2023年6月には「家族と離れて暮らすことで見えてくるもの」というテーマで行われた。また、月1回程度を基本に誰でも参加できる「フリーサロン」を開催し、ダイバーシティ理解について啓発に努めている。

「わかりやすい場所にあるので、通りかかったときにでも気軽に立ち寄ってほしい」と野口副学長は話す。

## 誰にとっても 居心地のいい環境をつくる

「ダイバーシティ」と聞くと、特定の人たちの問題で、「自分にとってはどのような関係があるのだろう」と思う人もいるだろう。ダイバーシティ推進室も、差別や疎外を感じたりしたときに相談に行く特別な場所、と思われがちである。

「そんな特別な場所」などではなく、誰にでも利用をしていただきたい場所です。「何をやっているのだろうか？」といった興味から訪ねていただくことも大丈夫です。職員と何気ない話をする中で、普段はあまり意識していなかった、自分の問題、あるいは自分のことではなく、友人のことについて、何か気づくことがあるかもしれません。自分と同じ個性を持つ人はどこにもいないわけですから、誰もが、それぞれの多様な個性を持っていると思います。大学の構成





員の皆さんにとって居心地のいい環境をつくる  
ことがダイバーシティ推進室のミッションです  
から、ぜひ、普段使いしてほしいと願ってい  
ます」と野口副学長は強調する。

ダイバーシティは、教職員の人事や出産・育  
児、学生のキャリアデザインから、キャンパス  
ライフ全般にまで関わる非常に裾野が広い事案  
でもある。一橋大学に関わるあらゆる人が尊重  
され、居心地よく過ごせる環境づくりは、誰も  
が意識すべきことと言えるだろう。そのため  
も、折に触れてダイバーシティ推進室を利用す  
ることには意義があると言える。

### 取組を研究材料にし、 成果を社会に還元

今後のビジョンについて、野口副学長は次の  
ように話す。

「本学の優れた点として、研究力が挙げられる  
と思います。ダイバーシティ推進室も、利用す  
る人たちの居心地の良さの追求に加えて、その  
取組を学術的にも深く掘り下げ、広く社会に還  
元できるようにしていきたいと考えています」

一橋大学は社会科学の総合大学であり、ダイ  
バーシティやジェンダーレスについては社会学  
などの研究テーマでもある。こうした恵まれた  
基盤を活かし、本学における取組を研究力と結  
びつけ、より高度な成果につなげていくという  
構想だ。

「ダイバーシティ担当副学長就任に当たり、広  
く他学の取組を調べてみました。本学のダイバ

シティ推進体制はまだ日が浅く、後発的であり、  
予算や人員の規模も他学と比較するとまだ小さ  
いのが現状です。ただ、規模などの「大小」を  
比較するというよりも、それぞれの大学の特性  
に則った推進のあり方を考えるべきではないか  
と思います。そこで、本学においては、本学の強  
みを活かした取組として、ダイバーシティに知  
見の深い先生方に協力員となっていたとき、知  
恵をいただきながら、連携して施策を進めてい  
くという体制づくりに取り組み始めています」

2020年3月、新型コロナウイルス感染症  
のパンデミックが宣言され、4月に緊急事態宣  
言が発出された。社会のあらゆる場所で人同士  
の接触が制限され、本学のキャンパスも閉鎖さ  
れた。一方で、講義はオンラインやオンデマン  
ドで行われ、大学の一つの目的である教育の場  
は確保された。しかしながら、もう一つの目的  
である、キャンパスに学生や教職員が集い、さ  
まざまな交流を通じて人格形成を行うといった  
機会は、ほぼ2年間にわたって失われた。

「こうした初めての事態を経験し、キャンパス  
という場で学生と教員、学生同士がリアルに対  
面し交流することの価値を誰もが実感したと思  
います。コロナ禍を経て、改めて、人は一人で  
は生きていけず、多様な人同士のつながりの中  
でこそ生きていけるということ、大学に集うこ  
との大切さを、再認識できたのではないかと思  
います」と、野口副学長は結んだ。

# 目の前にいる人々と幸せを共創するサービス・マネジメント



## すべてはサービス

### ——サービス・ドミナント・ロジックの世界観

私の専門はサービス・マネジメントという分野です。

かつてのサービス研究は、製造業に対するサービス業というように産業を分けてとらえていました。当時のサービス・マネジメントは、モノに対するサービスの特性に焦点を当てていました。生産と消費が同時に起こる「同時性」、つくり置きすることができない「消滅性」、見えない・触れないという「無形性」、誰が、誰に、いつ、どこで提供するかに左右される「変動性」。こうしたモノにはないサービス固有の特徴に注目し、それらがもたらす経営課題を抽出し、それを乗り越えるための経営論理を明らかにする。それが1980年代～2000年代初頭にかけてのサービス・マネジメントでした。

サービス固有の特性が生み出す経営課題に取り組むためには、マーケティング・マネジメント、ヒューマン・リソース・マネジメント、オペレーション・マネジメントという三つの機能を切り離して議論するのではなく、むしろ、顧客を目の前にするその時間・空間においていかに統合するかが重要となります。たとえばスターバックスは、自宅でも職場でもない「第三

の場所（サードプレイス）」を提供することを、戦略の根幹に据えていることで知られています。「第三の場所」は、香り高いおいしいコーヒーを味わいながら、ゆつくりと過ごせる時間やゆつたりとした空間に身を置き、店員とのフレンドリーなコミュニケーションを楽しむことを通じて実現されます。そのためには、心地良い接客など顧客接点におけるマーケティング・マネジメント、そこで働く従業員のスキルやモチベーションの向上などのヒューマン・リソース・マネジメント、効果的な店舗運営のためのオペレーション・マネジメントが、顧客を目の前にしたその瞬間、その場所で統合的に実行される必要があります。そのために、「サービス・プロフィット・チェーン」などのフレームワークが開発されました。

その後、2000年代以降、サービス・マネジメントは、モノとサービスを分けてとらえるのではなく、すべてをサービスとしてとらえるようになりました。たとえば、iPhoneとそのアプリは切り離すことは難しく、モノでもありサービスでもある。また、コマツの「KOMTRAX」（建機の遠隔稼働管理システム）に代表される「IoT（モノのインターネット）」は、顧客接点を製品の購買時にとどまらず、その前後を通じて常に顧客とつながることを可能にします。そして、モノやサービスの使用段階において顧客がとるさまざまな行動と企業が展開する諸々の活動が組み合わさって共に価値をつくる「価値共創」の経営論理を明確にしようとする分野として発展を遂げるようになります。

このように経済・経営現象をすべてサービスの観点からとらえ、自社、顧客、組織外のさまざまな主体であるステークホルダー間の価値共創のありさまをとらえようとするのが、「サービス・ドミナント・ロジック」という世界観です。私の研究対象であり、かつ、私が教育に臨む際のスタンスにも通じる世界観です。

## 京都の呉服屋の長男

### ——世界を目指す第一歩

私は京都の呉服屋の家に生まれました。3人兄弟の長男で

す。面と向かって言われたことはないのですが、私が店を継ぐものとの期待を感じながら育ちました。両親はもちろん、親族にも近所にも自営業が多い中、商社勤務で世界を飛び回っていた母方の伯父、メーカー勤務で同じく世界各地の土産話を聞かせてくれた父方の叔父、この2人は私に「外の世界に出てみたい」と強く思わせてくれる存在でした。

そして高校生の時、転機が訪れました。当時の中曽根政権下の教育改革によって、国立大学はそれまでの一校受験から複数校受験が可能になりました。私は一橋大学と神戸大学を選択。どちらの進路も簡単に周囲の理解を得られるものではありませんでしたが、やはりビジネスパーソンだった2人の影響は大きかったと思います。「外の世界に踏み出すならビジネスを学ばなければ」との思いからその2校を選択し、最終的に一橋大学経済学部に入學しました。

私が入學した1987年前後という時代は、当時商学部長であった今井賢一先生（一橋大学名誉教授、故人）のお声かけで、野中郁次郎先生（現一橋大学名誉教授）が一橋大学に移ってこられたり、アメリカで経営学のPhDを取られた竹内弘高先生（現一橋大学名誉教授）をはじめ、多くの先生方が続々と海外から帰国してくるといって、そんなタイミングでした。また、如水会等による支援のもと、海外派遣留学制度が始まったのもこの頃です。

私は一橋大学経済学部に着きながら、3年次には商学部の竹内先生のゼミを選択。3年次の途中から1年間、前述の留学制度で、アメリカのペンシルベニア大学ウォートン校に留學しました。

## 理論と実践の反復横跳び

### ——相互のリスベクト

もともとビジネスの世界に踏み出そうとしていた私が研究者を志すことになったきっかけの一つが、この1年間の留學でした。「世界の学生というのは、こんなにも真剣に学ぶのか」と衝撃を受けたのです。受験や試験のための勉強ではなく、自分が学びたいから学んでいる。オンキャンパスの寮に入っ



たのですが、ルームメイトが、インド出身の1年生（のちに家業を継いでダイヤモンド商となる）、ドイツとスペインのミックスの3年生（現在、スイスのザンクトガレン大学教授）、フランス出身の交換留学生（エンジニアのキャリアを投げうって大統領選に出馬するも、おしくもマクロン大統領に敗れる）の3人でした。国籍に関わりなく、世界中から学生が集まり、学び合っている。この衝撃は日本に帰国してからも薄まることなく、「自分が寝ているこの時間も、彼らは勉強している」という思いが頭から離れませんでした。時間を惜しんで学び続けるというマインドセットはこの時にできたのだと思います。

もう一つのきっかけは、帰国後にリサーチアシスタントとして参加した二つのプロジェクトです。当時、竹内先生が野中先生と一緒に進めていた、その後『知識創造企業』（東洋経済新報社）という本になるプロジェクト。そして、ハーバード・ビジネススクールのマイケル・ポーター先生が世界10か国間の競争力を分析し、その後『国の競争優位』（ダイヤモンド社）という本にまとめるプロジェクト（そのうちの日本のプロジェクトを竹内先生が率いていました）。指導教員である竹内先生はもちろんのこと、野中先生やポーター先生と直接やり取りする機会を得ました。研究と実務、理論と実践を、反復横跳びのように行き来する。単に行き来するだけではなく、両方の世界をリスペクトし、知見を共有できるように発信する。このようなキャリアがあると知ったとき、研究者を志すようになりました。

## 学生の飛躍的な成長 — 教育のインパクト

先生方が熱意を注いでいたのは、リサーチプロジェクトなどの研究活動に対してだけではなくありませんでした。ティーチング、つまり教育活動にも全身全霊をかけて取り組んでおられました。

研究は地道な作業の連続で、数年や十数年、数十年をかけて取り組む活動ですが、それは人類の叡智に貢献する営みであると考えています。一枚一枚は薄いかもしれないけれど「次の知識の層」を重ねていく。そして、研究に勝るとも劣らず、異なる種類の貢献を人類にもたらすことができるのが教育で



あると思います。教育は数か月や数週間、数日間という比較的短い期間でも大きなインパクトを生み出しうる可能性をもっています。自分が関わる人たちが成長を遂げる姿を身近で実感できる、これほど素晴らしい職業があるでしょうか。

私が一橋ICS（一橋ビジネススクール国際企業戦略専攻）で担当しているMBAプログラムの授業では、「Participant-centered Learning（参加者中心の学び）」を根幹に据え、参加者が互いに学び合う「互学互習」の最大化を心がけています。学生の9割近くが外国

出身者で、国籍や業種、経歴なども様々です。その多様性を最大限に活かす学修体験を目指しています。そのための手段として、すべての学生の発言を、議論の貢献度に応じて「3点」「1点」の5段階で評価し、フィードバックします。「1点」は、ケース教材等をよく読み込み、事実やデータに基づいた発言をすることで議論を進める貢献に対する評価。「2点」は、問題に対する自らのスタンスを明確にし、その理由を定性・定量分析に基づいて論理立てて説明することによって議論を深める貢献

や、異なる意見を呼び込むことによって議論に多様性をもたらす努力に対する評価。「3点」は、その発言によって、クラス全体がそれまでとは異なる違う視点で問題をとらえることができるようになったり、次の大事な問題に移行する好機をもたらしたりしたことに対する評価、という具合です。「0点」や「マイナス1点」は、ケース教材の準備ができていない、議論の内容を聞いておらず既出の意見を繰り返す、など、そこに集まってお互いに学び合おうとする全員的时间を無駄にしてしまう行為がその対象となります。そのための準備は学生にとっても私にとっても大変ですが、授業を履修する前後、学期をまたぐ前後、学年をこえる前後では、彼らの

学修に対する姿勢や議論に貢献するための行動は見違えるように変わっていきます。その様子を目の当たりにする醍醐味たるや、ほかに代えがたいものがあります。

## サービス・マネジメントの原点 — 実家の呉服屋の原体験に

一橋ICSは社会人大学院なので、受験者は書類選考や面接試験を通じて、それまでの社会人人生を振り返り、在学中に何を学びたいか、学んだことを修了後にどう活かしたいか、その明確な意志が問われます。入学後も彼らがその意志を堅持するために、今自分はここで何を学ぼうとしているのか、それは何のためなのか、常に意識して取り組むための環境をつくる。実はこれこそ、サービス・マネジメントの実践なのかもしれません。

なぜサービス・マネジメントにこだわるか。サービスをモノと対比して研究する分野として立ち上がり、自分と他者のやりとりを通じて価値共創の論理を読み解く分野として発展したのがサービス・マネジメントです。つまるところ私は、研究においても教育においても、目の前にいるさまざまな人たちと一緒に、それぞれが実感する幸せを共に創っていききたい。今、話していて気づいたのですが、目の前にいらっしゃるお客様に真摯に向き合い、長きにわたるお付き合いを大切にしていって、京都の呉服屋に生まれ、両親の背中を見て育った日常の中にこそ、その原点を見つけることができるのかもしれない。（談）

### 経営管理研究科国際企業戦略専攻教授 藤川佳則（ふじかわ・よしのり）

一橋大学経済学部卒業。同大学院商学研究科修士。ハーバード・ビジネススクールMBA（経営学修士）、ペンシルバニア州立大学Ph.D.（経営学博士）。ハーバード・ビジネススクール研究助手、ペンシルバニア州立大学講師、オルソン・ザルツマン・アソシエイツ（コンサルティング）、一橋大学大学院国際企業戦略研究科専任講師、准教授を経て現職。一橋ICS（一橋ビジネススクール国際企業戦略専攻）では、MBA Programのプログラムディレクターを15年間務め、同プログラムの発展に寄与（QSグローバルMBAランキング2023年度日本国内1位、アジア18位）。また、一橋大学の副学長補佐（国際交流）も務めた。一橋ICSにおいて教鞭をとるほか、米国・イェール大学経営大学院（Yale School of Management）客員教授、トルコ・コチ大学経営大学院（Koc Graduate School of Business）客員教授、スイス・EHL（ローザンヌ・ホテルスクール）客員教授、韓国・ソウル国立大学ビジネススクール（Seoul National University Business School）客員教員を歴任。また、一橋ビジネススクールの海外協定校50校以上の学生を対象とする短期集中型プログラムやオンラインコースを担当。専門はサービス・マネジメント、マーケティング、グローバル・バーチャル・チームズ。



## 日本の契約法は、 経済活動の潤滑油としての役割を 十分に果たせていない

私は企業法学の領域において商取引法、国際取引法、企業法務について研究を行っています。中でも重点を置いているのは、契約法の国際比較の研究と契約実務の法務DXを見据えた企業法務の研究です。

欧米における契約法は、国際商事法務の中でも一目一番地の分野です。国際契約とその交渉は、企業の法務部員や涉外弁護士が仕事を進めていくための基礎になっています。それは契約法が形成されてきた歴史と深い関係があるのです。たとえばアメリカの契約法は、エコノミクスの世界で契約を語るような理論が構築されてきました。世の中に最適投資を生み出すという観点からしっかりとルールを作ろうという発想がベースにあり、それはヨーロッパでも変わりません。ですから欧米の契約法は、企業取引および経済全体の潤滑油として機能している、と考えられます。

一方、日本の契約法は、欧米のスタンダードとは乖離した特異な姿を見せています。そうした特異性は契約の成立が争われる裁判において顕著に現れます。契約の成立が争われる場合、欧米では契約交渉の中での

# 商取引法をテーマに、企業と学術を架橋する

りとりをみて、どの言動が「申込み」でどの言動が「承諾」かを厳密に特定していきます。申込みと承諾の言動の中に、経済活動としてのあるべき合理性をルールとして忍び込ませるわけです。しかし、日本ではそのような手法は用いられず、契約はふわっとした感覚で成立する、しなないと判断されるのです。もちろん、日本なりの考え方に基づいて構築されてはいるのですが、そこには、経済活動の潤滑油としての契約の役割を致命的に狭めてしまっているというのが私の見解です。なぜそうなってしまったのか、今後どうしていけばいいのか。私は商取引法の現場である企業とアカデミアを架橋しながら、疑問や提案を発信していきたいと考えています。

また、実務の現場では、契約実務の姿は、イノベーションとともに大きく変容していくことが想定されます。企業法務がリーガルテックなどのツールを取り込みながらどのように進化していくべきかについて情報発信をしていきたいと考えています。

## 条文や判例が何の役に立つのか

### 見えなかった学生時代

東京大学法学部に進学した頃の私には、法律を学ぶことに対してそれほど深い動機づけはありませんでした。そのため、商法や民法の授業を受けていても、条文や判例が何の役に立つのか全然ピンと来ない。自分は何をやっているのか、疑問に感じる場面が多かったですね。

司法試験についても同じような距離感がありました。当時の司法試験は500人ほどしか受からないような仕組みになっていたこともあり、「試験勉強に大学生活の4年間を捧げるなんてできない」と考えていました。むしろ私は、テニスサークルの取りまとめなど、大学生生活全般を満喫することに時間を割いていました。そんな生活の中で次第に「日本に留まっていたらダメだ」と考えるようになったのです。英語はあまりできなかったのですが、国際取引に関わる仕事に就きたい。

そこで商社を中心に就職活動を行い、三菱商事への就職を決めました。

## 就職し、法律に関わることを知らない

### 自分に愕然とする

入社して2年目、私は1年間フィリピンに駐在しました。現地の重電機ブランドのアドミニストレーションとして、プロジェクトを管理することが私の役割です。その際に湧き上がってきたある思い。3年目に帰国し、仕事を進める中ではつきりと感じるようになったのです。取引に関わる法律について「自分は何も知らないのだ……」ということ。

司法試験などから縁遠かったとはいえ、法学部で学んだ人間です。にもかかわらず、法律についてなにも知らないことに気づかされました。同時に、ビジネスの世界で何かコアになるものが欲しい、とも思ったのです。ちょうどその頃、偶然にも法務部長とつながりができ、「法務部に来ないか？」と誘われたので、5年目の秋に異動させられました。

## 法務部に異動、法律と実務の

### 接点をつかむために、留学へ

法務部に異動して感じたことが二つありました。一つは、学生時代に学んだ法律と実務、つまり本に書かれていることと現実起こっていることが近づいたということ。もう一つは、「あの授業ではこういうことを言っていたのか」という気づきがたくさん生まれました。

もう一つは、アカデミアの存在の重要性です。アカデミアの学説や考え方は、企業法務の実務に陰に陽に影響を与えています。無意識に取り込んでいるケースもあれば、反発するケースもありますが、企業法務部門に身を置くとアカデミアとのつながりも見えてきやすいようです。

その後、2002年に、私は企業派遣でコロンビア大学ロースクールに留学しました。研究テーマははじ



めに触れたように、欧米の契約実務では二丁目一番地となる契約法です。大学の教授に指導を受け、ゼミにも参加し、時には研究室に足を運んで教授に自分のアイデアをぶつけ、修士論文にまとめて……というように、ロースクールの環境にとっぷり浸っているうちに、研究が楽しくなってきました。

そこで帰国した2004年頃から自分のアイデアを論文にまとめるようになりました。三菱商事の仕事の合間に研究を行っていく中で、ロンドン駐在からの帰国後の2010年に、東京大学のある教授のサポートを受け、契約実務に関する論文を公表しました。先生のおかげで学会や研究者の方々とのつながりもでき、東大のロースクールで非常勤講師としての経験も積むなど、新たな生活スタイルがどんどん確立していきました。その間、私の活動に理解を示してくれた三菱商事には今も感謝しています。

## アカデミアと実務、 企業と学生の架け橋となるために

結果的に私は三菱商事を退職してアカデミアの道を選び、2022年から一橋大学で研究・教育に携わることになりました。しかし、私は完全にアカデミアのみに集中するのではなく、実務との架け橋でありたいと考えています。

はじめに紹介したように、日本の契約法および契約実務が異質であり、経済活動の潤滑油として十分な機能を果たし得ていないという状況をどう変えていくべきか、といった発信はその一例です。なぜこういうことになっているのか、何が欠けているのか。そういう点に着目し、研究テーマとして掘り下げていく。法学部での実務を経験した私だからこそ担うべきミッションと自負しています。

架け橋という意味では、企業と学生もつないでいきたいですね。学生と話していると、彼・彼女らは私が想像していた以上に社会で繰り広げられている実務とい

# 経済活動の潤滑油である

うものに強い関心を抱いていることが分かります。ただ社会との十分な接点を持つことができない。私の人も活用しながら接点を持つ機会を提供し、進路選択の参考にしてもらおうと考えています。

また、最近では企業のDXが進んでいます。企業法務においても、AIによる契約書の自動ドラフティング、自動レビューが導入され始めました。いわゆるリーガルテックですね。またGenerative AIの登場は、企業法務の実務を根本から変革するだけの強烈なインパクトを有しています。こうした新技術をどのように有効活用できるかについて、グローバルベスでさまざまなプレーヤーが試行錯誤を繰り返しながらビジネスチャンスをうかがっています。私は日本が企業法務の分野においても十分な国際競争力を持ち得るような法務DXを実現するためにはどうすればよいのかについて、積極的に情報発信をしていきたいと考えています。学生向けにも、法律情報サービスを手掛ける企業などとコラボレートし、データベースの使い方やAIを活用した契約書の作り方などを学ぶ場を提



供する予定です。

## 360度を見渡す経営者の視点を、 学生に養ってもらいたい

そして学生には、リーガルテックなどの知見も蓄えながら、企業法務が果たすべき役割を伝え、経済活動の潤滑油である商取引法の重要性を伝えていくつもりです。

日本では、リーガルリスク管理は法務部が所管するものだと考えられています。しかし企業の命運を握る本来のリスク管理は、経営に影響を及ぼすあらゆる項目を360度の視点で見なければなりません。企業法務やリーガルリスク管理は、常に経営者の目線で考え、いくことが重要なのです。

言い換えれば、大学で学ぶ間にそのような幅広い視点を養うことができれば、社会に出たときに大いに役立ちます。だからこそリーガルリスクと向き合う現場について、しっかりと伝えていかなければなりません。このようにしてアカデミアと実務、企業と学生、それぞれの架け橋になることに、研究者としての私の介入価値があります。(談)

### 法学研究科教授

#### 小林一郎 (こばやし・いちろう)

1994年東京大学法学部卒業後三菱商事株式会社入社。在職期間中に企業派遣として米国コロンビア大学ロースクールに留学。2003年同大学ロースクール卒業(LL.M)。三菱商事欧州コーポレートセンター(在ロンドン) 法務部長、法務部コンプライアンス総括室長、法務部部長代行などを経て、2022年4月より一橋大学大学院法学研究科教授として着任。専門は、商取引法、国際取引法、企業法務。主な論文に「契約実務におけるリーガルテックの活用とその将来展望—リーガルテックによる契約実務の標準化と契約交渉スタイルの変容」NBL1217・1218号(2022)、「米国における法律業界の構造改革とリーガルテック・法務DX—統合型リーガルサービスへの希求と我が国企業法務への示唆」NBL1243・1244号(2023)、「日本的契約慣行の研究—申込み・承諾によらない契約成立の認定手法がもたらす特殊性」一橋法学22巻1～3号(2023)、「サプライチェーン・デュー・ディリジェンスと契約管理—ドイツ企業との比較から見える日本企業の課題」NBL1255・1256号(2023)等がある。

# 「生きづらさ」にアプローチする 社会ネットワーク分析



## 社会ネットワーク分析という「鉛筆」で 環境社会学、政治社会学を記述

私の主な研究領域は、環境社会学、政治社会学、社会ネットワーク分析などです。この中で、社会ネットワーク分析は、私が常に持っている1本の「鉛筆」のようなものです。私は社会ネットワーク分析という「鉛筆」を用いて、環境社会学的なテーマ、政治社会学的なテーマについて論文を展開していると言えます。

私がそのような社会ネットワーク分析という「鉛筆」を用いて研究しているテーマには、たとえば、次のようなものがあります。(1) 日本の気候変動政策過程と他国との比較・日本経済団体連合会系・経済産業省系・環境省系という三つのグループ間の綱引きによって日本の気候変動政策のあり方は決まっています。これが他国とどう異なるのかを現在、比較研究しています。(2) 福島第一原子力発電所事故後の社会運

動の広がり・原発事故後、脱原発団体を中心にさまざまな市民団体が情報共有を行い、協力関係が形成され、大規模な社会運動が起こったことを分析してきました。(3) 権力分配過程のコンピューター・シミュレーション。共通の権力者を仰ぐ個人同士が意見の違いを許容し、ローカルレベルで協力し合うことにより権力分配の不平等を緩和する過程を、ネットワークモデルを用いてシミュレーションをしています。

意外に思われるかもしれませんが、社会ネットワーク分析について学べる大学は、日本ではまだ珍しいようです。私はドイツ、アメリカ、フィンランドでの留学を通してその技術を修得しました。自らが不思議に感じていることを適正に記述し、モデル化するためのツールとして、社会ネットワーク分析を多くの学生さんに身につけてほしいと考えています。その一環として私のゼミでは、2021年度に本学の学部生・大学院生を対象に、「コロナ禍における大学生の友人関係と生活に関する調査」を実施しました。大変示唆に富む調査となりましたが、内容については最後に紹介しましょう。

### 生きづらさは

### どこから生じているのか

私が社会学に興味を持ったきっかけはいくつかあるのですが、最も古い記憶は小学生の頃のことです。高学年になった頃、私はクラスメイトたちからいじめを受けるようになりました。いじめてくる彼らは、1対1になると普通に付き合えるのに、クラスという集団になると関係が変わってしまふ。傷ついたのもちろんですが、人が集団になったときに起る、そのような独特のプロセスがとにかく「不思議」でした。その後、中学校の部活動でも、ヒエラルキーの最下位に位置

づけられるという経験をしました。このような、集団と生きづらさの関係について強い関心を持ちました。

また、当時私が住んでいた団地には、薬害エイズ裁判の原告側の関係者が住んでいたことも影響しているでしょう。小学生だった私や私の父母、同級生とその家族、私の小学校の先生たち、地元ぐるみで原告の人々を支援する経験を通じて、「既存のシステムをどうにかして変えていくこと」について、身近に感じる環境で育ちました。

高校に入ってから社会科学で政治経済について学んだ私は、マクロなシステムのあり方そのものよりも、システムの形成に至るまでの「人の動きを追える」学問を求めるところになりました。社会科学の先生から社会学の存在を教えてもらった私は、既存のシステムがどのように形成され、どのような問題や副作用を生み、どのように変えていくべきかに関心を持ちながら、一橋大学に進学しました。

### 自分が感じた「不思議」を、

### 自分のペースで調べるために研究の道へ

研究者を目指そうと考えたのは、大学3年生の夏、ドイツ





ツに留学したときです。初めての海外生活だったのでかなりの苦勞を覚悟していたのですが、案外何とかなってしまいました。電車に乗れば大学まで行きましたし、ドキュメントを読めば授業は受けられます。日本とドイツでは社会の仕組みから何からすべて違うはずなのに、ある程度日本にいるときと同じ感覚で生きられる。それは不思議な体験でした。社会システムというものは、普遍性があるということを知って体感した時間だったと思います。日独の社会のあり方の共通性や違いについて研究するの面白いかもしれない。徐々にそう考えるようになっていました。

また、留学のタイミングから、就職活動のモードに入りようがなかったという側面もあります。当時は就職活動の時期がすっかり決まっていたため、3年生の夏から1年間の留学をしていた私は、ずっとその圧力の外にいたのです。このような経緯から、気が付くと、私は研究者を目指すことになってしまいました。

## 手に負える解決策をひねり出すのではなく、手に負えないもののありかを理解すること

私の研究領域・テーマは、はじめにお伝えした通りです。私の授業やゼミに参加する学生が同じ研究領域・テーマに関心を持つ必要はなく、それぞれの関心を掘り下げてもらっています。ただし、関心の対象が何であれ、自分に引きつけて結果を考察するということを大切にしています。

まず社会調査の基本として、自分なりに調べてデータを取り、妥当な形で分析をして、筋道立てた論文にまとめます。「調べたことはこうです」「社会はこうなっています」と報告できることは社会調査の大前提ですが、私が重視しているのは、そのもう一歩先です。「なぜそうなっているのか」「どうすればより良い社会になるのか」について、自分が感じた疑問をもとに考察をするということ。現場を調べ、システムのロジックを理解したうえで、自分自身が持っている「(何となくの)生きづらさ」と照らし合わせながら論じられる。私の授業やゼミを通じて、そんなスタ

ンスを身につけてもらえたら嬉しいです。

そのスタンスはいわゆる課題解決思考とイコールではありません。さまざまな問題の中で、個々人が取り組める範囲の解決策というのはごく少数です。たとえば、小学校でいじめられていた当時の私が、解決策を提示されたとしても、おそらく救われることにはならないでしょう。むしろ解決策の前段にある、「こういうふうになっている」ということがストーリーとして解れば、その時点での生きやすさにつながるのです。自分ではどうしようもないものに折り合いをつけるため、ストーリーを見出ししてきたのが人間の歴史である、という視点を私は大切にしています。一見、「調べたことそのものの一歩先を重視する」というメッセージと矛盾しているように聞こえるかもしれませんが、自分に引きつけながら問題をとらえることで、はじめて、ストーリーというものは紡ぎだされるものだと思っています。

## ある調査がコロナ禍の一橋大学生にストーリーを提供した

ストーリーを見出す意義を実感したのが、はじめに触れた『コロナ禍における大学生の友人関係と生活に関する調査』です。2021年9月22日から1か月間、本学に通う学部生・大学院生を対象にアンケートを実施。WEB調査および調査票調査で学部生・大学院生516人から回答を得ました。

結論はシンプルで、「コロナ禍において一橋大学生の友人関係のネットワークは、自分の友人同士は友人ではない個別型へと変化した」というものです。対面のコミュニケーションが図れる場合、Aの友人BとCは、互いに友人になる可能性が高まります。この時のA・B・Cの関係は、社会ネットワーク分析の用語では「トライアディックな関係」と表現します。しかしコロナ禍ではAとB、AとCは友人同士でも、BとCは友人にはなりにくい。つまり個別型(ダイアディックな関係)にとどまってしまうのです。

トライアディックな関係が築けない場合、個々人は心理

的に追い詰められ、問題が発生したときに集団の力で解決できない、という事態に陥りやすくなります。自由回答で非常に多かったのは、「こういう調査をやってもらって救われた気がした」というものでした。学部生・大学院生は、アンケートに回答しながら「自分がどういうことになっているのか」を感じ取っていったのです。これがストーリーを見出すことの意義です。大変示唆に富む結果となりましたが、当時不満・不安を募らせていた学部生・大学院生にとっても、この調査はとても意義深いものになったようです。

## 「ツーパス以上」に

## 思いを馳せることは、社会構造に思いを馳せること

このような関係性の違いは、ワンパス／ツーパスの関係として理解することができます。自分と相手が一緒に何をしているのかを理解すること、つまり、ワンパスの範囲を理解することは、さほど難しくはありません。しかし、自分のつながっている他人が、他の人と何をしているのか、あるいはそれ以上の範囲、つまり自分が直接知らないツーパス以上の範囲を理解するのはなかなか難しいことで、コロナ禍ではその難しさが顕著になったと言えます。

この、ツーパス以上の範囲の動向を調査によって明らかにすることが社会ネットワーク分析の面白さです。もともと例えば、「ツーパス以上」に思いを馳せることが、システム、社会構造に思いを馳せることだと私は考えています。(談)

社会学研究科講師

佐藤圭一

(さとう・けいいち)

2009年社会学部卒業。2011年一橋大学大学院社会学研究科 総合社会科学専攻修士課程修了。2015年同大学院博士課程修了、日本学術振興会 特別研究員(DC1)、日本学術振興会 特別研究員(PD)、日本学術振興会 海外特別研究員、ドイツ・コンスタンツ大学 政治・法律・経済学セクション 客員研究員、フィンランド・ヘルシンキ大学 社会学部 博士研究員を経て、2020年一橋大学大学院社会学研究科講師に就任。現在に至る。主な研究領域は、政治社会学、環境社会学、ネットワーク分析、計量社会学。

# 前提を問い直す人文学の手法で、 科学技術の歴史にアプローチする



## 力学、シミュレーション、博覧会…… 広がり続ける研究テーマ

私の専門は科学史です。主に「物理学・数理科学の歴史」と「近代日本の科学技術史」、二つの領域で研究を行っています。同時に、言語社会研究科が提供する「学芸員資格取得プログラム」を西洋美術史の先生と共同で担当しています。もともとそれは「結果的にそうなった」と表現するべきかもしれませんが、今でこそ言語社会研究科で教育・研究を行っています。京都大学文学研究科での研究、国立科学博物館での資料調査や展示制作など、さまざまな外的要因に導かれてここに至っているからです。そのプロセスの中で私の興味・関心は広がり続けていったため、現在の研究テーマも多岐にわたります。

たとえば、ニュートンやオイラーの著作に基づいて物理学の誕生と発展を考究する「力学史」。20世紀後半のコンピュータ・シミュレーションの発展について、歴史的な考察を行う「計算科学史」。明治時代から現代までの「日本の物理学の教育・研究の歴史」。科学技術に関する展示を通して、科学・技術と社会の関わりを考察する「博覧会史・博物館史」……。これらの多種多様な研究テーマに共通しているのは、「過去の文献や資料を探して読み、解釈し、表現する」という姿勢です。その意味では、対象こそ科学・技術ですが、アプローチは人文学と言えるでしょう。

また、歴史を研究するためには、資料が適切に保存され、いつでも利用できる状態になっていなくてはなりません。そのため研究者の個人文書や実験機器、さらには本学の文化資源である「商品資料」などの「資料保全とアーカイブ」にまで、私の興味・関心は広がっています。そして、目一杯広がった研究テーマにどう取り組んでいくかと言えば、「その日の気分テーマを選ぶ」ということになりがちです。正確には、その日の授業や用向きによって都度、軸足を置き換えることが私なりのスタイルです。

## 高校で理系を選択し、大学院で「文転」。 科学史の研究へ

高校では理系クラスを選択し、大学では物理学を専攻に選びました。しかし私は当時から、理系・文系に関係なく幅広い勉強がしたいと思っていました。また、自

分で新しい発見をしていくことよりも、理論や概念について「何故そう考えられたのか」という背景に関心がありました。そのため授業の選択には迷いが生じ、他学部のシラバスを見て経済学部の授業を受講したこともあり。その中で、京都大学では文学部にあった「科学哲学科学史専修」の授業を受け、すっかり魅了されたのです。そこで大学院に進学し、いわゆる「文転」を果たしました。

大学院の修士課程と博士後期課程を通じ、私は18世紀のヨーロッパにおける力学の歴史を研究しました。このきっかけとなった指導教員の授業では、数学者オイラーの論文を取り上げ、フランス語の原文を音読して訳すという作業をしていたのですが、どうしてもわからないところが出てきます。私はフランス語を履修して、力学の基礎知識も持っていました。1回の授業で読み進められるのは1〜2ページが限界でした。しかも科学史の研究に求められるのは、単に原文を日本語に置き換えることではありません。原典が書かれた当時の科学の常識を踏まえ、著者の論旨を正確に理解することなのです。ということは必然的に別の論文や本を、しかも場合によってはラテン語やドイツ語で書かれたものも読まざるを得ません。その結果、博士論文はオイラーを軸に18世紀の力学全体を再考するという、哲学史・思想史に近い内容になりました。

その後、転機が訪れます。東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故は、科学の歴史を研究してきた私には衝撃でした。現在の科学は何故このような事態を引

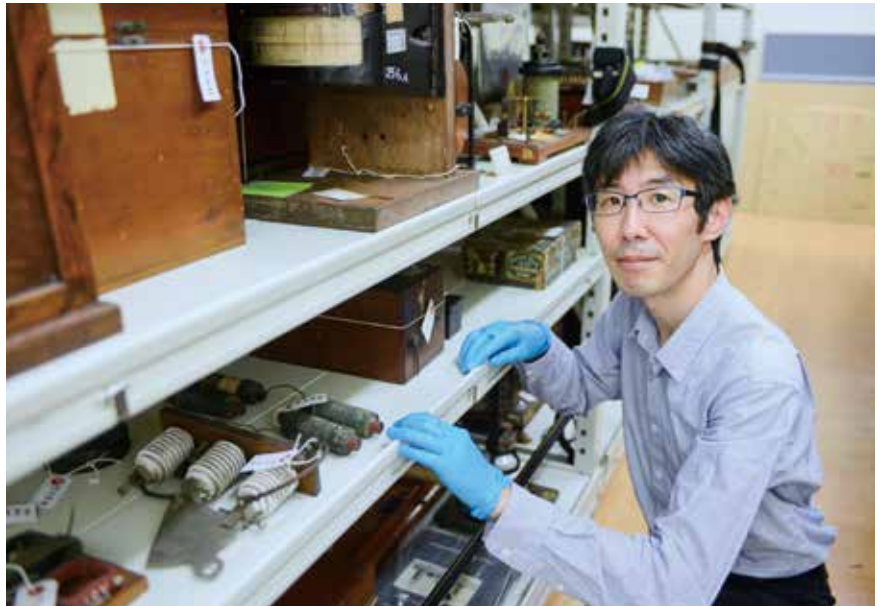


き起こすようになったのか、歴史的な過程を知り、理解しなければならぬと強く感じたのです。

## ヨーロッパから日本へ、 科学から技術へと踏み出した 国立科学博物館時代

この「転向」のあと、私は国立科学博物館で研究員として働くことになりました。もともと大学院生の頃から個人でWEBサイトを作り、科学史を一般向けに紹介していた私は、展示・講座など普及活動への興味・関心があり、応募したのです。その結果運よく採用されたのですが、8年間の勤務を通して、日本の科学者や研究機関に関する資料を調査・整理するという全く新しいスキルを修得することにもなりました。また、国立科学博物館では昔のことだけでなく、最先端の科学の内容も展示に取り込まねばなりません。そこで私は現代を、特に戦後の日本を科学史研究の対象とする機会も得ました。18世紀ヨーロッパの力学で博士論文を書いた研究者が戦後日本を対象にするということは、ふつうは考えられないでしょう。

国立科学博物館では、18世紀ヨーロッパの原典から近現代日本の一次資料へと踏み出すと同時に、科学史から技術史にも興味・関心を広げることになりました。そもそも博物館、あるいは博覧会ではモノ、特に人工物を扱うわけですから、研究者はそこに存在する技術に目を向けざるを得ません。しかも古代の車輪なども技術の一種なのです。技術史の射程は科学史よりも広く、社会との距離は科学史よりもはるかに近い。これまでご紹介してきた研究とはさらに異なる知識やスキルが求められます。はじめに「さまざまな外的要因に導かれてここに至っている」とお伝えしたのは、このような経緯があったからです。



一橋大学の「商品資料」を調査・整理する有賀准教授

もしかしたら、一つに絞って研究を深めるほうが、研究者としての評価は上げやすいのかもしれませんが、しかしすでにお伝えしたように、私は学部生の頃から「理系一択」という絞り込みができないまま、さまざまな出会いや転機によってここまで来ています。一つに絞ることは根本的に向いていないのでしょうか。

## 言語社会研究科は、一度立ち止まって 人文学を学びたい人に最適な環境

言語社会研究科で学ぶ方々は、さまざまなバックグラ

ウンドを持っています。私の研究室のゼミ生でも、学部で哲学を専攻したあと修士課程で本研究科に来て科学史を始めた人、理系から他大学の修士課程に行つて科学史を学び、現在は災害をめぐる歴史学に興味を持っている人、高校で物理の教師をしていて原子力に関心を持ち、科学史を学びに来た人など、目的は人それぞれです。共通しているのは研究において「人文学のアプローチをとる」ということでしょう。人文学のアプローチとは、世の中の前提を問うことです。科学技術にしても、現状をそのまま前提にしていくのではなく、一度立ち止まって「その前提は何なのか？」を問う。それが人文学の仕事だと私は考えています。

授業として提供されている科学史関係の科目はごくわずかですが、本研究科には人文学のさまざまな分野で研究を行う先生方がいらつしやいます。科学史のアプローチに不可欠な人文学の思考や語学をきちんと学びながら研究したい人にとっては、非常に有用な環境であると私は考えています。また、モノと向き合うことから始めて物事の意味を問い直し、再構築して発信する一連のスキルを身につける「学芸員資格取得プログラム」もありません。単位を揃えるのは大変ですが、このプログラムも吸収できるものは大きいでしょう。そもそも自らの前提を一度立ち止まって考え直したいという人には、ぜひ門を叩いてほしいですね。(談)

### 言語社会研究科准教授 有賀暢迪

(ありが・のぶみち)

2005年京都大学総合人間学部卒業(物理科学専攻)、2007年京都大学大学院文学研究科修士課程修了(科学哲学科学史専修)、2010年同大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。2017年博士(文学)(京都大学)。日本学術振興会特別研究員などを経て、2013年国立科学博物館理工学部研究員、2020年同博物館理工学部研究主幹。2021年一橋大学大学院言語社会研究科に准教授として着任、現在に至る。専門分野は科学技術史、博物館学。

人口減少・少子高齢化が進展する現代において、日本の多くの都市は規模が過大であると指摘される。都市部への人口流入が続いた高度経済成長期には郊外化とともに都市規模が拡大したが、現在は空き家が目立つ都市も多くなってきた。都市規模が大きいとインフラや行政サービスのコストが高くなり、人口減少のなかそれらのコストを賄うのに十分な税収が今後得られるかは不透明である。また、高齢化社会においては、高齢者のモビリティも喫緊の課題となる。そのような背景のもと、政府は就業、就学、居住、買い物などの都市機能を地理的に集約させたコンパクトシティを推進している。

コンパクトシティ政策のような都市政策を行う上では、それぞれの都市の特性を踏まえることが重要になる。たとえば、コンパクトシティを推進するためには、どこが都市の「中心」であるかを把握することがまず必要になるであろう。しかし、どのような場所を中心と見なすかは単純な問いではなく、地域科学の分野でもさまざまな研究が行われてきた。シンブルなものとしては、町丁目などのエリアごとの従業者数からなる地理的分布を考え、その分布のピークとなるところが中心であるという考え方があり得る。一方で、都市において人々は日々、通勤、通学、買い物、余暇活動のため移動をしている。つまり、都市においては人流が

生み出されており、それらの人流を引き寄せる場所を中心と見なす考え方もあろう。

従業者数はエリアごとに定量化された数値であり、それらの地理的分布はコロプレス地図などの形で地図上に可視化すること

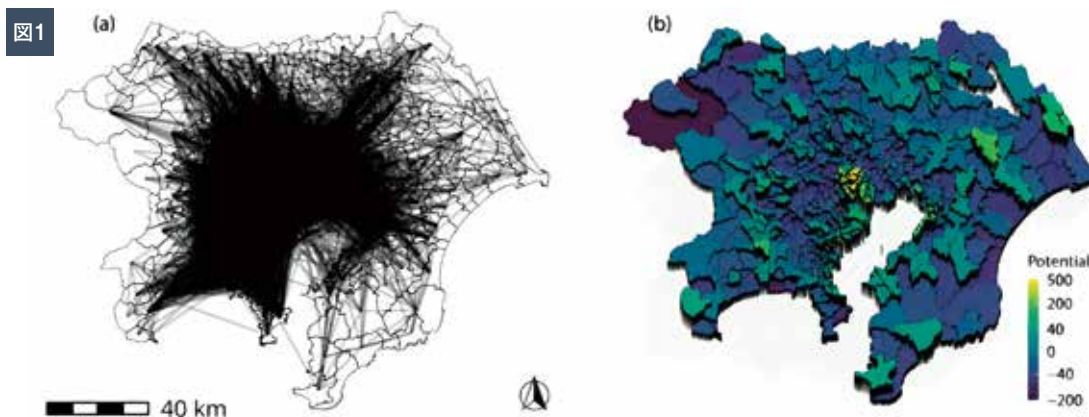


## 都市の姿を描く

経済学研究科准教授 藤嶋翔太

ができる。一方で、人流は出発地と目的地からなるエリアのペアごとに定量化された数値であり、単純な可視化はできない<sup>1</sup>。実際、エリアのペアごとに流動量に応じて太さを変えた線を引いた地図を描くと図1(a)のように真っ黒になってしまい、そこから都市の特性を把握することは難しい。

筆者は滋賀大学の青木高明氏と東北大学の藤原直哉氏とともに、人流を引き寄せる力を表す特徴量をエリアごとに抽出する研究を行った(Aoki et al., 2022, 2023)。この研究は、青木氏と藤原氏の研究分野である数理科学のホッジ理論から着想を得たものである。ホッジ理論は、水流や電流などを勾配成分と回転成分に分解する理論である。勾配成分と回転成分は地点のペアごとに定量化され、このうち勾配成分はポテンシャルと呼ばれる場所ごとに定量化される特徴量の差分であり、ポテンシャルが低い所から高い所へ水や電気が流れるという解釈になる<sup>2</sup>。これを人流に応用すれば、人流もエリアのペアごとに勾配成分と回転成分に分解され、ポテンシャルが低い所から高い所へ人が流れることになる。つまり、ポテンシャルが高い所ほど人流を引き寄せる力が強いということになる。このポテンシャルは従業者数と同様にエリアごとに定量化された量であり、図1(b)のようにコロプレス地図の形で地理的分布を可視化することができる。さらに、ポテンシャルが



(a) 通勤流動量と (b) ポテンシャルの可視化 (出所:Aoki et al., 2023, Figure 1)

低い所は逆に人流を掃き出す力が強いと解釈することができる。コンパクトシティ政策などにおいては、人流の流入先だけでなく、このような人流の流出元も重要な情報となるであろう。

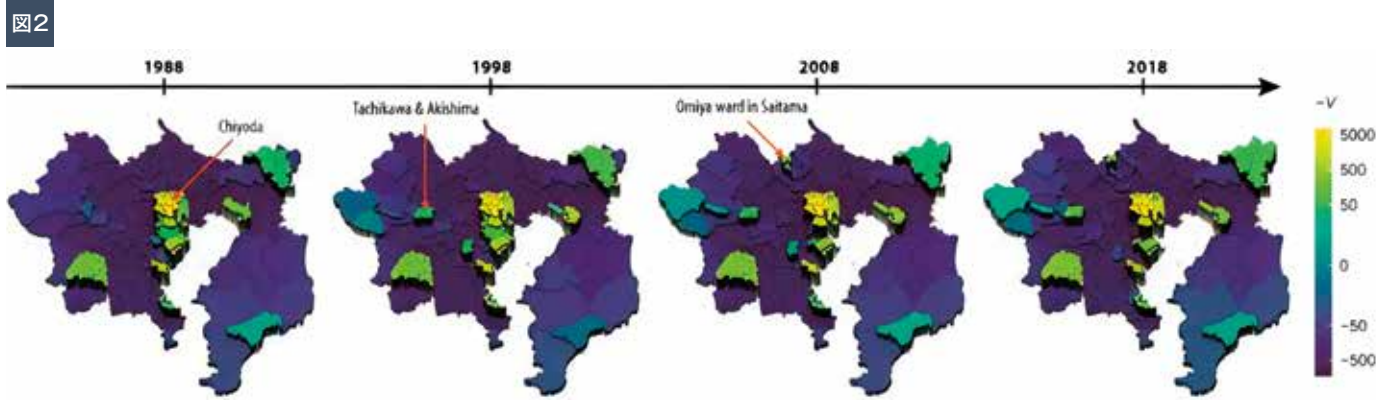


図2は、東京都市圏パースントリップ調査を用いて、首都圏における通勤トリップのポテンシャルの経年変化を見たものである。1988年から2018年の30年間で、ポテンシャルが最も高いのは千代田で変わらない。首都圏において通勤トリップを引き寄せる力が最も強い場所として、東京周辺は不動産の地位を確立している。東京周辺には多くの企業が本社を置いているが、企業の本社機能においては情報通信技術が発達した昨今でも対面コミュニケーションが重要である。また、生産活動の高度化とともに対事業所サービスの重要性が増しており、企業は取引費用を節約するために同じ場所に集まる誘因を持つ。今回の結果は、東京周辺が企業の本社機能とそれをサポートする対事業所サービスを担う場所として機能してきたことを反映していると考えられる。一方で、首都圏は単一中心というわけではなく、1988年の時点で、も横浜、川崎、厚木、千葉などでポテンシャルの局所的なピークが見られる。さらに、局所的なピークの数は経時的に変化している。実際、1998年には立川、2008年には大宮で新たに局所的なピークが出現している。これらは旧国土庁が策定した第四次首都圏基本計画において「業務核都市」として位置付けられた都市である。バブル崩壊以降、子育てと仕事を両立させる必要のある共働き世帯の増加などにより職住近接が進んでいる。実際、1995年以降、東京圏において1時間以上の通勤を行う人の割合は減少している



(高橋 2012, p. 156)。これは都心回帰と呼ばれている現象であるが、必ずしも既存の都心に人が戻っているだけではなく、通勤先も多様化していることが背後にあると言えよう。

図2では通勤トリップを考えたが、人が移動する目的は通勤だけではない。たとえば、ほかに重要なものとして買い物挙げられる。今回使用したパースントリップ調査には移動目的の情報が含まれるため、買

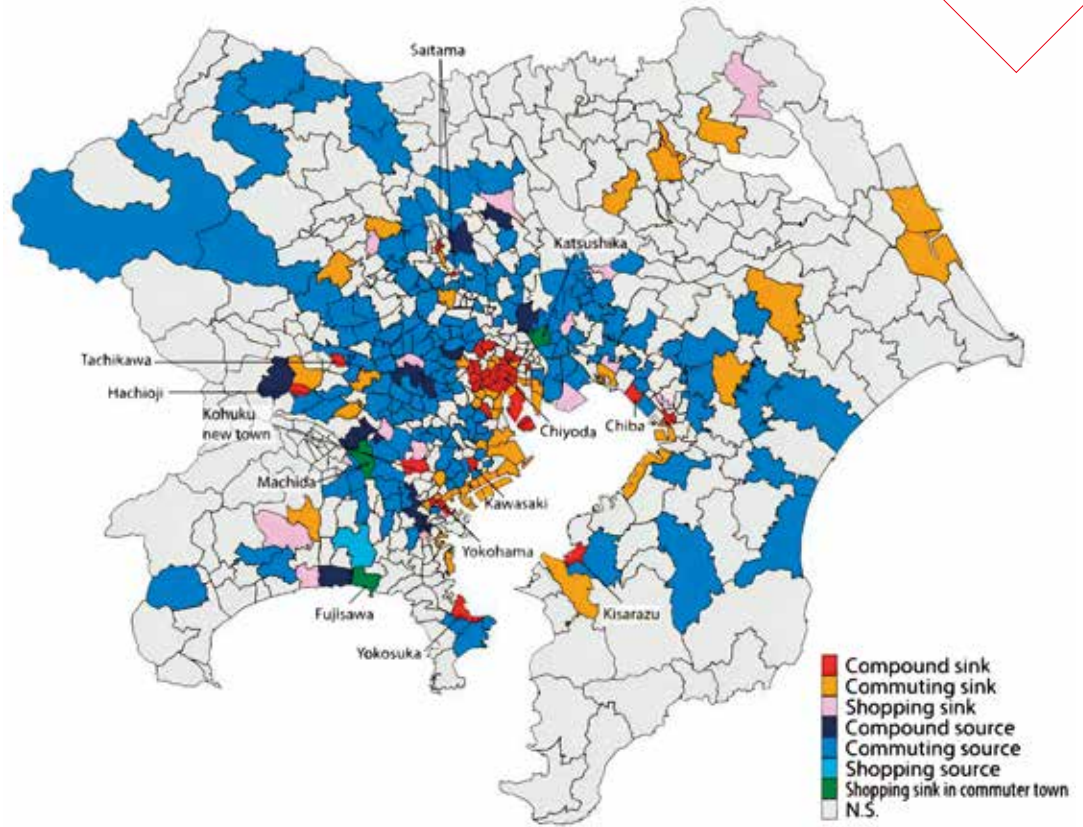


首都圏におけるポテンシャルの地理的分布の経年変化 (出所: Aoki et al., 2022, Figure 4)

い物目的の人流についてもポテンシャルの抽出を行った(図3)。その結果、通勤と買い物ではポテンシャルの分布特性が必ずしも一致するとは限らないことが分かった。図3において、通勤でも買い物でも流入先になっているエリアは“compound sink”、通勤でも買い物でも流出元となっているエリアは“compound source”と呼んでいる。これらのエリアは、人流の流入入という観点から見た役割は通勤でも買い物でも同じである。しかし、“shopping sink in commuter town”として分類しているエリアでは、通勤と買い物で果たす役割は異なる。たとえば、町田や藤沢は買い物目的の人流については流入先だが、通勤目的の人流については流出元である。通勤と買い物で人流の性質が異なるのであれば、生産活動の拠点と小売・サービスの拠点は分けて考えるのが妥当であり、そのためには自治体間での連携が必要になるであろう。実際、総務省が掲げる連携中枢都市圏構想では、中心都市とその近隣市町村が連携して、経済成長のけん引、高次都市機能の集積・強化、および生活関連機能サービスの向上を行うとしている。移動目的によるポテンシャルの地理的分布の違いは、自治体の連携のあり方に示唆を与えるものと考えられる。

- 1 さらに、経由地まで考えればペアに限定されず、より複雑になる。
- 2 ここでのポテンシャルは、正式な定義のものや符号を逆にしてはいる。人流に応用した場合、低い所から高い所へ流れるという形にしたほうが解釈しやすいからである。

図3



通勤目的と買い物目的の人流のポテンシャルに応じたエリアの分類 (出所:Aoki et al., 2023, Figure 3)

人流を引き寄せる力をイメージしたものと  
として、新聞などでは地域の転入超過数を  
その地域の吸引力と表現することがある。  
また、総務省の連携中枢都市圏構想では、  
中枢都市になるための基準として昼夜間人  
口比率1以上が挙げられている。それらは  
シンプルで分かりやすい指標であるが、今

回計算したポテンシャルとはどのような関  
係にあるだろうか。実は、すべてのエリア  
のペア間で互いに移動が可能であれば、ポ  
テンシャルは流入する通勤者数から流出す  
る通勤者数を引いたものに比例する。さら  
に、今回使用したパーソントリップ調査は  
アンケート調査であるが、母集団を正確に

反映していると見なすことができれば、ポ  
テンシャルは昼夜間人口差に比例すると考  
えることもできる。

首都圏であれば、「すべてのエリアのベ  
ア間で互いに移動が可能」という仮定は成  
り立つと考えて良さそうに思える。しか  
し、物理的に移動可能であっても、人間に  
は一日に使える時間やエネルギーに制約が  
ある。今回のデータでは、通勤者数がゼロ  
であるようなエリアのペアが全体の8割以  
上を占める。例えば、八王子と館山間の通  
勤者数はゼロであるが、両エリア間の移動  
時間は片道で3時間近くかかる。通勤者が  
いないのは、通勤が時間・エネルギーの制  
約に鑑みて実質的に不可能であるためと考  
えるのが妥当であろう。一方で、隣接エリ  
ア間で通勤者数がゼロのケースもある。こ  
れは、選択可能な通勤パターンであるもの  
の、誰もそれを選択する人がいないという  
状況である。前者と後者では同じゼロでも  
意味合いが異なるため、今回の研究ではそ  
れらを区別するために、移動時間がある閾  
値より大きいエリアのペアは選択不可能と  
してポテンシャルを計算している。移動時  
間はインフラの整備状況などに依存するた  
め、今回計算したポテンシャルは、転入超  
過数や昼夜間人口差などの指標を、地域の  
インフラの特性などを反映させて一般化し  
たものと考えることができるとする。

今回の研究では、エリア間の移動デー  
タに含まれる情報を縮約して、エリアごと  
に人流を引き寄せる力を定量化した。これ

より、人流の流入点および流出点を分か  
りやすくとらえることができた。だが一方  
で、人流の特性に関わる情報の一部を捨て  
てしまっているというのも事実である。例  
えば、ポテンシャルの分布には複数のピー  
クがあるということが分かったが、それら  
のピークの関係性については特徴付けてい  
ない。それらのピークは対等な関係にある  
わけではなく、都心とそれを取り巻く衛星  
都市のように、階層的な構造があると考  
えられよう。また、それぞれのピークの「勢  
力圏」を定量化することは、既存の行政区  
域に捕らわれずに都市の実質的な地理的範  
囲を検出することにつながる。首都圏では  
それぞれのピークの勢力圏が重なり合う複  
雑な構造をしていると考えられ、自治体の  
広域連携などを考えるうえで重要であろ  
う。今後は、ポテンシャルを抽出した後で  
捨てた「残差」の部分にも着目することで、  
都市のさらなる実像に迫っていきたいと考  
えている。

【参考文献】

Aoki, T., Fujishima, S., & Fujiwara, N. (2022). Urban spatial structures from human flow by Hodge-Kodaira decomposition. Scientific reports, 12(1), 11258.  
Aoki, T., Fujishima, S., & Fujiwara, N. (2023). Identifying sinks and sources of human flows: A new approach to characterizing urban structures. Forthcoming in Environment and Planning B: Urban Analytics and City Science.  
高橋孝明『都市経済学』有斐閣, 2012年.





# 自分を形作る価値観と 仲間が得られる大学です

社会で活躍する一橋大学卒業生の今をレポートする「つなぐつなげる一橋」。

本企画では、卒業して数年の卒業生たちに、

一橋を選んだ理由や現在の仕事と今後のキャリアについて、語っていただきます。

第二回のゲストスピーカーは、松田和輝さん（2017年法学部卒、トヨタ自動車株式会社）と

小森美紀さん（2018年経済学部卒、日本銀行）です。

コーディネーターは、平川穂乃香さん（2018年経済学部卒、

一橋大学大学院経営管理研究科経営管理プログラム修士課程2年）が務めてくださいました。

知識の習得に留まらない、  
思考する力を支える「知」を求めて

平川 まずは一橋大学を選んだ理由から伺います。小森さんは私と同じ経済学部ですが、経済学部を選んだ理由も教えてください。

小森 私は小さい頃から日本や海外の経済に興味があった。高校でも地理が好きで、国ごとの暮らし方や価値観の違いはどのように生まれるのか？途上国が先進国になるためにどんなプロセスが必要なのか？といったテーマに関心を持っていました。そんなときに「赤本」で出会った一橋大学の地理の論述問題が、まさにそうしたテーマで、とても面白かったですね。そこから一橋大学の経済学部で、こうした分野（経済地理学、国際経済学）を学べると知ったのが大きな理由です。

平川 入試問題を通じて一橋大学にシンパシーを感じたとは。入りたい学部は最初から明確だったのですか。

小森 数学も好きだったので経済学部一択でした。また在学中に留学をしたいと考えていたので、留学制度が充実しているところにも魅力を感じましたね。

平川 松田さんが一橋を選ばれたのは、どのような理由ですか？

松田 きっかけは、高校1年の時に行ったKODAIRA祭（春の学園祭）です。当時の僕は勉強面が遅れに遅れていた、3年後はどうなるんだろう……と不安を抱いていたのですが、KODAIRA祭の受験生応援企画で、齢の近い



先輩たちがとてもポジティブなアドバイスをしてくれて。そこで世界が大きく開けた感覚があり、一橋大学という環境に身を置けば学ぶことを楽しめようだと思いました。そこから進学を真剣に考え始める中で、世界史で学ぶ人間社会の盛衰のサイクルに興味を湧き、勉強が軌道に乗ってきたんです。

平川 そこから社会科学の一橋大学へ、という選択肢が見えてきたんですね。

松田 そうですね。一橋大学の法学部は、法律や法学と国際関係がセットになっているのが魅力でした。歴史の事実を学んで国際的なリスクを認識するだけではなく、今生きている世の中がどういふものなのかを知り、その中で自分が何かに取り組める手がかりをつかめるのではないか? と思い、法学部に進みました。

**自ら鍛錬を重ね、組織として人を成長させる醍醐味を知った  
端艇(ボート)部での4年間**

平川 学生生活で強く印象に残っていることは何ですか?

小森 一番は端艇(ボート)部(以下、「ボート部」)の活動ですね。大学4年間は部活一色でした。新歓期に話した先輩たちの、大学生活を捧げて一つの目標に挑戦する潔さにとっても惹かれました。長期留学と部活のどちらをとるか、かなり迷いましたが、「日本一を目指す機会



は今しかない」と言われて「確かにそうだ」と。思い切って入部を決めました。

平川 一橋大学のボート部はオリンピック選手も輩出していますよね。規模も大きくて、部活に対する熱量が非常に高いメンバーが揃っている印象です。

小森 はい。100名以上の部員と戸田の合宿所で家族のように暮らしながら練習をしていました。「日本一」という一つの壮大な目標に向かって、チーム一丸となって努力し続ける環境に身を置けたのは本当にいい経験でした。

た。中でも3年の時に漕手から運営マネージャーに転向したことが大きな転機になりましたね。

平川 マネージャー職は自ら志願されたとか。立場が変わってどのような変化がありましたか?

小森 漕手の時は自分がレースでいい成績を出すことが第一でしたが、マネージャー転向後は、いかに間接的にチームに貢献するかを意識するようになりました。特に、新人部員の育成担当を務めた際、最初は腹筋も満足にできなかった新人が立派にボートを漕げるようになり、レースでメダル獲得する姿を見たときは本当に嬉しかったです。組織として人を成長させるプロセスを体感できたことは、今のキャリアへの方向性にもつながっていると感じます。

**KODAIRA祭の実行委員長として  
二度とない感動をつくり上げた充足感**

平川 松田さんの学生時代の印象的な出来事を教えてください。

松田 はい。平川さん、KODAIRA祭(春の学園祭)の時はありがとうございます。

平川 こちらこそ! 松田さんが2年生でKODAIRA祭の委員長をされたときに、私は1年生委員として受験生応援企画に参加しました。松田さんは、1年生委員160名を2〜3か月間で東ね上げてイベントを成功させる、という大きなミッションを背負う2年生委員のリーダーで、求心力のある人だなと尊敬していました。

松田 私自身1年生委員として活動したときに、自分が高校時代に好きだったKODAIRA祭に関われる感動や交友関係が広がる喜びで本当に楽しい経験ができたので、次年の委員長を引き受けたんですね。2年生委員がやるのはいわゆるマネジメント業務で、1年生の時とは全



く違ういろいろな困難に向き合い衝突しながらも、「1年生委員や来場する学生、新人生のためになるものをつくりたい」という思い一つで、がむしやらにやり切った感があります。あんなに感動的な体験は一生に一度だと思えますね。

平川 2年生委員は1年生が楽しく活動に取り組めるように導いてくれて、進捗もきっちり管理してくれて。学年が1年違うだけなのに、本当に大人だと当時感じていました。

松田 いや、悩みの連続でしたよ。どう伝えれば1年生が納得してついてきてくれるだろうか、と考えたこともなかった問いに向き合って。この時期から一気に、自分の使う言葉やコミュニケーションの取り方が変わっていったように感じます。おかげで交流の幅がさらに広がり、同期の絆も一段と強くなりました。

### 語学力とプレゼンスキルも磨かれた All Englishのゼミ授業

平川 小森さんは授業でどのようなことを学びましたか？

小森 古澤泰治先生（現東京大学大学院経済学研究科教授）の国際経済学のゼミを専攻し、世界各国の貿易を通じた経済発展のプロセスなど、ケーススタディも交えながら、国際経済・貿易について幅広く学びました。授業はAll Englishで、質問やディスカッションも英語。最初は質問されても聞かれていることがよく分からなかったのですが（笑）、徐々に言いたいことが言えるようになり、語学面の成長も併せて感じられた有意義な時間になりました。

平川 ポート部とAll Englishのゼミを両立されていたのはタフですね。特に印象に残っていることはありますか？

小森 ソウル大学で開催された、他大学のゼミとお互いの研究成果を発表し合う合同ゼミに参加した際、アジア諸国の大学生のレベルの高さに衝撃を受けました。プレゼンテーションが素晴らしかったですし、発表会後の交流会でも主張や質問が飛び交うなど、皆、会話力もとても高く、学んだ内容をアウトプットするスキルが自分に足りないことを痛感し、その後の自己研鑽に励む大きなきっかけになりました。



平川 松田さんはどのようなことを学んでいましたか？

### 国際情勢の変化を当事者としてとらえ 自分なりの答えを 生み出す力が鍛えられた

平川 秋山信将先生のゼミで、国際安全保障や国際政治

経済を専攻しました。私も小森さんと同じく国内外の大学で開催された合同ゼミに参加し、過去・現在・未来を通して社会に対する理解を一步でも深めようという試みに大きな刺激を受けました。またケンブリッジ大学のゼミに参加したときにちょうどパリで同時多発テロが起き、宿泊していたロンドンも警戒態勢になり街並みが一変したんですね。当時は移民政策をテーマに扱っていたのですが、現地で移民への対応が厳しくなる様子を目の当たりにして、日本では味わえない緊迫感と当事者意識を肌で感じました。卒業論文執筆時は、秋山先生が学外に出

向されており、市原麻衣子先生にもお世話になりました。平川 まさに現実に即したテーマ選定ですね。ほかにはどのようなテーマを取り扱いましたか？

松田 イスラム国が激化する中での中東情勢のとらえ方や、ブレグジット、トランプ政権の動向などですね。アクセスできた情報を自分なりに解釈し、数多くの論文を読んだりして、調べるだけでは答えが出てこないような問いに答えを見つけてアウトプットする力が鍛えられました。また、ゼミでは自分が学んだことを周りと共に共有して議論の前提としていく作業も必要で、ここでも伝える力が鍛えられましたね。仲間と一緒に取り組むゼミだからこそ経験ができたと感じています。



### グローバル企業の一員として、 コーポレートコミュニケーションの 一翼を担う

平川 松田さんはトヨタ自動車に入社されていますが、どのような経緯があったのですか？

松田 学生時代、国際社会の変化が激しさを増す中で、漠然とした不安を抱いていました。社会の変化に今後高い関心を持ち続けたいと考える中で、その変化に晒され、対応を迫られているであろう産業界、中でも日本の

基幹産業の話聞いてみたいと思いました。そんな中で、トヨタ自動車の方と長時間話す機会に恵まれ、グローバルに多様な事業を展開する中での答えの無い難しさや責任の重さに、さまざまな業務を担う社員一人ひとりが当事者意識を持って、愚直に取り組んでいるのではないかと感じたんです。社会の不安定さ、将来事業の不透明さが増す世の中であっても、世界中で事業を行う企業は社会の変化やリスクに対するアンテナ感度を高めて、技術面でも公正な競争をしていながら、変化に柔軟に対応していくしかないと感じました。言葉を整理しながら自分の関心事を改めて実感し、この会社の一員として、世の中での激しい変化に、当事者として向き合いたいと思いました。

入社後は海外の政策・政治対応を行う海外渉外部に配属され、アジア地域を担当した後、2020年からワシントンD.C.のオフィスに1年3か月ほど出向する機会をいただき、アナリストやロビイストと一緒に働いていました。

平川 2020年といえば、かなり政治経済が混乱していた時期ですね。

松田 そうですね。コロナ禍、Black Lives Matter、そして大統領選挙など、「政治はこれでいいのか」と問われる課題、社会

の分断が勃発する目まぐるしい日々を過ごすことになりました。帰国後も米州地域を担当し、経済産業省、外務省の方々や、各国の大使館の方等と日々やり取りをしながら、業務を行っています。



平川 自動車産業は変革期の真ただ中で、たとえば電気自動車の市場拡大への関心も高まっているように思います。トヨタ自動車の動向には、いつも注目が集まっていますね。

松田 社会の関心としては、やはりカーボンニュートラルや

電動化と呼ばれる分野への関心が高いですね。おっしゃる通りで、地域毎に差はありますが電気自動車の市場拡大が進んでおり、さらなる技術開発、商品投入が進められています。一方で大容量電池用の鉱物資源獲得競争が激しさを増し、新たな課題も見えてきている局面かと思えます。弊社はグローバルに、フルラインナップの車種で事業を行っており、各国の経済、電力インフラ、お客様のニーズに引き合い、できる限り早く、できる限り多くの排出削減を行い、カーボンニュートラル達成というゴールに貢献する責任があると思います。よく「マルチパスウェイ」と言っていますが、電気自動車100%ですべてが解決するのではなく、ハイブリッド、プラグインハイブリッド、電気自動車、水素を活用したモビリティまで、多様な技術の強みを活かして貢献していきたいという考え方ですね。豊かなモビリティ社会を提供しながら、カーボンニュートラルに向かって社会一丸となつて進んでいくことを目指し、生産リサイクルや、エネルギーバリエーションチェーン全体で、産業横断で、政府とも連携しながら課題に取り組むことが求められているのだと思います。

平川 今後のキャリアとして、目指したいことはありますか？

松田 涉外広報というカテゴリーには強い関心を持っています。人と情報のネットワークや、国際政治経済に対する感度をさらに磨き、グローバル企業としてあるべきコミュニケーションについて、より主体的に取り組めるようになりたいですね。また、今後さらに地域毎に多様な経営が進むなかで、事業の最前線である海外事業体にも再度赴き、グローバル本社との橋渡しをするコミュニケーションにもなればと思っています。

### 金融経済の発展に貢献する中央銀行で、市場の声を聞き、提案と発信を続ける

平川 小森さんは日本銀行にお勤めですが、入行された理由をお聞かせください。

小森 ゼミで金融政策の重要性を学び、中央銀行の各国経済の発展に貢献するアプローチに興味を持ったことがきっかけでした。また、一橋大学で学問を幅広く学べたように、仕事でも、その業界で視野を広げられる環境が良いと思っていたところ、日本銀行はお金の流通や発行、金融政策の立案・実行、調査・分析……と、業務の幅がとても広いんですね。国内外に拠点も多く、長く働くうえで魅力的だと感じました。

入行後は国際局での国際収支統計の作成・公表事務や、秋田支店での県内の景気動向調査、金融市場局での金融機関から担保として受け入れられる民間企業債務の信用力審査に携わりました。直近部署では、金融市場の機能度を高めていく観点から、金融市場取引に関する調査・分析のほか、市場関係者の方々と意見交換を行う場の運営を担当しています。明確な正解がない中で、関係者と連携して提案・議論・実行……と試行錯誤を続ける仕事は学びが



多く、とてもやりがいを感じます。また、日本銀行では金融政策の運営に関する事項を審議・決定する会合（金融政策決定会合）があるのですが、そこでは、私たちが吸い上げた市場の声も、判断材料の一つとして勘案されま  
す。間接的ではありますが、市場に影響を与えている実感がありますね。

平川 今後のために取り組まれていることはありますか？

小森 夏から、イェール大学の国際開発経済学の修士課程に1年間留学します。データ分析に活かせる計量経済手法のほか、行動経済学、特に「市場参加者がどのような判断で市場取引を実施しているのか？」という側面から、ファイナンス理論を学びたいと思います。留学は大学時代からの目標だったので、実現して本当に嬉しいですね。

平川 大学時代のリベンジを果たしたのですね！留学後のキャリアはどう描いていますか？

小森 金融・決済システムに関する国際的な制度設計に関わりたいです。日本銀行は日本の金融政策を実行しているイメージが強いかもしれませんが、世界の中央銀行の一つでもあるんですね。各国の中央銀行や関係機関と協議しながら、円滑かつ安全な国際金融・決済システムを実現するために、日本としてどう貢献できるか？という課題に取り組んでいきたいです。

興味から世界を大きく広げ、  
前向きに人間関係を育んでほしい

平川 これから一橋大学を志望される方に向けて、メッセージをお願いします。

小森 大学で自分の世界を広げてほしいですね。留学やインターンシップ、部活など、何でもよいので興味を持ったことを突き詰め、チャンス積極的につかみ取ってほしいです。私にとっては、ポ

ート部やゼミでの活動がそうですが、自分を形作る価値観と仲間を得られたことが大学時代の一番の財産でした。社会人になってからも、大学での経験や仲間を思い出すことで、改めて自分の信念や働く意義に立ち返れる。このように、パワーチャージできる環境をつくれることはとても大事だと思います。今回の留学でも、現地にポーター部の同期や先輩がいることで本当に助けられました。今後も、多くの仲間と違う形で再会できるチャンスがあることを、とても楽しみにしています。

松田 私が伝えたいのは、人間関係に前向きであってほしいということです。人に興味を持って交流していれば、



平川穂乃香  
(ひらかわ・ほのか)

2018年に一橋大学経済学部を卒業後、伊藤忠商事株式会社に入社し、主に事業のリスク管理や経理業務に携わる。2022年よりグループ会社の株式会社日本アクセス（総合食品卸）に出向しながら、夜間に一橋大学大学院経営管理研究科経営管理プログラム修士課程へ通っている。



松田和輝  
(まつだ・かずき)

2017年に一橋大学法学部を卒業後、トヨタ自動車に入社。アジア地域の海外渉外を担当後、ワシントンDCオフィスの政府渉外部に勤務。帰国後は米州地域を中心とする政策渉外を担当。



小森美紀  
(こもり・みき)

2018年に一橋大学経済学部を卒業後、日本銀行に入行。現在は金融市場の機能度に関する調査のほか、金融市場の制度設計や市場インフラの整備に関する業務に携わる。

自分に興味を持ってくれる人が現れ、人生に大きな影響を与えてくれる出会いが間違いなく訪れます。お金やビジネスなど利害関係がない状態で多様な価値観に一気に触れられるのは学生時代ならでは。若い多感な時期に多くの人と交流を重ね、結果として多様な価値観を柔軟に受け入れられるようになれば、社会に出てからも相談し合え、手を差し伸べあえるようなつながりをつくっていくと思います。

小森 一橋大学の学生は、一人ひとりが、みんな何かしらの興味を持ち、それを追求し続けているところが面白いですね。

平川 確かにそうですね。「これがやりたい」というブレない軸やこだわりを持っている人が多いと思います。松田 私は人と人との距離が近いところに魅力を感じていました。学部を超えて人と触れあい成長できる環境がありますよね。ゼミや課外活動など程良い規模感の中で一人ひとりが頑張らなさと奮起できる空間がどこかに必ずある。自主性を持って頑張れる人同士がお互いに刺激し合い、今でも尊敬しあっていることを感じます。

平川 変わらず高めあえる関係性が築けるのも一橋大学らしさだということですね。本日は本当にありがとうございました。

卒業生

ご寄付金額(累計)

50万円未満

385名・6団体

会田俊貴 様	伊庭 剛 様	加藤弘志 様	小林信介 様	角谷謙太 様	長尾賢志 様	早瀬浩三 様	松土大介 様	山本由夫 様
青崎 稔 様	庵原義文 様	金木慶太 様	小林民夫 様	住山喜昭 様	長久保純子 様	原島 優 様	松本 篤 様	湯川喜雄 様
青山圭介 様	今村文彦 様	金木利公 様	小林 努 様	瀬戸隆一 様	中澤秀夫 様	原田紀一郎 様	松本慎也 様	横尾光輔 様
青山 伸 様	芋月俊博 様	上村 寛 様	小原良文 様	芹澤 諭 様	中島常之 様	東野泰希 様	松本 匡 様	横川 直 様
浅井啓輔 様	岩本和夫 様	河井春穂 様	小森 治 様	高崎快彦 様	中島秀昭 様	日比野賢一 様	三國 剛 様	横田 敦 様
安達幸宏 様	上田真一 様	川上裕義 様	近藤慶太 様	高橋敏道 様	長島 浩 様	日比野政憲 様	水岡 裕 様	横田直人 様
厚見 収 様	植田 俊 様	河崎 卓 様	齋藤健介 様	高橋豊治 様	中田裕之 様	平尾 崇 様	道本悦生 様	横地 環 様
阿部秀雄 様	牛木 豊 様	川崎 博 様	酒井壽夫 様	高橋佑典 様	中畑太一 様	平田雅彦 様	宮 一弘 様	横溝宗親 様
阿部亮平 様	梅木哲也 様	河田健吾 様	坂西秀都 様	高橋 裕 様	中村 剛 様	平林謙一 様	宮川純一郎 様	吉儀康彦 様
雨宮慎吾 様	遠藤 薫 様	川村 進 様	佐久間紀幸 様	高村 真 様	中村智雄 様	廣嶋康雄 様	三宅 海 様	吉崎 修 様
荒野義郎 様	大石倉平 様	菊池 伸 様	櫻井邦昭 様	滝澤英一 様	中村 悠 様	廣瀬 進 様	宮崎 慧 様	吉田浩一郎 様
有明秀太郎 様	大久保文雄 様	喜志雅司 様	笹岡治男 様	田口 格 様	鍋田俊久 様	廣瀬秀郎 様	宮崎伸夫 様	吉野 守 様
飯島啓太 様	大澤 久 様	北澤佑介 様	佐藤秀明 様	武井良文 様	縄田義直 様	深浦 修 様	宮崎裕治 様	米持 明 様
飯田朝次郎 様	大田浩昭 様	木下節男 様	鮫島夏洋 様	竹内栄吉 様	西 浩一 様	深町昌彦 様	宮元武利 様	四方田雄太 様
池尾愛子 様	大塚直尚 様	木下鉄平 様	澤 和宏 様	竹田清治 様	西田元二 様	福本 修 様	村上正彦 様	渡辺優真 様
池崎光恭 様	大平岳人 様	木下徳之 様	澤田曉成 様	武田信彦 様	西村 治 様	福山耀平 様	村松和明 様	渡辺善彦 様
池田信彦 様	大湊 敏 様	木村公優 様	茂岩利恵 様	館 正康 様	丹羽正勝 様	藤井保喜 様	森口 賢 様	和地秀一 様
石井 祥 様	岡崎篤生 様	木村雅美 様	篠塚陽男 様	橘 弘真 様	根布朋和 様	藤本厚造 様	森田明男 様	和地 優 様
石田宗一郎 様	小笠原功 様	木村行成 様	渋谷武夫 様	巽 響 様	野村親信 様	船橋秀輔 様	森田雄祐 様	Ariunzul Avirmed 様
石田社佑 様	岡田英毅 様	熊谷和彦 様	志摩 修 様	田中大地 様	野村俊明 様	古橋秀敏 様	矢尾雅一 様	Beumseok Lee 様
石田 健 様	小川哲男 様	熊埜御堂真 様	島田治夫 様	田中宏和 様	橋迫英次郎 様	北條政利 様	安岡大作 様	Lu Manjing 様
石原 守 様	小河原紘三 様	雲岡重光 様	島野武夫 様	田中まゆ子 様	羽島賢一 様	星野彰男 様	柳沢健二 様	Sebastian BRILLI 様
石俣行人 様	奥山正司 様	倉倉秀実 様	清水政男 様	谷口 優 様	長谷川英司 様	細田 薫 様	山形真澄 様	Soon Chong Neoh 様
磯島光男 様	小此木大典 様	黒川知文 様	清水庸如 様	谷崎 太 様	長谷川恵子 様	堀田武靖 様	山口 岳 様	WEN LI 様
伊藤欣一 様	尾澤英夫 様	桑原隆人 様	下地 寛 様	多部田雅史 様	花輪博忠 様	堀江 隆 様	山崎俊男 様	Yeemon Thant 様
伊藤 淳 様	小野田慎 様	桑原雅規 様	下平三樹 様	王元宏志 様	馬場孝次 様	堀川真一 様	山下隆雄 様	36年卒業同期会 様
伊藤四郎 様	小尾 聡 様	兼定十起彦 様	白石弘樹 様	溜箭俊之 様	浜崎伸二 様	本田 豊 様	山下訓正 様	昭和31年Pクラス会 様
伊藤忠三 様	織岡三知夫 様	高祖 隆 様	城森 宏 様	陳 威宇 様	浜田健一郎 様	前崎豊英 様	山田真二 様	一橋大学昭和37年会 様
伊藤ちひろ 様	柿田浩之 様	高着敦史 様	城山貴司 様	千々松英樹 様	濱田 工 様	前島梢子 様	山田大輔 様	一橋大学昭和45年会 様
伊藤規雄 様	柏原一公 様	小阪正幸 様	進藤 正 様	鶴田雅男 様	濱田 浩 様	前山雄三 様	山田達也 様	流雲会(雲嶋良雄ゼミ) 様
伊藤泰昭 様	片上雅仁 様	小島光正 様	進藤久佳 様	徳山淳記 様	林 博之 様	増田 修 様	山田 哲 様	他101名・1団体
井上博雄 様	片桐忠孝 様	古寺永治郎 様	杉江勝利 様	利光哲生 様	林 雅和 様	町塚栄介 様	山根正彦 様	
袴 昭一 様	加藤聡一郎 様	小林和道 様	砂田和之 様	永井 隆 様	早瀬 勇 様	松岡 弘 様	山本 明 様	

卒業生のご家族

16名(7,880,000円)

池田雅博 様	近藤裕二 様	早田弘和 様	松島訓弘 様
梶原千代子 様	権藤彌栄 様	日臺松子 様	矢田部建雄 様
鎌迫 陽 様	佐藤 燕 様	藤原克彦 様	山本須美枝 様
小池芳子 様	下野 賢 様	本田吉宏 様	他1名

在学生・在学生のご家族等

162名(10,531,000円)

阿部トモノリ 様	河合由美 様	清水 修 様	館野澄夫 様	廣瀬修二 様
有吉弘敏 様	川畑宜勲 様	下兼輝佳 様	田中昭弘 様	藤重かおり 様
飯浜忠俊 様	北川雅浩 様	菅原郁代 様	田中康弘 様	藤原潤一郎 様
家元勝弘 様	木村政勝 様	杉原達哉 様	田中能彰 様	法邑俊和 様
石川洋子 様	久保晴彦 様	杉本周美男 様	堀部道代 様	堀部道代 様
磯田 卓 様	倉本敬治 様	杉山奈津子 様	土田 真 様	三縄元章 様
伊藤真喜子 様	栗生卓也 様	鈴木康晋 様	友成亮太 様	山口真貴子 様
井上康子 様	黒澤真史 様	須藤健太郎 様	土井玲子 様	山下 修 様
岩下美波 様	小杉知之 様	妹尾 充 様	中野浩志 様	山下優之 様
上野博司 様	小林雅之 様	瀬谷貢一 様	中村健一 様	山本博之 様
王 曉冬 様	小森美紀 様	早田 宰 様	長野俊義 様	吉村雅弘 様
大河内淑江 様	齋藤恭子 様	高井 均 様	西村文成 様	綿貫敦文 様
大塚章生 様	坂井孝博 様	高木俊和 様	新田摩耶 様	住吉 敬 様
岡田真志 様	塚々木猛 様	高澤 仁 様	根川興義 様	鷹野 敬 様
小川一樹 様	佐宗加奈子 様	高橋 剛 様	野内陽子 様	谷美由紀 様
片山淳詞 様	佐野嘉子 様	武居良行 様	橋本勝幸 様	姚 懿 様
加藤千夏 様	塩原 強 様	竹田百合子 様	浜崎浩一 様	他74名
金丸剛久 様	澁谷美也 様	竹之内公志 様	早川剛史 様	

一般の方

13名(1,742,000円)

大野良子 様	酒井貴広 様	宮城史門 様
河合光政 様	本田孝雄 様	凌 志棟 様
小松隆宏 様	三澤建美 様	他5名

企業・法人等

28団体(682,145,591円)

株式会社イノベスト	様
一般財団法人エンデパー・ユナイテッド・ホールディングス基金	様
共和株式会社	様
株式会社グッド・ニュースアンドカンパニーズ	様
株式会社KDDI総合研究所	様
株式会社KPMG FAS	様
公益財団法人交通エコロジー・モビリティ財団	様
一般社団法人如水会	様
シンプレクス株式会社	様
株式会社シンプレクス・インスティテュート	様
株式会社セブン&アイ・ホールディングス	様
有限会社ダイナミック	様
大和証券株式会社	様
公益財団法人Tazaki財団	様
TMI総合法律事務所	様
東急株式会社	様
東邦レオ株式会社	様
日鉄ソリューションズ株式会社	様
公益社団法人日本観光振興協会	様
一般社団法人一橋大学コラボレーション・センター	様
一般社団法人一橋大学知識創機構	様
株式会社Plan・Do・See	様
三井住友信託銀行株式会社	様
三井不動産株式会社	様
一般社団法人明治産業人材育成支援会	様
Bai Xian Asia Institute Limited	様
他2団体	様

本学教職員

14名(7,150,000円)



# 夢をつなぐ、未来をひらく。

より一層の研究・教育の高度化・国際化のために

## 一橋大学基金へのご支援、心より御礼申し上げます

ご卒業生、ご卒業生のご家族、在学生、在学生のご家族、一般の方々および企業・団体等の皆様におかれましては、日頃より一橋大学基金をご支援いただき、厚く御礼申し上げます。

ご寄付いただきました方々へ感謝の意を込め、2023年1月1日から2023年12月末日までにご寄付いただいた方々のご芳名を掲載させていただきます。なお、公表不可の方及び本学教職員につきましては掲載しておりません。

なお、ご寄付いただいたすべての方（公表不可の方は除きます）のお名前を「一橋大学基金寄付者芳名録」に掲載し、本学の歴史に末永く留めさせていただいております。さらに、高額のご寄付をいただいた方々のお名前を国立西キャンパス本館1階及び如水会館14階の「一橋大学基金寄付者銘板」に記し、末永く顕彰させていただいております。

これからも一橋大学基金への温かいご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

～2023年10月より創立150周年記念募金の募集を開始しましたところ、すでに多くの方々にご寄付をいただいております。創立150周年記念募金にご寄付いただいた方々のご芳名につきましても、以下に掲載させていただいております。～

募金総額

2023年12月末現在 約144億円

### 【ご寄付者ご芳名】 ※五十音順に掲載させていただきます。

#### 卒業生

515名・11団体（180,619,035円）

ご寄付金額（累計）

100万円以上

94名・3団体

秋吉謙一	様	加藤和弥	様	高木佳子	様	長谷川圭一	様	山田英夫	様
鮎澤多俊	様	金子治平	様	高萩光紀	様	花岡和彦	様	山本貞雄	様
飯田秀郷	様	鹿野泰孝	様	高橋達彦	様	半田敏雄	様	山本亘苗	様
五十嵐和幸	様	神田芳雄	様	竹井忠夫	様	平塚英一	様	湯本達也	様
磯部英明	様	倉橋和弘	様	田中好輔	様	藤原潤也	様	吉崎達彦	様
伊藤通	様	軍司育雄	様	種田幸一	様	古澤照一郎	様	米山（旧姓長内）大介	様
伊藤泰彦	様	小松幹太	様	辻田文也	様	星崎功明	様	渡邊達也	様
鶴澤 静	様	小松 豊	様	坪沼一成	様	堀地史郎	様	渡邊 徹	様
江崎正道	様	斉藤国雄	様	富岡一矩	様	前田豊治	様	渡辺泰行	様
大軒由敬	様	齊之平伸一	様	中川良雄	様	松林 明	様	YOUMING LU	様
大羽宏一	様	柴田朋昭	様	仲野嘉一	様	松本正義	様	一橋三八大学支援会	様
岡本 毅	様	下村千秋	様	長浜 大	様	眞野彌太郎	様	一橋大学	様
小川昭一	様	白石欣三郎	様	中村 司	様	三神誠一郎	様	ラグビーフットボール	様
奥 洋一	様	白土久彌	様	中村哲二	様	溝口俊一	様	OBクラブ	様
奥野一丸	様	新 悟	様	中山憲一	様	三宅伊智朗	様	他12名・1団体	様
面川秀之	様	神保裕一	様	二村英之	様	村田大郎	様		
梶原徳二	様	鈴木 喬	様	野村覚藏	様	本柳良夫	様		
片山雄一	様	関 哲	様	野村政弘	様	八木 健	様		

ご寄付金額（累計）

50万円以上100万円未満

36名・2団体

青木雅宏	様	國富 隆	様	鈴木大一郎	様	新原徹郎	様	森山 透	様
井関直彦	様	黒川正樹	様	瀬川 徹	様	二階堂暢俊	様	S42同期会	様
伊藤和彦	様	小池靖久	様	高松克弘	様	平田由夫	様	平成4年卒業	様
江口栄治	様	児嶋 隆	様	辻卷 孝	様	平原重利	様	（昭和63年入学）	様
片山安夫	様	小菅 節	様	鶴巻 暁	様	藤井恰二	様	有志一同	様
河辺 勉	様	佐藤正弥	様	戸倉圭太	様	三木英明	様	他8名	様
菊田良治	様	下田和夫	様	英里子	様	水野俊秀	様		

### 一橋大学広報誌「HQ」

〈編集・発行〉

一橋大学HQ編集部

〈編集部長〉

副学長（広報、ダイバーシティ担当） 野口貴公美

〈編集長〉

経営管理研究科教授 鷺田祐一

〈編集部員〉

経済学研究科教授 山重慎二

法学研究科教授 酒井太郎

社会学研究科教授 堂免隆浩

言語社会研究科教授 中井亜佐子

経営管理研究科教授 藤川佳則

ソーシャル・データサイエンス研究科准教授 加藤 諒

経済研究所教授 桑原 進

〈外部編集部員〉

株式会社キーコンセプト 吉田清純

〈印刷・製本〉

島津印刷株式会社

〈お問い合わせ先〉

一橋大学総務部広報・社会連携課広報係

〒186-8601 東京都国立市中2-1

Tel: 042-580-8032

https://www.hit-u.ac.jp/

pr1284@ad.hit-u.ac.jp

※本誌掲載の文章・記事・写真等の無断転載はお断りします。

### 編集部から

一橋大学は、2025年に創立150周年を迎える。今年は各種行事の本格化が予定されている。節目の年にむけて、学生のため、大学のため、そして社会のために、一歩ずつでも改革を進めていければと願っている。日本では、偏った理系大学偏重政策のせいか、文系中心の本学は予算規模も比較的小さく抑えられてしまっている。新しい施設や校舎の建設もばったりと止まってしまっていて久しい。しかし、他の先進国では、文系中心の大学であっても非常に大きな年度予算で運営されている大学が少なくない。そのような大学は、もちろん多くの寄付を受けているのだが、寄付以外にも、多様な「収入源」を確保しているのも事実である。国からの交付金も日本よりもかなり多いし、企業からの研究費もたくさん受け入れていて、学費も高い。本学も創立150周年を機に、「収入源」の多様化を進め、より強靱な財務体質へと転換していければ良いのだが、道のりは遠い。（鷺田祐一）



一橋大学の「今」はこちらから!.....→

一橋大学広報サイト  
HQウェブマガジン



リサイクル適性 (A)

この印刷物は、印刷用の紙へ  
リサイクルできます。

